
鷹の娘は何を見るか

リード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鷹の娘は何を見るか

【Nコード】

N4689L

【作者名】

リード

【あらすじ】

あんまり表情が動かない、不器用な女の子が弟を庇って転生した。そんな不器用な女の子が、勘違いされながら海賊の世界を駆け抜ける。

冒険ファンタジー！！

番外編はなんとどうか、甘い、です。

リテイク終わりました。

少し、手直した所はありますが本筋は変わりません！

プロローグあるいは私が何故転生したのかについて (前書き)

この小説は、構造が多めです。

少し原作と違う所もあるかもしれませんがご了承ください。

ブローグがあるいは私が何故転生したのかについて

私が最後に聞いた音は風切り音と、うざったい関西弁。とりあえずあの双子はどうにかなくなってしまえ。そう思った瞬間、私は空を飛んだ。

正確にはビルから落とされた。

私が死んでも海人やガゼルが逃げられるように、御剣みつるぎの家は動かしてある。

家には祖父がいるし、跡取りには鷹臣と鷹継がいる。

大丈夫だ。問題無い。

風に包まれながら、空を翔る双子に向かって嗤った。

「……ざ、まあ」

最後に感じたのは衝撃だった。

目を覚ますと、訳が分からなかった。

私は、死んだのに

頭からコンクリに激突したのだ。

完璧に死んだはず、なのに、何故、生きている。

手を握ったり閉めたりしてみた。

……きちんと動く。

足も付いてる。

「なんで……」

怖い、としかいえない。

「なんでって、お前が死んだからだよ」

声が聞こえた。

「御剣燕^{みつるぎえん}。お前は死んでるんだ」

「死んだ、のか」

「ああ」

「なら、何故、私はここにいる」

死んだのなら、ここも認識できないはずだ。
自分の認識が出来るのならば、何故？

「俺のミスだ」

「は？」

胸を張って言う事じゃないのは確かだ。
ハッ倒しても文句は言えないはず。

「お、落ち着け話せば分かる……！」

「話せばいいんだろ、さつさと話せ。こついつ時は何かがあると相場は決まってる」

ニツコリ笑いながら口を開くと青ざめた男がいた。そんなに、怒らなくてもいいのにな？

「つまり、私は死ぬはずではなかった、と」

「あ、ああ。全部俺の手違いだ。量の問題で、同じ世界で生き返らすのも無理だから、お前の魂を別の器に入れる。要するに、今流行りの転生ってやつ？」

「流行りは知らんが、その器という名の肉体の持ち主は？」

これで、死んじゃうとかだったら私は人殺しだ。人の身体と人生を奪い取るってことだろう？

「安心しろよ、御剣燕。生まれるはずだった魂が死んで抜け殻状態になっている体の空きがあるからなあ。そこにぶち込む」

「…そうか」

…ふと、その子はどうなったんだろうと考えた。ソレを見越したように目の前の男は言う。

「時々なあ、いるんだよ。持つべき魂モを持ち合わせない虚うつろの体つてのが。体は生きているから簡単な喜怒哀楽とかは持つ。だが大抵は魂が無いからすぐ死ぬ。その虚にお前をぶち込むだけだからお前は何も殺さないで済むわけだ。その両親も子供が出来て喜ぶしなあ」

「っ……っ」

それなら、いいのだろうか？

「お前の死は俺のせいだしなあ、なんか特典付けてやるよお。何が
良い？」

私は考えた。

というよりも何処に生まれるんだ私は？

「……私はどこに誰の子供になって生まれるんだい？」

思いつきりファンタジーな世界だったらどうしようか、
ファイナルでファンタジーな世界なら逃げるぞ私は

「one pieceの世界。“鷹の目”ジェラキユール・ミホーク
の娘」

っはい、思いつきりアウト!!

グッバイ私の平穩!!

こんにちは身の危険!!

「じゃあ、容姿をある程度“鷹の目”に似せて、運も良くしてくれ。
あと、鷹^弟臣の人生を保証して欲しい」

「……それだけか？」

「キミね、これだけあれば十分だ。後は自分でどうにかしなきゃっ

まらないだろう？それに、鷹臣は家族だ。 全てを順風満帆と
いうわけではなくていい、新しい家族を見つけれられるように普通の
人生を送れるようにしてあげただけだ。」

はあ、と溜息を吐く。

目をつむれば思い出せるのは弟と過ごしたささやかな過去。幸せな時間

姉として願う、あの子の幸福と新たな家族を得られるように、後悔
だけはさせたくないから。

「まあ、これぐらいならいいか。・・・弟の方は任せろ、お前がい
なくなつた分は幸せになれるようにする。あとは本人の努力次第だ
ろ。」

「ありがとう。あと・・・何でさ。私、キミの扱い悪かつたと思う
んだけど。弟の事は分かるんだけどね、生きるはずだった私の分も
あるし・・・。」

「弟の方は義務だが。他のは面白そうだからだ。ここに来る奴つて
俺の事分かるとさあ、すつげえ萎縮したり敬語になつたり、怯えた
りすんだよねエ。俺の事を知つても、そういう風に俺に言う奴つて
お前が生まれて初めてなんだわ。そういうところがなあ、たぶん俺は
気に入つたんだよ。」

「そうか・・・。」

「んじゃ、お別れだあ。・・・そろそろ時間だ。」

神様の持っている杖が光りだし。自分の体が少しずつ消えていくの
を感じる。

「おい」

「なんだあ御剣 燕。俺に、まだ言つことがあるのかあ？」

「・・・君の名前は何だ？」

「おいおい、なんでそんなことを聞くんだあ？・・・お前は生まれ変わるんだらう？」

「別に自分の名前を知られているのに、相手の名前を知らないのも気分が悪い。それに私は気に入った相手の名前ぐらい知っておきたいんだよ」

にやっと笑いながら言う。

「・・・初めてだなあ、俺の事を知って、名前を教えろっていう奴も。いいぜ、教えてやらあ、俺の名前は藍嚙ランラウだ。忘れ
るなよお、御剣 燕」

藍嚙は如何にも愉快そうに笑う。

「誰が忘れるものか、またな藍嚙」

私も笑いながら告げる。

最後に願ったのは、弟の事。

自分の分も幸せになれるように・・・

その言葉と願いを最後に

私と世界を繋ぎ止めていたものが崩壊し、

私の体は落下し始めた。

そして私の意識は急速に真っ白な世界から、
真黒い世界に塗り変わっていった。

ブログがあるいは私が何故転生したのかについて（後書き）

これが初めての投稿になります。

至らない点もあるかもしれませんが、頑張ります。

応援よろしくお願いします！！

一話〱私が生まれ変わった時の出来事について〱(前書き)

この話は構造を含みます。

作者も初投稿なので文章の荒さはご了承ください。

一話、私が生まれ変わった時の出来事について

SIDE：御剣 燕

鮮烈な痛みに叫び声をあげて絶叫する。

ギョツと瞑った^{まぶた}瞼を開くと今まで真つ黒だった世界が、鮮やかに色づいた。

「

」

・・・全然音が聞こえないし、ギリギリ見える目で見えるのは私を抱いてる優しい容姿をした黒髪の女の人と彼女の傍で変な威圧感出しながら腕組みして立っている鋭い眼（しかも金色の目だ、珍しいな・・・）の青年だし。

（元が良いんだから、もっと柔らかい表情をしたらいいのに）

しかし、黒い外套^{マント}といい首にぶら下げている金色の十字架が妙に見覚えがある気がするのは私の気のせいだよね？

確か私はONEPIECEの世界に転生したんだよね？

ONEPIECE、ONEPIECE・・・あれ、何か喉まで出かかってるんだけど何だろうか？

思い出したくない記憶類に分類されているような気がするけど・・・

思い出さないといけないような気がするし、あの神^{ウツクシ}に言われた私の人生において重要な何かの記憶のような気がする。

でも、何となく思い出したくないようなとっても微妙な感じの記憶のような気がする。

ノイズが耳から少しずつ消えていく、ようやく耳の調子が良くなっ
たらしい、

「ミホークさん」

「ああ」

ミホークさん？

それって、鷹の目ですよね？

「うぎゃああああ！！！！（ちょ、マジですか！？しかも思い出
したし！！なぜにこのタイミング！？）」

なんか、ランラウ藍嚙としてた会話とか思い出したー！！！！

本当に？

本当にあの人が“鷹の目”が私の父親なのか？
・・・ありえないだろう。

夢だろこれ。

だって、ありえないし。

剣道みたいなことはしてたけどそれしか共通点がないし。

夢だ、夢。

全部が夢幻だ。

早く目よ覚める……

早く目が覚めないとまずいだろう!?

* * * 少々お待ち下さい * * *

コレが夢じゃないと確認した後、身体の確認を始める。

往生際が悪いな我ながら……

しかし小さいな私の手

思わずなんかプニプニとしたモミジの手を傍にいた人伸ばす。

傍にいる人〃母親は私を抱いているので除外、

ミホークさんと呼ばれた目つきの鋭い人しかない。

そのせいか何を考えたのかミホークらしき人は、戸惑った表情で私を抱え上げてくれた。

あー、微妙に嬉しいけど何か複雑。

死んだら赤ん坊だし、この身体の魂は藍嚙曰く死んでるらしいし。

抜け殻の身体に私の魂をぶち込んだらしいし。

心配ないのかもしれないけど違和感はぬぐいとれない。

抱きあげられて、近くなつたミホークらしい人に手を伸ばす。

すると、男の人特有の硬いけれど温かい頬に指が触れた。

あ、このぬくもりは本物だ。

人の、ぬくもりだ。

けど正直実感わかないな。

父親の彼がまだ若いって事は過去だよな。

てかあれだ

この年で子供できちゃうって事はONE PIECEの本編の頃にな
ったらどうなるの？

あの飛ぶ斬撃とか使えるようになるのかな私。

てか、私も戦うようになるのか？

・・・無理無理無理無理！！！！

ある程度、話の筋は覚えてるけど、あれと現実は違う！

あの“鬼”のような祖父に仕込まれた剣術も役に立つかどうか・・・

くっ、無理だ！

スペック上げてもらっただけど無理！

さすがに死んでしまう！！

・・・えらいトコに生まれ変わってしまった。

side：ミホーク

俺の子が生まれたのは北の海ノースブルーでは珍しくない雪の降っている夜の事
だった。

産声をあげて生まれた子はいつの腕に抱かれたまま、俺に似た金
色の瞳で俺を見上げてくる。

「ミホークさん、この子が。あなたと私の娘ですよ」

「これが俺の娘、か」

・・・実感がわかないがあいつの声で、認識させられる。
俺の血を受け継ぐ子。

いずれは俺の剣を継ぐかもしれない、娘。
俺とマリアにできた、子供・・・

髪の色は、黒。

目の色は、金。

顔立ちは赤子だがらかままだはつきりとはしないが、
女兒なのだからきつとマリアに似るだろう。

俺がそんな事を考えている間に俺の娘は、
のそのそとおくるみの中で身体を動かし紅葉のように赤く小さな手
を俺の方に伸ばしていた。

俺にどうしようと？

「ミホークさん」

「ああ」

マリアが心なしか興奮した様子で告げるのに冷静を装って頷きながら、赤子を見つめてみた。
しばらく経つと、赤子はむずがり始めた。

「うぎやあああ！！！！」

耳を劈くような声だったが、幸いにもすぐに騒がなくなり、「あー」だの「うー」だの言っただけで俺の方に懸命に先ほどよりもっと手を伸ばしてきた。

一瞬驚いたが、赤子のキラキラした眼差しを見て、負けた。マリアにそっくりだ。こいつ。

恐る恐るできるだけ力を籠めない様に赤子を腕に抱いた。ふにゃつとしている…。潰しそうだ…。

戦々恐々としている俺の気も知らずにマリアは頬笑み、赤子は俺に気を許したのか上機嫌で手をあけたりしめたりし始めた。

これが俺の子。

小さな手が、懸命に俺の方に伸ばされてくる。

どうしたらいいのか分からず途方に暮れ、思わずマリアを見ると何時も浮かべる優しげな微笑と頷かれた。

その笑顔に後押しされながら、赤ん坊を持ち上げ顔に近づけた。

俺の腕の中にいる壊してしまいたいような子供を恐る恐る抱えなおせば、紅葉のような手が俺の事を確かめるように頬を触れた。

ペタペタと、確かめるように俺の頬を撫でた赤子は、無邪気に笑った。

瞳の色は俺にそっくりだが　この笑顔はマリアにそっくりだ。

マリアと俺の血をひくただ一人の娘。

男ならばシュバルツ、女ならロンディーネ。
そう決めていた。

「ロンディーネ。お前は、ジェラキユール・ロンディーネだ」

そう、抱きあげた時に、またにこりと笑った。

一話〱私が生まれ変わった時の出来事について〱（後書き）

娘の誕生に、密かに感動中の鷹の目。

そしてまだ、鷹の目と、オリキャラの藍嚙ランラウとマリアと呼ばれる女性

しか出てきていませんけど。これから頑張って投稿します。何でも
いいのでコメントをください、待ってます!!

二話、私が幼馴染と交わした約束について、

side：ロンディーネ

そんなわけで御剣^{ミツルキ} 燕改め^{エン}、ジエラキユール・ロンディーネです。

自分の事が自分でできる年齢になるまでいろいろな事がありました。

“海賊王”^{かいぞくおう} ゴール・D・ロジャーが東の海^{イーストブルー}の始まりと終わりの町口
ーグタウンで処刑されたことよって大海賊時代が幕を開けたこと。

その後すぐに、父さんが、剣士として偉大なる航路^{グラントライン}に旅立ったこと。

あと、母さんが体調を崩すことが多くなったこと。

目下の処、私が一番困っているのは、

「なあ、ディーネ。大人になったら、俺と一緒に海に出て海賊やる
う」

私の横に座りながら笑顔で話しかけてくる黒に近い藍色の髪に青銀^{せいぎん}
色の目をした褐色の肌の少年。整った顔立ちをしているから将来は
引く手数多だろう。

「（なんで、こんなに気に入られたんだろう？）・・・ロー、私は何度キミに言われても海賊には成らないよ・・・」

読んでいた航海術の指導書をパタンと閉じて立ち上がる。

「いや、絶対お前は海賊になるね、絶対にな。絶対に俺の仲間にする」

ローが、青銀の瞳をランランと煌めかせて、力強く断言する。真っ直ぐな眼差しで私を見た。

その瞳の輝きに飲み込まれそうになる。宝石よりも美しい青。

「・・・ほお、そこまで断言するなら賭でもしようか？
ロー、キミが大人になって海に出た時から、3年で私の事を口説き落とせたら、仲間になるよ。約束する」

ローが言ったことに本気の響きを感じ取って、こちらも本気でじつとローを見据えて告げる。

「・・・本当か？」

青銀色の瞳が雄弁に私に問いかける。

「当たり前だ、私は守る約束しかない主義だ。それに、友達との約束は死んでも守るぞ」

ニツと笑いながら告げる。

「……約束だ」

私たちの声が重^{ダウ}って、ローと二人、思わず顔を見合わせて笑った。

SIDE：未来の超新星、死の外科医

「なあ、ディーネ。大人になったら、俺と一緒に海に出て海賊やる
う」

俺の横に座って本を読んでいる青みを帯びた黒髪に月のような金の
瞳。

人形のように整った顔をした少女に笑いながら言う。

「……ロー、私は何度キミに言われても海賊には成らないよ……
」

ディーネは何時もそうやって俺の誘いを断るけど、俺の夢、“ひ^ッと
ツナギの大秘宝”を見つけてることを笑わずに肯定してくれた。
それに、誰よりも海を愛しているのにあいつは海賊にならないと言
う。

俺はあいつと一緒に海賊をやりたいんだ。

ディーネは、形のいい眉を若干歪めながら、読んでいた航海術の本をパタンと閉じて立ち上がる。

「いや、絶対お前は海賊になるね、絶対にな。絶対に俺の仲間にする」

彼女の綺麗な顔を見つめながらシツカリと告げる。

「・・・ほお、そこまで断言するなら賭でもしようか？」

「キミが大人になって海に出た時から、3年で私の事を口説き落とせたら、仲間になるよ。約束する」

俺が伝えたことに本気の響きを感じ取ったのか、金の瞳を鷹のようにランランと輝かせながらディーネは答えた。

「・・・本当か？」

おもわず、じっとディーネの眼を見つめる。

「当たり前だ、私は守る約束しかない主義だ。それに、友達との約束は死んでも守るぞ」

ディーネが珍しくポーカーフェイスを崩してニツと笑みを浮かべて告げる。

「……約束だ」

俺たちの声が重^{ダウ}って、ディーネと二人、思わず顔を見合わせて笑った。

二話、私が幼馴染と交わした約束について（後書き）

間が開いてしまって申し訳ありません。修学旅行に行っていました。

この小説、ロンディーネが小さい間は構造話が多くなると思いますが、そこら辺はご了承して下さい。

なお、ロンディーネがローに何で気に入られたのかは、知りたい方がいらっしやったら番外編として上げさせていただきます。

これからも頑張って、投稿させていただきます。

三話、私が母さんと過ごした時間について（前書き）

この話は、捏造が多大に含まれています。

三話 私が母さんと過ごした時について

SIDE：ロンディーネ

私の日常は普通とは違った色合いを織りなしている。

朝早くに起床。家の手前にある朝は人通りの無い、広場の様に拓けた場所に移動。

そこで素振りを行い、帰宅。

私達が住んでいるのは町外れの結構大きい家、ただ広い敷地の中にはもう使っていない道場がある。

故郷である島は一年中雪で覆われた北の海ノースホルのとある島。

午前から夕方まで下町でグレーゾーンに近い何でも屋トラブルシューターの仕事。

結構危険だけど、それでもしないとキツイ。

それに、生活がかかっているからしょうがない。

そんな事をつらつら考えつつも玄関のドアを開ける。

「ただいま」

「お帰りなさい、ロンディーネ」

「うん。あ、これ新聞ね」

「あら、取ってきてくれたの？ありがとう」

手に持っていた新聞を手渡し、汗かいたシャツを着替えに行く。

着替えてすぐダイニングに降りると、温かそうに湯気を立てている朝ごはんが用意されていた。

母さんに声をかけてから食べ始める。

今日は、ジャガイモのスープとうっすら焦げ目がついたトーストにヨーグルト。

お茶をカップに入れて、トーストにマーガリンを塗って食べた。

その途中に母さんから視線を感じて、スープから顔をあげる。

「・・・？」

なにかおかしいんだろうか？

母さんは笑いながら優しく頭を撫でてきた。

頭を撫でられるのはなんだか照れくさい。

まあ、恥ずかしいけど諦めよう。

嫌じゃないし、照れくさいだけで。

むしろ、好きかもしれない。

頭をなでられた後、服の襟をなおしてもらい二人でご飯を食べ終わると一緒に食器を洗う。

母さんはまだクスクス笑っていた。

曰く、急いで服を着てきた時の襟の曲がり方が父さんとそっくり同じらしい。

おいおい、何でそんなところばっか似てるんだ？

そんな穏やかな空気の中。

こほん、と母さんが咳をした。

温かった空間がまたピシリと音を立てたような気がした。

もう、この生活の終わりの時間は近いのかもしれない。

「・・・母さん、大丈夫？」

心配になって尋ねる。

「大丈夫よ、ロンディーネ。いってらっしゃい」

顔を少し歪めながら母さんは言った。

優しい母さんの有無を言わせないその強い声に思わず俯く。

違う。

違うのに。

私は母さんにこんな顔させたいわけじゃなかったのに・・・。

どうして気付かせてしまったんだろう？

もう母さんは私が気付いたことに気付いている。

その事実が重くのしかかった。

「・・・うん、わかった。行ってきます」

俯いたまま玄関のドアを開けて、外に駈^かけ出^だす。

いつもは黒に近いグレーの仕事をしに行くけど。

今日はローと約束している。

母さんに贈る花束を作るのを手伝って貰^{もら}うんだ。

私はそういつの得意じゃないから率直な意見を聞かせてもらえるのは嬉しい。

親不孝な仕事をしている私でも母さんの誕生日ぐらいは仕事をせ^せずに母さんを安心させたい。

私の家族なんだからさ、笑っていて欲しいんだ。
何時死んだっておかしくない病なのに、気丈にふるまっている母さ
んに何もできないのは嫌だ。
それだけは、嫌だから。
私は・・・

「・・・遅いぞ、ディーネ」

待ち合わせ場所に行くとローがもう待っていた。

「ごめん・・・、遅れて」

「・・・べつに。俺も今来たところだ」

フフフとローが笑いながら告げる。

「・・・じゃ、行こうか」

てくてくと目的地に向かって歩き出す。

到着すると、その可笑しさに思わず目をこすった。

「・・・まじかよ」

私もローも呆気にとられた顔している。

それぐらい、ありえない場所。

「いや、私も聞いたけどこんなに凄いととは思わなかった・・・」

「そりゃ、そうだ。普通こんなありえねえ」

今私たちが立っている場所。

冬島なのに満開の花畑がある森の中。

ついでに言つとこの島の七不思議の内のひとつである。

本当にあるとは思わなかったけど。

私に情報を提供した物知り曰く此処の名前は“シークレット・ガーデン秘密の花園”というらしい。

その話を聞いた時、私は思わずどこの世界の物語だと、突っ込みたくなった。

「……だよねえ」

花畑に座つて、花弁や茎が傷ついていない綺麗なものを探す。

大きいものがあればなおいい。

「さて、やるか」

ローもしゃがんで探し始めてくれた。

イェル北の海は日が暮れるのが早い。

しばらくすると私たちのいる花畑も手元が見えないくらい暗くなってきた。

気温も下がってきて背筋が震える。

「……どうしよう、上手くできない」

すこし、目の前が滲んできた。

私の不器用！！

自分を罵りながら必死に手直ししていると、

「・・・おい、ディーネできたぞ」

ローがズボンを雪と泥だらけにしながら、ずいっと綺麗な花束を差し出してくれた。

白色がメインで淡い色合いの花束はとても綺麗だった。

「ロー、ありがとう!」

凄く嬉しくなって思わずローに抱きつく。

「っなあ、離れるディーネ!」

「い、ごめん、ロー」

怒鳴られて、思わずぱっとローから離れて見つめる。

「ロー、キミ。・・・お、怒ってる?」

「怒ってない、少し驚いただけだ。・・・じゃ、帰るぞ」

グイツと手を引かれ歩き出した。

ローの家の前で代筆を頼んでいたカードを受け取り、綺麗に包装して貰ってから家まで走る。

雪道を転びそうになりながらもかける。

早く母さんを喜ばせたい。

ただ、それだけを考えて息を乱しながら玄関を開ける。

「ただいま、母さん・・・」

SIDE：マリア

「・・・母さん、大丈夫？」

一人娘のロンディーネがミホークさんに似たあまり変わらない表情を変えて心配そうに聞いてくる。

「大丈夫よ、ロンディーネ。いつてらっしゃい」

ああ、またこの優しく不器用な子に心配をかけてしまった。

私の侵されている病やまいにあの子は気づいている。

あの人にそっくりの金色の瞳を歪ませ、

私に自分が不安がっている様子を隠すように俯いた。

「・・・うん、わかった。行ってきます」

ロンディーネは俯いたまま玄関のドアを開けて、ダウンタウントランプルシューター下町に何でも屋の仕事をするために駈かけ出だして行った。

・・・誰よりも人を傷つけるのが嫌いな優しい子なのに、不定期に送られてくるミホークさんからの手紙に付いてくる仕送りしおくが、私の薬代や病院代に消えていくのを知った。

それから、あの子は下町ダウンタウンで危険な何でも屋の仕事を始めた。

私が気付いた時にはもう下町ダウンタウンの何でも屋のなかでも腕利きになっていた。
いた。

あの方が小さい頃に使っていた突剣レイピアをどこかから見つけて持ってき

て、仕事に使っているのを知った。

あの人の子供だから剣の才能センスがあると予想はしていたけどあの子には天性の才能があった。

仕事を始めて一年であの子の剣に敵かなう者はこの島にはいなくなつた。あの子は一人で下町で働き、毎日のように食べ物とお金を持って帰ってくる。

私が止めようとするが無茶はしないよとだけ言い、仕事を辞めようとはしてくれない。

あの子は気が付いているのだ。

周りの年頃の子よりも抜きん出て賢い子供は、私が隠そうとした病気に気が付いている。

そして、それを私が知っていることにも気づいている。

知ってしまったからには、私の事を治そうとした。

名医にかかったところで治るはずのない程に進行した私の病にだつて、少しでも効く薬を、腕のいい医者を・・・あの子は私に弱みを見せず、泣かず、感情を殺し、だれが匙を投げようと馬鹿にされようと諦めずに働いて私の病気を治せる医者や薬を探していた。

すべては、私とミホークさんのために

自分の母親と、大好きな父親が悲しまない様に、

あの人の代りに、私を笑わそうとした、守ろうとした。

あの人ケフランドラインが偉大なる航路に行つてから私が悲しんでいるのを知っていたからこそ、ひたむきに。

母親わたしにずっと笑っていて欲しかったから、だから自分のしている危険な仕事については隠し通した（私はあの子の幼馴染に教えられて初めて知った）。

あの子は私が好きで、父親の背に憧れ、彼の娘であることを誇りに思っていた。

父親が自分の母親を愛していることを知っていたから、何としてでも守ろうとした。

だから、尚の事、母親が心配しないように細心の注意を払って、怪我けをしても、分からないように町の何処かで治療していた。

私がそれに気づいた時（ロンディーネの幼馴染で親友の隈のある少年に気付かされた時）の悲しさといったらもう言葉には表せなかった。

親として頼ってくれなかったのも悔しいが、私を治そうとしてくれる優しいあの子を傷つけてしまう危険な道にしかやれなかった自分が一番最悪で最低な母親だった。

「……………私は」

あいつを悲しませるな！

あいつはあなたのせいであんたの前ではもう泣けなくなったんだ！
そう言っただけの事を罵った子どもに初めて気づかされるなんて。

親失格もいいところだ。

あの子はSOSを出していたのに、いつの間にかそれも止めてしまっていた。

諦めてしまっていた。

あの子を親に甘えられない子供にしてしまった。

そこまで考えた所で、息を乱したロンディーネが返ってきた。

「ただいま、母さん・・・」

「お帰りなさい」

「うん、ただいま」

よく見れば、コートも靴も泥と雪だらけになったロンディーネの手には

小さな花束とカードが握りしめられていた。

花なんて、この寒く日が昇っている時間の短いこの島には

春や夏でなければめったに咲くはずのない代物だ。

どこで、そんな花束をつくったのだろうか？

困惑している私をよそに、ロンディーネはゆっくりとそれを差し出し、口を開いた。

三話、私が母さんと過ごした時について（後書き）

三話目です、これからも頑張ります。

追記ですが、ロンディーネにはまだローに対する恋愛感情はありません。せいぜい仲が良い幼馴染としかみていません。誰が、次に出てくるのか楽しみにしててください。

四話〱私が幼馴染に叱られたことについて〱（前書き）

PV10、000アクセス突破しました。

応援ありがとうございます。

四話　私が幼馴染に叱られたことについて

SIDE：ロンドイーネ

母さんが、死んだ。

心臓の病やまいだった。

もっと早く病気を治す方法を見つけていれば・・・。

そうやって、悪くないのに何度もトラファルガー先生に謝られた。

最初は物凄く驚いて、涙も出てこなかった。

それ位、突然に母さんはいなくなつた。

けれど時間が経つにつれて、母がもう存在いないんだと嫌でも理解させられる羽目になつた。

自分の頭が理解してくる。

じわじわ真綿で首を絞めるように、呼吸をするのが苦しくなる。

悲しい寂しいの感情が混ぜこぜになって、一日中母のお墓の前で泣き続けた。

母さんがいなくなつたのを完璧に理解した時から、

私は二週間ぐらい家に閉じこもって出て行くことはしなかった。

私がこんなになって誰も家にこようとはしなかった。

当たり前だ。

前から上手く表情を変えられなかった子供が完璧に能面のつめんの様に無表情になつたのだ。

・・・そんな子供に誰も近づくはずもない。
誰だって、こんな無表情な顔した子供に近づきたいとは思わない。

そう、思ってたのに・・・

「おいつ、ディーネ!!出て来い!!」

普段は物静かで理知的なローの怒りのこもった声が、
母さんがいなくなって広くなった家に響いた。

大切で、この島での唯一の友達で、幼馴染でもあるローにこんな泣
きはらした顔を見せたくなくて、部屋の隅から体をずるずると引き
ずりおこし部屋のドアを背に蹲ひざまる。

「・・・・・・・・・・」

ローも黙っていたら諦めて帰ったのか静かになった。
…心配をしてくれているのに受け入れられない狭量の自分が嫌にな
る。

自己嫌悪というか、何と云うか…自分が嫌だ。

のそりと顔を埋める。

私なんて死ねばいいのに、そう思った瞬間、弾ける音。
飛び散るガラス、舞い込む雪。

それと一緒に黒い影が、窓から現れた。

「よお、いるんじゃないか。・・・ディーネ」

そこには、正直今まで見た中でどれよりも怒っている幼馴染の、口
ーがいた。

S I D E : ト ラ フ ァ ル ガ ー ・ ロ ー

・・・マリアさんが、あいつの母親が死んだ

あいつが花をマリアさんにやってから一週間前の朝の事だった。

あいつがどんな思いで急いで俺の父親の処にやってきたものか、俺
には分からない。

何時もなら、綺麗に整えてある髪を乱れさせ大人でも30分はかか
る道のりを15分で走り抜けてきた。

それで開口一番にこう言ったのには驚いた。

「先生！お願いします。母さんを助けて・・・」

俺はあいつがどんなにマリアさんを慕っていて、病気を治そうとし
たかを知っていた。

だから、マリアさんはそうとうヤバいんだなと思った。

俺の父親が急いで治療に当たったけど、それでも結局、マリアさん
は死んだ。

ディーネに頼まれて俺とあいつがマリアさんを看取った。

あいつは、ディーネはひどく呆然ぼうぜんとしているようだった。

それでも俺の目には、何日かしたらディーネは立ち直ったように見えた。

表面上は

俺がそれに気づいたのはふとしたことだった。

たまたま海の丘の方を歩いていたら時に、押し殺したような嗚咽おえつが聞こえた。

誰だと思ってみてみると、それはディーネだった。
マリアさんの墓の前でしゃがみ込んで泣いていた。

……それが俺が初めて見た、大切な幼馴染の涙。

痛々いたいたしくて見ていられなくなったと同時に、

ディーネの心の重みに気付けなかった自分が腹立たしかった。

けれどももっと腹立たしかったのは、俺の幼馴染で親友（俺はそう思っている）に何も言わないで一人で全部背負い込んで泣いているディーネの姿だった。

それからディーネを問い詰めようとあいつの仕事場ダウンタウン下町に張り込んでいたが、あいつは二週間一向に姿を現さなくなった。

正直、俺は気が長い方じゃない。

だからあの日もディーネがいるのを知ってすぐに行動に移した。

「おいつ、ディーネ！！出て来い！！」

あいつの家に向かって怒鳴った。

いつもはあいつと MARIA さんにきれいに手入れされていた家もどこか煤けている感じだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

流石にイラついた。

家の雨樋と煉瓦の窪みに指や足を引っ掛けて、
体を持ち上げて二階のディーネの部屋に向かう、
そしてベランダから思いつきり力を籠めた蹴りを窓にお見舞いした。

砕け散るガラス。

「よお、いるんじゃないか。・・・ディーネ」

薄暗い部屋には死んだような眼をしたディーネの姿があった。

「なんで・・・、ローが来るの？」

弾け飛んだ窓を唾然として眺めながらあいつは言った。

「・・・俺は、お前が心配だったんだよ！！ふざけんな全部、手前
でため込んでんじゃないやねえよ！！自己解決すんな、少しは俺を頼れ！
なんで、いつもお前はそうなんだ！！何でそんなになるまで自分を
追い詰める！！・・・そんなに俺は頼りなく見えんのかよ！！」

「そ、そんなことはないよ!！」

ディーネが反論してくる。

「泣くんなら一人で泣くな! ! 本当はマリアさんがいなくなっ
て悲しいのに我慢してんじゃねえ! !」

はっとディーネが息をのんだ。そして死んだようだった瞳に苛烈な
光を宿し叫んだ。

「キミに何がわかるんだよ! !」

「わかんねえよ! ! 俺はただお前は一人で泣いて欲しくないだけだ
! 俺に頼れよ、俺はお前の何なんだ! ? ただの幼馴染か、友達か、
違うだろ! ?、俺はお前の事、相棒で親友だと思ってんだよ! ! 親
友だったら、少しは俺の事頼れよ! !」

「親友だと思ってたから、余計こんな姿見せなくなかったんだよ!
! 頼るなんてことしたら対等の立場に立てないだろ! ! キミとは対
等の立場でいたいんだよ! !」

「いいから、もう黙ってる。それに俺に命令するな」

小柄な体をぎゅっと腕の中に閉じ込める。

「・・・離せよ。ロー」

じたばたと腕の中で暴れるディーネを抱きしめる。

「泣きたいんなら、泣けよ。俺は見えないから」

デイーネの頭をぎゅっと俺の服に押しつける。

「ローのばか、何でそんなに優しいんだよ。・・・私はローの事傷つけるような事しかいってなかったのに」

俺の服の背の部分を震える指でつかみながら言う。

デイーネは静かに泣いているみたいだった。

デイーネはこの日から少しづつだけ俺を頼るようになった。

俺にだけは心を開いてくれているようで、俺は凄く嬉しくなった。

俺はそんな日々が海賊になって北の海ノースポルから出るまでずっと続くものだと思っていた。

けど、俺とデイーネのそんな日常はあっけなく、デイーネの祖父と名乗る一人の海軍のじじい（俺はあんな奴が海軍の英雄とは認めない）によってデイーネが連れ去られたことから崩されることになる。

だから、俺は海軍なんて嫌いなんだ！！

四話〱私が幼馴染に叱られたことについて〱（後書き）

この話は多大なる構造からなっております。

〇〇の話し方はこんな感じだよかったんでしょつか？

だれか教えてくださいますか。

感想お待ちしております。

五話、私が祖父に北の海から連れ出されたことについて、（前書き）

この話は構造が多く含まれています。

五話、私が祖父に北の海から連れ出されたことについて、

S I D E : ロンディーネ

母さんが死んでから家に閉じこもっていたら、ローに叱咤された。

ローのおかげで生まれ変わってから初めて人の前で泣いた。

散々ローの服に顔を埋めて泣いた後、

ローに無理やり外に引っ張り出されて、先生たちの家に連れてかれた。

ローが伝えたらしく、先生たちは温かく迎え入れてくれた。

泊ってきなさいと先生に言われて、客間に通された。

けど、眠って目が覚めたら母さんが死んだ日の朝なんじゃないかって怖くて眠れなかった。

眠れなくて、目を瞑るのが怖かった。

それで、悩んでたらローが来た。

ローは私でもすぐに分かる嘘を言って、自分が知ってるいろんな話をしてくれた。

うそつきノーランドは本当に嘘つきだったのか、海賊王の残した宝

の話、

フロリアン・トライアングル

魔の三角地帯の不気味な話、

空島や黄金郷、エメラルドの都はあるのかという疑問について。

気が付いたら、ローと一緒に眠っていた。

母さんが死んでから眠るとずっと出てくる悪夢も見なくなつた。

体調が治つてから何でも屋トラブルシューターの仕事も再開した。

今まで無理して自分でやっていた仕事をローに少しずつだが頼ることも覚えた。

幸せだったし、平和だった。

ローが海賊になつて北ノースの海を出るまでこの幸せがずっと続くと信じてた。

それは続く筈はずだった、なのに何故私は海軍の人に軍艦ふねに連れて来られて、銀髪ぎんぱつの目つきの悪い青年と見つめあわなければいけないんだらうか？

SIDE：スモーカー

・・・めんどくせえ。

なんでおれがこんな事しなけりゃいけないんだ。

そうやって頭をかくおれの視線の先には、
訝いぶかしげにおれをじっと見つめてくる人形のように整った顔をした子供こがいる。

「・・・おい」

「何ですか？」

話しかけたらほとんど感情が籠こもっていないような表情と声で答えられた。

「お前はこの軍艦ふねに乗ってんだ？」

悪事を働く様な面つらには見えねえし、
何よりてめえはまだ子供ガキだろう？と聞いたたら。

「……………はい？」

キョトンと子供ガキらしくない大人の様な面つらした子供ガキが、
初めて普通の子供ガキの様に少しだけだが顔の表情を変えた。

「……………わかんない」

「はあ!？」

おもわずぎよつとして目を剥く。

「…………お兄さんと同じ髪の色をした目のところに傷痕があるお爺さんにあとで説明をするからって、反論を言う暇なく連れて来られて。お昼ごころからからずつとまってただけどお爺さん来ないんだ」

子供ガキが言った人物には一人思い当たりがあつた、
むしろピンポイントで思い当たる人物だつた。

とりあえずおれが思ったことはただ一つ。

何、年端としはもいかない子供こどもを連れてきてるんだあの中將ツ!!

SIDE:ガープ

ようやく、わしの娘……マリアの居場所が分かった。

最後に会ったのは、あいつがあゝの“鷹の目”と恋人になって喧嘩別れになった十年前。

……息子しかいなかったわしに遅くに出来た娘。体の弱いあいつに似たのかマリアも体が弱かった。

その娘が“鷹の目”というルーキーの剣士と恋人になった。

わしはもちろん反対した。

……剣士という職業は海賊とまではいかないまでも死亡率が高い、わしは体の弱い娘にそんな心労を背負わせたくなかった。

そういつとマリアは、伏し目がちに

「父さんは、いつもそうね」

と悲しそうに笑って、そのすぐ後に“鷹の目”と駆け落ちをした。

そして最近、“鷹の目”の嫁と子供が北の海ノースブルのとある島にいと、風のつわさで聞いてすぐに軍艦を動かした。

そうして、その島に到着してマリアの事を聞くと信じられない言葉が返ってきた。

「マリアさんなら二月前に死んだよ、9歳の子供さん残してね。その子供さんは、お医者さんのトラファルガー先生の家にお世話になっているよ」

その言葉を聞いてわしは急いでそのトラファルガーという医者の家に向かった。

そこで整っていて冷たそうな顔立ちを子供に声をかけられた。

「……爺さん、おれの家の前で何してんだ？」

「わしの事より、お前さんの名前は？」

「なんで、見ず知らずの奴に教えるようなんだ。で、爺さんはおれの家に何の用だ？」

あなたには失礼だが、全然父さんに用のある患者には見えないと尋ねてくる子供。

「わしはモンキー・D・ガープ。わしの娘の子供がここにおると聞いて迎えに来た」

その言葉を聞いてわしに視線を合わせていた子供の雰囲気が変わった。

ピリッと空気が冷え込む。

「……あいつに何の用だ？」

子供は青銀色せいぎんの目で睨みつけてきた。
目は冷たさを帯び始め、射殺さんばかりの光りを発し始めた。

「ほお、ここにおるのか」

「・・・何しにここに来た！！あいつが一番悲しんでる時にあんたはいなかったくせに今更あいつに何の用だ！！」

目つきを鋭くしたまま子供は叫ぶ。

感情をこめて激情のままに怒る。

「わしはここにきてから初めて娘が死んだのを聞いたし、孫がおるのを知った。・・・できればわしは孫に会いたい」

子供はそれが本当の事なのか怪しむようにじっと青銀せいぎんの瞳でわしの目を睨みつけている。

「おれが止めないのを分かっただろ、たちが悪い。夕方までには絶対に帰らせるよ」

絶対だからなと視線をずらして子供は言う。

「そつか・・・」

その後わしはゆっくり孫と話してみようと思ひ軍艦に連れて行った。
だがその後すぐにセンゴクに帰還命令を出された為、航海士が船を出航させた。

なので、それからバタバタと慌ただしかった。

子供との約束を思い出したのが、その日の夕方にスモーカーが子供を肩にぶら下げてわしの執務室に急いできた時じゃった。

……どうにかなるかのう。

五話、私が祖父に北の海から連れ出されたことについて、（後書き）

ええっとこれでひとまずローのターンは終わりました。

次からの話は王下七武海や海軍を出したいなあと思っています。

スモーカーがこの軍艦に乗っていたのは、扱わずらいからというんな部署に回されていたんじゃないだろうかと作者が考えたからです。

王下七武海ということで確実にミホークは出します。

近いうちにだします。

誤字脱字間違えなどがあつたら遠慮なく教えてください。

これからも更新頑張ります！！

多少加筆修正しました。

六話〱私が海軍本部にいた時の話について〱（前書き）

訂正と加筆修正しました。

六話　私が海軍本部にいた時の話について

SIDE：ロンディーネ

突然だが私はマリンフォードの海軍本部にいる。

なぜ私が海軍本部にいるのかといたら、モンキー・D・ガープ中将がありえない話だが私の母さんのお父さんだったからである。

このことをガープ中将もといお祖父ちゃんが言った時は嘘ついてんじゃないねーのこの爺さんとまでも考えた。私が一人でポツンと船室にいたので誘拐かと思っいたらしく爺さんの部屋まで連れて行ってくれたスモーカーさんも驚いていた。

そりゃそうだ、こんな子供が海軍の英雄ガープ中将の孫だなんて信じるはずがない。

ましてや、私のファミリーネームはジェラキユールだ。

七武海のジェラキユール・ミホークと同じ。

七武海と海軍の英雄の家族だなんて誰も考えるはずがない。

私はいつもと同じで表情は変わらなかった。

だが、内心、ショックだった。

藍嚙ランラウが言った、なんか付けとくていうのはこれの事かと混乱した頭で考えたりもした。

そうやっている間に軍艦ふねは嵐カームヘルトの帯を超えて海軍本部行きの海流に乗ったらしい、後からスモーカーさんに聞いた事だが話を聞いたあとに私は熱を出して倒れたそうだ。

蛇足だが私が寝込んでいる間に海軍本部についた。

ありえないよな、ありえない。
もう笑うしかないじゃないのこれ。

「はは、　　なんで、私はここにいるんだ」

自分の肩を抱きしめてずるずるとしゃがみ込んだ。

床の冷たさも今は感じない。

気持ち悪さと寒気が体を支配し、がんがんと耳鳴りがする。
モンキー・D・マリアなんて人は原作には出て来なかった。

ジェラキュール・ミホークだったらもしかしたら子供がいたかもし
れないけど、
マリア母さんは話に名前なんて出て来なかったし、存在だってなか
った。

じゃあ、私は

ワタシハナンナノ？

分かった。

でもそんなの分かりたくなかったんだ、自分が異質な存在イレギュラーなんて。

頭の中がグルグルしてきた。

これ以上考えたくなくて、駆け出した。
気持ち悪い。

疑問でいっぱいの中が空っぽになるまで

走る、走る、走る、走る。

時間の感覚と足の感覚が無くなってきた時、思いっきり人の足に激突して止まる。

「う、ごめんなさい」

謝って、走れなくてずるずると座り込んでしまった。

早くいなくなつて欲しいのに、その足は動かない。

誰と思つて見上げたら、

そこには物凄い笑顔を浮かべている金髪チヨイ悪風のにーちゃんがいました。

わあ、悪役っばいお顔してますね・・

「フッフッフッフツ、フッフ、ずいぶん可愛い子猫キティじゃねえか」

すみません、誰ですか？あと、子猫はやめろ、鳥肌が酷い！

みたことあるけど正直ONE PIECEは海人に借りて見てただけだから、

主要キャラと大まかな流れしか覚えていないんだよね。

それと初見で私が女だつてよく分かったなこの人。

中性的な顔をしてるってよく言われるのに、

ローも初対面の時は間違えてたのに（すぐに気付いたけど）。

「……誰ですか、むしろ何ですか」

金髪さんも驚いた顔してるじゃん!!

「フッフッフツ、フッフ。面白え嬢ちゃんだな、気に入ったぜエ」

え、なんで体が動かないの、なんで金髪さんの顔が私の顔に近づいてくるの・・・?

「んんっ!! つああいや、あだあああ!!」

え、何これキスされてんの私?なんで、なんでなんで!?

イヤダ、イヤダ、イヤダ、イヤダ

手や足を全力で暴れさせる。

悔しい、気持ち悪い、ロー、誰かつ!!

「ああああつつ!! だれ、かつ、やだああ、た、スケテ」

涙が滲んでくる。滲む視界の中で懐かしい姿を見た気がした。

目が覚めたら父さんの腕の中にいました。一体何があったんだろう。

S I D E : ドフラミンゴ

面白いものを見つけた。

最近よくガーブが連れて歩いている子供だ。

あまり表情を変えない癖に特定の海兵が近づいていくとその能面の

ような顔の表情を緩めていた。

驚いた。

いつもあの能面のような顔をしているもんだと思ったから。

その子供が泣き出しそうな顔をして走つてたのには驚いた。
だがおれが見たいのはそんな顔じゃない。

「フツフツフツ、フフフ、ずいぶん可愛い子猫キティじゃねえか」

子供が俯いていた顔をあげた。涙をおれに見られなくなかつたらしく、どこぞの神話に出てくるような神殺しの狼と同じ恐ろしいくらい綺麗な金の瞳でおれをうつすら睨みつけた。

「……誰ですか、むしろ何ですか」

そう言ったのには目を見開いた。

「フツフツフツ、フフフ。面白え嬢ちゃんだな、気に入ったぜエ」
能力を使って、そいつの体を動かさせねエようにする。

その子供は自分に起こっている事がよくわからなかつたらしくて綺麗な目を見開いていた。

「んんっ!!っああいや、あだあああ!!」

逃げる舌をおれの舌で絡め、吸い、弄んでみる。

そのたびに体を跳ねさせ、手や足を全力で暴れさせる。

「ああああっ!!だれ、かつ、やだああ、た、スケテ」

目の淵に涙が浮かぶ。

その様子が愉快で楽しんでやろうと襟元に手をしたら、ゾクリとする殺気とナイフが飛んできた、咄嗟に能力を解除して子猫から手を離れた。

子猫にも分かるほどの凄まじい覇気と殺気がこの場を支配した。子供はビクンと体を硬直させると気絶した。

振り向くとそこにはもうお前“鷹の目”から“鬼”にでも改名した方がいいんじゃないの、とおれが思ったほど恐ろしい目つきをした鷹の目がいた。

「俺の子供に何をしている貴様……」

「へ、お前の子供？」

ポカンとしてる間に鷹の目が斬りかかってきた。

「うおっ！あぶねえな」

気が付いたら、鷹の目の腕の中には子がいた。

「これが無事だったからいいが、貴様今度これに触れてみる。次はその首叩き落としてくれる」

ちっ、こいつが出てくりゃめんどくせエことになる。

「……フッフッフ、フフ。だったらそいつに首輪でもつけておけよ」

おれの言葉に不機嫌そうに鷹の目が眉を寄せた。
おれはそれをフッフと笑って踵を返した。

さあ、おもしれえことになりそうだ。

六話〱私が海軍本部にいた時の話について〱（後書き）

もうちょっとしたら海軍本部から出して、父さんと旅します。
いろいろなキャラに会わせたいと思っています。
コメントお待ちしています。

七話、私が父さんと過ごしている日々について (前書き)

ユニークアクセス7000突破しました!! 応援ありがとうございます!!

七話、私が父さんと過ごしている日々について

SIDE：ロンディーネ

ああ、遠いお空の上にはいらっしやるお母様。

私も、もしかしたらそちらにすぐに行くようかも知れません。

自分でも何て親不孝者だと思えますが、この場合仕方ないと思います。貴女の旦那様であり、私の父親であるジェラキール・ミホークは、鷹ではなく鬼でした。どこか、昔（前世）でも似たような事があつたかもしれませんが、冗談抜きで死にそうです。

なぜかというところ今死にそうになるぐらい濃厚で苛烈な父さんの剣術特訓を受けているからです。

しかも、一対一で。

一騎打ちが剣士の誉れなんて抜かした人間を叩きつてやりたい気持ちです。

あ、頬が斬れました。

ああ、お空の上のお母様。

ノースホルト

トランプシューター

私はほんの一年前までは北の海の故郷で何でも屋をしていたから平穩とは言い難い。けれど大好きな母さんやロー（将来海賊になって私を副船長にしようとしている。幼馴染で親友です）と一緒に幸せな日々を送っていました。

なのに、お祖父ちゃんにマリソフォードに連れてかれてから、平穩とか平和とかいうモノが物凄い勢いで私から去っていくような気がします。

父さんに剣を教えると言われて浮かれてたのがいけないのでしようか？ああでも、前世から剣の道を歩んできた私は世界一の大剣

豪に教えてもらえるなんて、浮かれてもいいことでしょう？普通その修行で死にかけるなんて思わないし・・・

「ッ！！？」

でもこれはきつ過ぎじゃありません？

ガキンツと鈍い鋼の削れる音が、空に吸い込まれていく。

私は父さんが繰り出してくる白い刃を受け流し時には迎合させながら、何度も剣を交差させる。そのたびに綺麗な火花が散った。

時に上に飛び、下がり、攻め、防ぎ、しゃがんで、私は父さんから繰り出される斬撃をギリギリで避けながら、父さんに向かって必死に剣を振り下ろす。

今の私では父さんに勝てない。

唯一誇れるのが速さだけど、それも父さんには遠く及ばない。

それでも、粘るしかない。

修行中のこの人は、鷹じゃなくて鬼だと何回も思った。

まさに鬼の様な速さと厳しさで行われている剣戟けんげきの嵐は、唐突に終わりを迎えた。

雰囲気が変わった。空気が急速に塗り替えられる。

鷹の様な金色の目がさらに鋭く私を射抜き。

ズウンと重くなる空気が体に纏わりつく。

これはヤバい。

ゾクリと鳥肌がたった。今まで積み上げてきたナニカが告げる。コレにあたったら死ぬ。避ける。さもなければ、受け止める。

頭の中に警報サイレンが鳴り響き、突きを繰り出そうとした腕をとっさに引き戻す。
紙一重だった。

私の剣が父さんの刀を防ぐ。

ギギギギと耳障りな音とともに火花が散る。

刀と剣が触れ合った箇所が、軋み歪む。

それを聞いて、自分の失敗を悟った。

瞬間、後ろに飛ばうとした私の体が木の葉の様に吹き飛ばされた。

熱い、そうとしか思えない痛みが体を刺す。

しかし、地面に手をついた反動で空中で体を立て直し立ち上がる。

だが、素早く立ちあがって戦おうとした時に気付いた。

剣が折れている。

見事に刀身が弾け飛んで、柄とブレードガードの部分しか残っていない。

父さんが剣を鞘におさめた。

気を抜くと痛みと刀身を折られた屈辱と傷の痛みで涙が零れだしそうになるのを堪えてグツと父さんの顔を見上げた。いっそ憎らしいくらいにいつもの顔で父さんは私を見降ろしてくる。

仰ぎ見た壁は憎たらしい位高かった。

SIDE：ミホーク

俺が娘のロンディーネと再開してから、1年ほどが経過した。
海軍本部でドフラミンゴに襲われかかっていた時の会議が終わった
後、
すぐ俺の旅に付き添わせることにした。

こいつには、護身の方法を教え込まないと危険だ。
そうとしか思えなかった。

ガープから故郷で何でも屋をしていたと聞き、
トラブルシューター

自分の娘がある程度、剣を使える事が分かっていた。
だが腕は俺からすればまだまだ未熟。

いつかは俺が旅立ったようにいずれは俺の元を巣立ち一人で旅立つ
娘に、自分の力を使いこなす術を、この世界で生きていく術を叩き
込もう、そう死んだマリアに誓った。

今、俺はその誓い通り、剣を教え、そして容赦なく叩き込
んでいる。

だが、俺が修行で娘に本気を出すことはなく、俺の愛刀で切りつけ
る事も無い。

あくまでもこの修行は、ロンディーネを鍛えるものであるからだ。
殺すために教えているのではない。

いつか、守るべきものができた時にソレを守り通せるように教えて
いるのだ。

「派手な傷は無いな……」

船内へと娘を連れて戻り、一撃を叩き込んだ脇腹をなぞって確認する。

真っ白い肌が赤くなっているが、骨は罅ひびが入ったぐらいだろう。折れてはいない。

脇腹以外の怪我也多少の擦り傷や打ち身になっているぐらいで、重症ではない。

どうやら、ロンディーネが無意識のうちに後ろに飛びのいて衝撃を多少殺したらしい。

なるほど。どうやら自分が当初想定していたよりも娘は力をつけてきているらしい。

普通ならば、加減してあるとはいえ、脇腹への一太刀によって骨の一本や二本は折れている筈だ。

だが、罅だけというのは、ロンディーネの才能センスと努力の賜物だろう。真っ直ぐに、剣を極めんとする姿勢は素晴らしい。

そんな事を考えつつも、並行して体は動く。

薬箱から湿布を取り出し、ロンディーネの脇腹へとつけ、固定するためにテープで張り付けた。

包帯も念のために巻いておくか。

金具を使わないタイプの包帯を取りだした。

「……………」

「」

沈黙が部屋に響く。
思わず口を開いた。

「ロンディーネ」

「、はい」

俺を見つめてくる顔は子供らしくない顔で、苛立った。子供はもつと子供らしい顔をしている…

「町に行くぞ」

ロンディーネはマリアに似て整いすぎた容貌の所為もあるが、それよりも俺の娘ということであまり街に連れて行かない。七武海の娘となれば俺の首を取るための人質になるかもしれないし、鍛えているから無いと思うがその顔立ち目当ての人攫いに攫われて売られるかもしれない。

だから、その言葉に驚いた顔を、年相応の顔を見たのは愉快だった。俺をありえないものを見るような顔で見る。

「え、あの、もう一回お願いします…！」

「町に行くぞ」

俺の言葉を漸く呑み込めたのか、いつもあまり変わることはない顔にじわりじわりと笑顔を浮かばせ始めた娘を見つめた。

「行きます…！」

「そうか、行くぞ」

あまり変わることはない表情についてはロンディーネの問題なのか、

それとも俺の育て方が悪いのか。

娘を育てるのをマリアに任せきりにしていたために俺には判断が
来ず、娘とはこのようなものなのだろうと本気で思っているが。

たまにはこのようにはにかなだ笑顔が見るのもいいだろう。

住人の視線が煩わしいがたまには一緒に街を歩くのも悪くない。

愛刀を背負い、この船室の唯一の出入り口へと足を向ければ、
ロンディーネが俺を追いかけて来る気配がした。

苦笑しながら

「慌てるな」

そう呟いた声は、子供の声にかき消された。

「分かっています!」

七話、私が父さんと過ごしている日々について（後書き）

若干教育パパな鷹の目。娘には少し甘い。

どんなのでいいのでコメントをお待ちしております。

八話　私が紅い髪の少年と出会った時の話について

SIDE：ロンドイーネ

さて、何でこうなったんだらうか？

父さんと約束した時間までに全然余裕があるから、裏路地を探検しに行ったのが駄目な事だったんだらうか？

一体多数の私刑リンチにしか見えなかった喧嘩ケンカに首を突っ込んだのが悪かったのだらうか？

この喧嘩に首を突っ込んだ事に後悔も反省もしていなかったりするのだが。

いや、ちらりと見えた赤い目が真っ直ぐで、誰かに重なって、面倒事が嫌いな癖に手を出していた。

だらしなくのびている男をつま先で突く、この男はこれでいいとして

この子はどうしよう？

「なんで俺のケンカに手エ出した!?!」

ローに似た目を持つ赤い少年に睨まれた。

幼いながらに相当、鋭い目をしている。

私は自分の事を棚に上げて、そんな感想を持った。

そして、口を開く。

「……………むかついたから」

「はあ!?!?てめエ!?!」

ぎろりと睨みつけてくる眼差しから目をそらさずに続ける。
ムカついたのは事実だが、君にじゃないのだ。

「……キミの夢を嘘だと決めつけ嗤う奴らがムカついたから、気が付いたらキミのケンカに手エ出してた」

ごめんと頭を下げる。

どんな理由があろうと私は自分の感情で動いたのだ。
相手の事など考えずに、手を出した。

「……お前も、俺と同じような夢を持つてるのか？」

私の言葉を聞いた少年はさつきよりも心なしか柔らかい声で尋ねてきた。

赤い目は真っ直ぐに私を見据えていた。

……その目は、真っ直ぐすぎて、目をそらしたくなかった。

「……私にも夢がある。キミと同じかは分からないし、人はそれをありえない、存在しないと言うかもしれないが、私はそれを叶えられる事を、実在する事を信じてる」

ポカンと呆気にとられたような顔をした紅い髪の少年。
それに口角をゆるませる。

「……キミの夢も、そういう類の夢だろうか？少年。」

ああ、そうだこの目は、ひとつなぎの大秘宝を見つけると言った口
に似ているんだ。

真っ直ぐで力強くて純粹な光りを帯びた目。

眩しくて思わず目をそらした。

「てめエの名前は？」

「へっ？」

「だから、てめエの名前は何なんだ？」

今度は、私が啞然とする番だった。

思わず目を向いて、少年を見据える。

普通、自分の喧嘩に乱入していた奴に名前を聞くななんて思わないだろう？

「・・・ロンディーネ、ジェラキール・ロンディーネだよ。キミは？」

それなのに、気がつけば私は厄介事に巻き込まれることの多い名前を告げていた。

なんで、こんなところまで似ているんだろうか？
脳裏に疑問が過る。

「俺は、ユースタス・キッド。海賊王になる男だ」

「ユースタス・キッドか、いい名だな」

・・・どっかで聞いたような名前だな。

うつすらとしか覚えてないけど、まあ、いいか。

頷き、見上げた空は吸い込まれるような青だった。

SIDE：ユースタス・キッド

「ひとつなぎの大秘宝なんてあるわけねえだろ！！全部嘘だ嘘！！」
ワンピース

「海賊王になる？馬鹿じゃねーかお前なんかがなれるわけないだろ
うー！！」

「ゴールド・ロジャーが残した秘宝？そんなもんがあるわけないさ
！！」

いらいらする。

バカにすんな、俺の夢を笑うな！！

ギリツと齒を食いしぼり、拳を握る。

こいつが貴族のボンクラでバカ息子じゃなけりや思いっきり再起不能にしてやるのに！！

「ああ、ちびすけのくせにそんな目をすんじゃねーよ！！」

「生意気なんだよ！！」

取り巻きの奴らがガツン、ガツン、思いっきり殴ってくる。
頭ん中がぐるぐる揺れる。

「……………てめエの夢も持てない負け犬野郎め」

俺は年上の腰ぬけ野郎に吐き捨てる。
せめてもの嫌がらせだ。

「てめえ!!」

もう一回殴られた、口の中が血の味がする。ただ、ぜってえこいつらの前では倒れたくねえ。こんな腑抜けの前で倒れてたまるか、糞が!

「・・・おい」

そんな緊迫した所に、こんな裏路地にはふさわしくない高めの声が響いた。ひよろりとした影が見える。

「あーん？」

「てめエには関係ねえだろ」

俺の前にいた自分の夢さえ持てない腰ぬけどもが声の方向に振り向いた。

そして、路地の前に立つ影に絡んでいる。

それを好機ととった。

後でどんな目にあつたって知るか。ム力つくんだ、畜生が!!
とりまきの一人に殴りかかった。

「ぐあっ!!」

殴った奴の声がかぶった。

「「あつ」

眼を隠すように帽子を深くかぶったおれと同じくらいの男・・・いや女か？

そいつとも声がかぶった。

気を取り直してもう一人も沈める。

帽子を被った影は容赦なく鎖骨辺りをへし折っていた。

・・・容赦ねエなこいつ。

最後に残ったのはボンクラの御曹司が一人。

腰を抜かしながらも悪態をついている。

それを見て、帽子の奴は鼻で笑った。

うわぁ、すっげえ馬鹿にしてやがるぜ、こいつ・・・。

「お前ら、どうなるか分かってるんだろ？二人とも縛り首にしてやる！！」

「私を縛り首にするのは無理だと思っけどね」

顔を赤く染めて、泡をとばしながら罵るボンクラに、帽子の奴は思いつきり馬鹿にしたような口調で告げる。見えない帽子の下からは冷たい視線が飛んでいた。

「ハア？それはどういう、」

そいつはバカ息子の言葉を最後まで聞く事なく蹴っ飛ばして終わらせた。

苛立たしげにつま先をボンクラ息子の服で突いてきれいになっていた。

一体誰なんだ？

だがとりあえず俺が言う事は、

「なんで俺のケンカに手エ出した!？」

そいつは能面の様な顔で。

「……………むかついたから」

「はあ!?!?てめエ!?!」

ギロツと涼しい顔をしたそいつを睨みつけた。

「……………キミの夢を嘘だと決めつけ嗤^{わら}う奴らがムカついたから、
気が付いたらキミのケンカに手エ出してた」

そいつは俺に頭を下げる。

「……………お前も、俺と同じような夢を持つてるのか？」

気が付いたらおれは尋ねていた。

「……………私も、叶えたい夢がある。キミと同じかは分からないし、
人はそれをありえない、存在しないと言うかもしれないが、私はそ
れを叶えられる事を、実在する事を信じてる」

心なしかそいつは誇らし気に言い放った。

「……………キミの夢も、そういう類^{たぐい}の夢だろっ?少年。」

そいつの口角がクツと上がる。

「てめエの名前は？」

「へっ？」

「だから、てめエの名前は何なんだ？」

気が付いたら俺は名前を聞いていた。

「・・・ロンディーネ、ジェラキユール・ロンディーネだよ。キミは？」

「俺は、ユースタス・キッド。海賊王になる男だ」

「ユースタス・キッドか、いい名だな」

ロンディーネはおれが見た事の無いくらい綺麗な顔で笑った。

・・・どっかで聞いたような名字だなこいつ。

っーか、女か。

俺は、ロンディーネが父親と待ち合わせをした時間まで、勧誘を続けていた。

俺はぜってい諦めねえからな！！絶対に仲間クルにしてみせるぜ！！

八話〱私が紅い髪の少年と出会った時の話について〱(後書き)

いつも読んでくださってありがとうございます!!

お気に入り登録数が50件を超えました。

次の話の更新まで時間がかかるかもしれませんが応援よろしくお願
いします!!

九話〱私が金の髪の少年に出会った時の話について〱(前書き)

総合アクセス数が50,000超えました!!

ありがとうございます!

この話の中でキラの仮面の中を構造しています、そういうのが苦
手な方は注意して下さい!

九話　私が金の髪の少年に出会った時の話について

SIDE：ロンドイーネ

わたしは走っている、かの赤鬼から逃げるために。

正直に言うが比喩表現ではない。

赤い鬼という名のキッドから逃げているのだから。

あながち間違った表現では無い。

「待ちやがれ！！」

「待てと言われて誰が待つか、バカキッド！！」

私の後ろから紅い髪が凄まじい速さで追いかけてくる。

私のドコを気に入ったのかは分からないが、

これが初めて会った日から繰り返される最近の私の日常である。

父さんが海軍本部から聖地マリージョアで天竜人を襲い、その奴隷を解放した魚人の冒険家フィッシャー・タイガーの探索に参加せよと命じられた。

最初父さんは「興味がないから、断る」と海軍からの指示を一刀両断にしていたが、すったもんだの末に探索に参加することになり重い腰を上げたのだ。

そこで父さんは私を、南の海の知人の刀鍛冶に預けて、偉大なる航路インに行ってしまった。サウスブル
グラントラ

「あらまあ、キッド君とロンディーネちゃんは仲良しねえ」

いやいや、友達だから仲は良いと思うが、この追いかけてこは必死だから!!

そこのおばあちゃん、ちょっと黙ってて!!

「ロンディーネ、待ちやがれエエ　　!!」

キッドの怒鳴り声が聞こえる。

わたしの方が足速いけど、地の利はキッドにある。
やばいな、捕まる。

もうだめだと思った時に、

「……こつちだ」

ぐいつ、と手を引つ張られた。

「誰!?!」

「……、捕まりたくないんなら、ついてこい」

稲穂のような金髪をした子に引つ張られて、路地裏に連れ込まれた。少年に手を引かれ素早く曲がり角を曲がり、階段を上がつたり下がったりし、水路を跳び超え、町はずれの古い建物の中に連れて来られた。

「……ここなら、平気だと思う」

「ありがとう、ねえ、キミは誰なの？何で助けてくれたの？」

金の髪を目のあたりまで隠せるくらいまで伸ばした少年に話しかける。

「……………おれの名前は、キラー。キミは？」

「私は、ロンドイーネ」

ファミリーネームは隠した。

ここは故郷でもすぐに立ち去る場所でもないのだ。

この目立つファミリーネームは隠したほうがいい。

厄介事は面倒だ。

「ロンドイーネか。じゃ、ロディだな」

そしたら愛称で呼ばれることが決定してたよ。

その後も、愛称を呼ばれ続けることになる。

S I D E : キ ラ ー

キッドが、面白くて腕っ節のある奴を見つけたらしい。

なんでもキッドの夢を笑わずに逆に笑った奴をキッドと供になぎ倒したそうだ。

それから友にはなれたが、仲間になれと言ったらすげなく断れたら

しい。

最初はキッドの勧誘を断るなんてどんな奴だろうと思っていた。キッドは最初は海賊になんて興味がなかったおれを仲間にした、凄
い器のひろい奴なのに。

そんな事を考えている俺の横を走り抜ける少女に目を奪われた。

そのあと走ってきたキッドに会って、その子がキッドが勧誘してい
る奴だという事を知った。

キッドにその子の名前も聞いた。

名前を口の中で何度も転がす。

すると、その子の顔がちらついて、その子の事を考えると胸が苦し
くなった。

この感情について近所の物知り爺さんに聞いたら、

「ほほう、キラーの坊もそんな歳になったのかい」

とニヤニヤ笑うばかりで全然答えなかった。

使えねえこの爺さん。

その次の日、おれはキッドから逃げている。

あの子に会った。

おれは、キッドがその子を仲間にしたいと思ってるのを知っていた
のに、

気づいたらその子の手を掴んでキッドから離すために走って逃げて

いた。

「誰!？」

その子は綺麗な金色の目を大きく見開いて戸惑った声をだした。

「……、捕まりたくないんなら、ついてこい」

咄嗟にそんな事を口走っている俺がいた。

本当ならキッドのどこまで連れて行かなきゃいけないのに。

自分でも分からないが咄嗟に手を握って走ってた。

おれしか知らないような狭い曲がり角を曲がり、階段を上がったり下がったりして、最後は水路を飛び越えて古いもう誰も使っていないような教会に連れて行った。

薄汚れた埃だらけのステンドグラスから零れ落ちる光が、その子の髪をキラキラと輝かせていた。

……とてもキレイだと、思えた。

「……ここなら、平気だと思う」

「ありがとう、ねえ、キミは誰なの？何で助けてくれたの？」

じっと、月のような金色の瞳にみつめられた。

「……おれの名前は、キラー。キミは？」

名前なんてとつくの昔にキッドに聞いて知っていたのにおれの口は勝手に言葉を紡いでいた。

何故だろう。

「私は、ロンドディーネ」

ロンドディーネ、彼女の名前を口の中で転がした。

…彼女の口から名前を聞いた。

ただ、それだけなのにひどく胸が飛び跳ねる。

「ロンドディーネか。じゃ、ロディだな」

声が、緊張で掠れそうになりながら言葉を紡ぐ。

最初に会った時よりも近くで見てもロディはとても綺麗だった。

見たことないくらいキレイな青みを帯びた黒い髪に月みたいな金色の目をしていた。

何度もロディはおれがなんで自分を助けたのか聞いてきたけど、俺ははぐらかす事しかできなかった。

自分でもよくわからないんだ。

ロディにこんな状況で話せるわけがない。

おれが大人になったらわかるだろうか？

この妬けつくような感情を

九話、私が金の髪の少年に出会った時の話について、（後書き）

少しキラーを天然にしすぎたかもしれません。

アクセスありがとうございます！これからがんばります！！

誤字脱字、どんな感想でもかまわないのでコメントをおねがいします！！

十話、私がようやく原作の主人公に会った時のことについて、

SIDE：ロンディーネ

またか、心の中でひっそりと呟いた。
けれど今の状況は変わるわけがない。

「なんでさ……」

「ん？なんじゃ、ロンディーネ」

ガープお祖父ちゃんが尋ねてくる。

「……なんでもない。」

ねえ、それよ

りお祖父ちゃん、ルフィってどんな子なの？」

「そうじゃの、元気で腕白な奴じゃ。……ロンディーネ、安心せ
いルフィは乱暴な奴じゃないわい」

これが南サウスブルーの海から東イーストブルーの海に向かう軍艦の中でかわされた。
私とお祖父ちゃんの会話である。

あの島から出るときは大変だった。
父さんが私を南の海に置いて偉大なる航路グランドラインに行ってから1年と半ば
ほどすぎた時に、父さんからお祖父ちゃんの軍艦に乗って母さんの
故郷であるフーシャ村に行けという旨が書かれている手紙が届いた。

それを、キッドとキラに言ったら、凄かった。

何が凄かったかってそれから勧誘やら、引き留めようとする為の行動が。

ロー以外で初めて友達になったと言っても過言は無いキッドとキラ
ーに行くな、と言われた時にはフーシャ村に行くのが嫌になった。

それでも、時間は過ぎていき。

こうやって私は今、東の海イーストブルのフーシャ村の土を踏んでいる。

内心、溜息を吐きたいのをグツと喉の奥に飲み込む。

お祖父ちゃんは子供と大人のコンパスの差を考えずにズンズンと進んで行くし、あんまり振り返りもしない、手ぐらい繋いで欲しいと思うのは子供のわがままなんだろうか。

たぶん酒場だろうか、そのドアを開けてお祖父ちゃんが入って行くのが見えた。

そして入って行った建物の中から子供の甲高い声と物音が聞こえる。

え、何事？

自分の頬が引き攣るのを感じながら、お祖父ちゃんが入ってた建物の中に入っていた。

そしたら、お祖父ちゃんは私が死ぬ前に読んでいたONE PIECEの主人公のモンキー・D・ルフィがお祖父ちゃんとケンカしてるのを見た。

・・・・・・・・・・・・・・・・何で？

思わずジッと見てたら、その子と目があった。

とりあえず、言うことは

「……こんにちは」

SIDE：モンキー・D・ルフィ

じいちゃんが帰ってくる。

マキノからもらったその手紙をみたときにおれが思わず叫んじまっ
た。

だって、じいちゃんが帰ってくると修行とか言っつて、谷底に落とさ
れたりするんだ。

その手紙には、おれの従姉^{イトコ}を連れてくる、と書かれていた。

従姉^{イトコ}ってなんだ？てマキノに聞いたら、

フフッと笑いながら、ルフィのお父さんの妹さんの子供のことよっ
て言っつた。

どんなやつなんだろうな？おれと一緒に海賊が好きなやつだとい
いな！！

そんな事を考えながら過ごしてたら。ある日いきなりじいちゃんが
帰ってきた。

「ギャー！！！！なんで、じいちゃんがいるんだー！！！！」

「わしが帰ってきて何が悪いんじゃー!!」

ぎゃーぎゃー、じいちゃんとそんなことを言い合っていると、ガチャと、酒場のドアが開いた音がした。

そこには、おれが見たことないヒョロとしたやつが立ってた。

誰だこいつ？ジツと見るとそいつが口を開いた。

「……こんにちは」

「おお、そうじゃった、こっちに来なさい」

なんだお前？おれが聞こうとしたらじいちゃんがそいつを呼んだ。

「ルフィ、この子はの、お前の従姉イトコの……」

「私はジェラキュール・ロンディーネ。宜しくね……ルフィ、君」

じいちゃんの声を遮っておれにそう伝えてきた。

「おう！宜しくなロンディーネ！」

そいつがドアを開けた時は、見えなかったお月さんみたいな金色の目を見ながらおれは言った。

とりあえず、おれはロンディーネが海賊が好きかどうか聞いてえな
!!

十話、私がようやく原作の主人公に会った時のことについて（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。

これからもがんばります！！

十一話、私が父さんの好敵手と出会ったことについて（前書き）

おくれてすいません!!

すこし長めですがどうぞ!!

十一話　私が父さんの好敵手と出会ったことについて

SIDE：シャンクス

俺がその子供達に出会ったのは偶然だった。

海賊が来たと、聞いて小さな村の港に集まった村人のなかにそういった。はいた。

一人は黒い目を好奇心にキラキラと光らせて俺達を見ている子供。もう一人はどこかで見たような冷めた金の眼をして俺達を見ている子供だった。

「海賊がこの村に何の用じゃ」

村長らしい、帽子をかぶり杖を持った男が俺に声をかけてきた。

「俺はシャンクス。今この海域を冒険してる。なので出来たらここを拠点にしてえんだが、」

俺がシャンクスと名を名乗った時に金の眼をした奴の雰囲気が変わった。

が、俺がそいつに声をかける前に、村長が俺に尋ねた。

「この村に貴様らは危害を及ぼさんか？」

「ああ、俺らは海賊だがむやみに略奪はしねえ」

「・・・そうか、ならその言葉は守れよ」

ちよ、村長！？相手海賊つすよ！！約束守んなかったらどうするんすか！？

とか言う村人の声が聞こえてきた。

そらそーだ、俺ら海賊だし悪いイメージしか持ってないだろ。

「やかましい！！あいては海賊じゃがこの村を襲うほど貧窮している様には見えんし、わしは赤髪海賊団が略奪をしたという話は寡聞にして聞かん。だったらさっさと受け入れておいた方が楽じゃ！」

よく知ってんなあの村長、俺のそばで子供の声がした。

「なあ！お前ら海賊だよな！！」

そこには、さつきから俺らの事をキラキラした目をしていた坊主がいた。

S I D E：ロンディーネ

フーシャ村についてからしばらくたって、ルフィに姉ちゃんと呼ばれるようになった。ルフィに最初に出会った時海賊は好きか、と聞かれたので父親が海賊だし嫌いではないと答えたらなぜか懐かれた。

正直子供は好きだし、懐かれて悪い気はしない。

けど今までにいなかったタイプの子だから大変だったりしないでもない。

とりあえず私に抱きつくときにタックルのように来るのは勘弁してほしい。

そんな事をつらつらと考えていたらルフィがわたしに声をかけてきた。

「姉ちゃん！！海賊が港に来てんだって。見に行こう！！」

「・・・そんなに急がなくても、逃げないだろう」

足をバタバタさせわたしの腕を引っ張ってくる。

「いーから、早く早く！！」

グイッと腕を引っ張られて港まで行く、海賊に私は興味を持っていないのだが・・・

(なぜにこんな事に・・・)

ルフィが海賊船を見て、でっけーとか言ってるのを軽く流しながら、何という海賊かとメインマストに掲げてある海賊旗ジョーロージャをふと見上げたら、三本傷の髑髏ドクロがそこには存在した。

え、マジで？

これって確か、“赤髪のシャンクス”、父さんの最大にして最高の好敵手ライバルの海賊団のシンボルじゃ・・・

いやいや、ここがフーシャ村でもまだ原作には11年あるんだし、違う海賊かもしれないし・・・

わたしが、ありえないかもと軽く現実逃避をしながらじーっと海賊船を見つめっていると、いつの間にか村長と一人の男が話していた。

そいつはキッドの紅い髪とはまた違った赤い髪をしていた。

名前はシャンクスと言っらしい、
思わず自分の前の記憶と重なってしまい眉間にしわを寄せる。

しばらくして、村長と話し終わったのか赤髪のシャンクスがこちらを振り向いた。

眼があった。

言葉にすれば五文字だがその眼は射抜く様にこちらを見ていた、ように思う。

私にだろうか、私が居る方向に向かって口を開こうとする。

結局結論からすると私は声をかけられなかったのだが、気づいたら私の隣にいた筈のルフィはいなくなっていた。

まさか

若干嫌な予感を感じながら体をゆっくりと赤髪の方を振り向かせたら。

そこには、赤髪に眼をキラキラとさせながら話しかけている私の弟がいた。

ルフィ、キミは一体何してんのさ
! ?

SIDE: シャンクス

「・・・坊主はなんで海賊が好きなんだ？」

おれ達はいきなり話しかけてきた坊主の質問に答えてから聞いた。そいつはムスツとした顔をして

「おれは坊主つて名前じゃない、おれの名前はルフィだ！！モンキ
ー・D・ルフィ！！！」

「ハハ、そいつはすまなかつたなルフィ。じゃ、きくけどルフィは何で海賊が好きなんだ？」

「海賊は自由だからだ！それに海賊は海を冒険できんだろー、わくわくすることもドキドキするようなことにも会っただろ？だから、おれは絶対海賊になるんだ！！！」

眼をキラキラと輝かせながらルフィは言う。

それを聞きながらおれは内心驚いていた。

この子供、いやルフィの言うことは海賊の一面の真理を突いてくる言葉だったからだ。

そんなことを考えていると声がした。

子供の声にしては落ち着いているが、まだ大人では無い子供の声。

「ルフィ、何しているの？」

「姉ちゃん！！！」

ルフィがその子供に駆けよる。

そこにいたのは、さっきおれが名乗った時に雰囲気を変えた金の眼をした子供だった。

「ルフィ、キミはもうちょっと落ち着いて行動しなさい」

子供なのに溜息を吐き。

その整った顔を僅かに歪めながらルフィをたしなめる。

「姉ちゃん、でもシャンクスはいい奴だぞ！」

「あのね、こう見えても赤髪のシャンクスは億越えの賞金首だし、その仲間は強者ばかりで有名なんだけどね……」

キミの積極性はいいことだけどお姉ちゃんをあまり心配させないでくれ、

と少女はルフィに話している。

ルフィへの注意がひと段落したころ、その少女に話しかける。

「なあ、嬢ちゃん。」

「……何ですか“赤髪のシャンクス”さん？」

やっぱりどこかで見たような冷たい雰囲気と金の眼をしている少女に話しかける。

「なんで、おれ達のこと知ってたんだ？偉大なる航路ならともかく東^イ海の片隅ではまだ俺らの事を知ってる奴あいねえだろ？」^{ストブル}

少女は、ああ、その事ですか、と言葉を紡ぐ。

「父さんから聞きました。面白い剣を使う強き者がいると」

「へえ、そいつの名前は？」

おれの剣をそう評す奴は滅多にいねえ。

そう思っただけ聞いてみると、

「父さんの名前はミホーク、ジエラキユール・ミホークと言います。

……いつも父さんがお世話になってます。赤髪さん」

おもわず、俺達が絶句するような言葉をその少女は告げた。

この時は滅多に合うことのない全員の思いが重なった。

似てなさすぎだろ！！！！？？

十一話〱私が父さんの好敵手と出会ったことについて〱（後書き）

PCが壊れてたので長い間更新ができませんでした。

ほんとにすいません！！

いつも応援して下さいありがとうございます。

これからも頑張ります！！

番外編 く南の海での一幕く（前書き）

南の海から東の海に行くことになった時のキッドとキラールの話です。

アンケートを実施したいと思います。
出来たら答えてくれると嬉しいです。

番外編 く南の海での一幕く

SIDE：ロンディーネ

言いたくないな、けどそろそろ言わなければまずいだらう。

先日、送られてきた父さんの手紙を見て溜息をつく。

正直に言つと気が重い。

というか、胃がキリキリしてきた。

まずは、キッドとキラを探さないと思ひ。

手紙を上着のポケットに入れ羽織る、そして木からヒョイと降りた。

あの綺麗な紅い髪と金髪は目立つからすぐに見つかるだらう。

たしか、裏町に用事があるって言ってたな、
そんな事を思い出して裏町へと駈け出した。

「にはそれよりもこのの方が」

「馬鹿か、キラあいつにはが似合つにきまってるあ！」

二人して裏町で何かの露店を見ながら何事かを話していた。

「何してんの？」

「「うおおっ！！」」

「ロ、ロディ。いったい何しているんだ」

「それは、わたしが聞きたいんだけど・・・、まあいいやキッド、キラー話があるんだ」

キッドとキラーが隠したててるのを無理やり聞くのもどつだろつと思っし、

それよりも手紙の内容を告げる方がさきだ。

キッドとキラーは二人して怪訝な顔をしていたけどな。

三人で島で一番大きな木の下に来て顔を見合わせる。

「で、俺たちに話ってなんだ？」

「重要な事なのか？」

「まあ、重要っていつたら重要なんだけど・・・」

「「なんだ？」」

「父さんに、お祖父ちゃんの軍艦ふねに乗って母さんの故郷に行けと言われた」

「「さつさと、断れ！！」」

まさかのシンクロ！？

これだから説明すんの嫌だったんだ！！

「私だって、嫌だけど・・・」

「なら、いいだろロンディーネ。断ってしまえ」

「でも、お祖父ちゃんが、」

「爺さんがどうかしたのか」

「人の話を、あまり聞かないし、とっくに還暦を迎えてるくせに台風のような人なんだ」

その日はずーっとその話をしたけど日が暮れたのでお開きになった。

SIDE：キラ

その日はロディと会わずにキッドと買い物に来ていた。

ロディの誕生日が近かったからあいつへの誕生日の贈り物を送りに来たのである。

「ロディにはそれよりもこの水色の結紐の方が」

「馬鹿か、キラあいつには赤の方が似合っにきまってるあー！」

その時俺はキッドと二人してロディに送るプレゼントについて喧々諤々の意見を交わしてた。

だからロディが近づいてくることに気付かなかった。

「何？」

「「うおおー!!」「」

「ロ、ロディ。いったい何しているんだ」

「それは、わたしが聞きたいんだけど・・・、まあいいやキッド、キラー話があるんだ」

ロディが深く聞いてこなかったことに、俺とキッドは二人して怪訝な顔をした。

三人で島で一番大きな木の下に来て顔を見合わせる。

「で、俺たちに話ってなんだ？」

「重要な事なのか？」

「まあ、重要っていったら重要なんだけど・・・」

「「なんだ？」」

「父さんに、お祖父ちゃんの軍艦ふねに乗って母さんの故郷に行けと言われた」

「「さつさと、断れ!!」「」

キッドと言葉が重なった。

「私だって、嫌だけど・・・」

「なら、いいだろロンディーネ。断ってしまえ」

「でも、お祖父ちゃんが、」

「爺さんがどうかしたのか」

「人の話を、あまり聞かないし、とつくに還暦を迎えてるくせに台風のような人なんだ」

ロンディーネが凄く疲れた顔をしてたのが目に焼き付いた。

その日はずっとその話をしてたけど日が暮れたので自然とお開きになった。

「なあ、キラー。あいつはぜってえ引き留めんどぞ」

「ああ、そつだなキッド。引き留めよう」

すっかり暗くなった道を歩きながら、絶対にロディを連れていかせないと誓った。

SIDE：ロンディーネ

ついに、お祖父ちゃんが迎えにきた。

キッドとキラーにはすつごく色々言われた。

行くなとか、俺達と一緒にいるとか、他にもたくさんわたしにとつ

て嬉しい事を何度も伝えてくれた。

でもそろそろ、行かなきゃいけない。わがママも言えない、中年
齢は成人していても、わたしはまだ庇護される子供なんだから……

昨日、お祖父ちゃんが明日迎えに来る、と伝えておいたからさすが
にもう何も言っておかないだろう。

でも、行くようだけど、本当は私は行きたくないのに……

「……行きたくないな」

「どうしました？ ロンディーネさん」

「何でもないですよ。ボガードさん」

お祖父ちゃんの副官のボガードさんに答えて軍艦ふねの欄干らんかんに寄りかか
る。

「お友達は来ないんですか……？」

「来ないと思いますよ……」

言葉を交わしながら、一年と少しいた街を眺める。

昨日、別れを伝えたんだ。絶対来ないだろ。街を眺めていた顔を俯
かす。

「そつでしようか？ あの子たちじゃないんですか」

「え？」

顔をガバツとあげるとそこには見なれた紅と金がありました。

S I D E : キ ャ ッ

結局、ロンディーネは引き留められなかった。

昨日、お祖父ちゃんが明日迎えに来るんだ、だからゴメンここには
いられないんだ。

そう告げられた。

あいつはそれだけ言ったあと、にげるように去っていった。

すごく悲しそうな顔をしていた。

「キャッ、行かないのか？」

「行くけどな、早めに行ったら気まずいだろ」

お互いに、と言つ言葉は呑み込んだ。

「・・・違うない」

そのまましばらくして

「行くぞ、キャッ」

「ああ」

俺ら二人はロンディーネが乗っている軍艦ふねに向かって駈け出した。走つてくと顔を俯かせてる見なれた黒い髪が見えた。

「ロンディーネ!!!」

あいつがバツと顔をあげたのが見えた。

「キッド、キラー!!!」

ロンディーネに向かって包まれた袋を投げる。

「これなにさ?」

「いいから、取っとけ!またな!!!」

俺らが言ったのは再開を願う言葉。

ロンディーネは驚いた表情を一瞬したが言葉を理解したのか綺麗な笑顔で

「うん!またね!!!」

それからすぐあいつが乗った軍艦ふねが動きだした。

俺らはそれが水平線に消えるまでずっと見つめていた。

番外編 南の海での一幕（後書き）

アンケート

実は今、私が書いているもうひとつの話「海の魔女は笑う」とこのシリーズ「鷹の娘は何を見るか」をコラボさせるかどうかを悩んでいます。

コラボさせたいという人は感想を打つ時に（ひと文字でもかまいません）Yを、

反対の人はNを入れてください。

このアンケートは25日までやるつもりです。ご協力をお願いします。

これからも小説を書くのを頑張ります。

十二話、私が原作に入った瞬間を目撃したことについて（前書き）

アンケートにご協力ありがとうございました。

あとがきに結果を載せてます。

これからも応援よろしくお願いします！

十二話　私が原作に入った瞬間を目撃したことについて

SIDE：ロンドンデーネ

もうすぐ原作にはいつてしまつような気がする。

父さんの娘ぐらいなら上手くいけば巻き込まれずに済むだろうと思つていただけ……

あのおじいちゃんの孫娘だから無理だろうなあと思つている。

最近が開き直つて父さんの名に恥じない様に、

前で楽しめなかつた分の人生を精一杯謳歌してやろうと心に決めた。

やるのなら、精一杯悔いを残さず笑つていく、それが私のモットーだ。

それに、

「ねえちゃん！」

私に懐いてくれるこんなに可愛い弟がいるのに関わらないなんて嫌だね！

「どこ行くんだ？」

「本屋さんに行ってくるよ。ルフィは？」

「シャンクスのところ！！遊び半分じゃない証拠を見せてくる！！」

またシャンクスさんにかかわれたのか、ムキになっているらしい。ハアと溜息をついて、ルフィの頭を撫でる。

「まあ、ほどほどにしないで」

「おうー！！」

そう言っつてルフィは港に向かって走っていった。

私はまだ知らなかった。

いつもと変わらないこの日が、始まりの日だつてことを・・・

SIDE：ルフィ

歩いているとねえちゃんが歩いているのが見えた。

「ねえちゃん！どこ行くんのだ？」

片手に本を持っていたからまた本屋の所だろと思っていいたら案の定。

「本屋さんに行ってくるよ。ルフィは？」

「シャンクスのところ！！遊び半分じゃない証拠を見せてくる！！」

それを聞くとねえちゃんは、ハアと溜息をついたけど、おれの頭を撫でて。

「まあ、ほどほどにしなさい」

おれがシャンクスにからかわれたのかが分かったのか、呆れたように言った。

「おうー!!」

おれは、ねえちゃんとそこで分かれてシャンクスのとこに走っていった。

その後、おれがシャンクスの船で目に傷を作って帰ったら、ねえちゃんにぶん殴られて怒られた。

「バカかキミは!!」

「おれは、証拠を見せたただけだ!!」

「こんの、おバカさんが!!」

ねえちゃんにおれが怒られていると、それを周りで見ていた奴らが

「まあ、いいじゃねえかロンディーネ」

「ルフィは根性を見せたんだぜ」

と、ねえちゃんを宥めてたけど、ねえちゃんは、

「良くない!!」

と叫んで

「だいたい、証拠を見せに行つてなんで怪我して帰ってくるんだ！
なんで、あなた達も止めなかった！？ルフィの目が見えなくなった
らどうするんだ!!」

いままで、いつもと変わらない表情で怒ってたのに、泣きそうな顔
になって怒鳴ってた。

「ねえちゃ、・・・」

「これだから・・・」

酒場の空気が変わったことに気付いたのか、ねえちゃんは外に飛び
出していった。

「まあ、ロンディーネが怒るのも当たり前だな」

副船長が、煙草に火をつけながらそう呟いた。

「あいつ顔にださねえけどルフィの事大事にしてるしなあ」

シャンクスが相槌を打つと、たしかになどいった空気が流れ始めた。

「あとで、謝らねエとなルフィ」

「うん……」

S I D E：ロンドンディーネ

・・・私が感情を爆発させて酒場を飛び出して、夕方になって家に帰るとルフィに謝られた。

私が謝るべきだったのに、弟に謝らせた。

最悪だ……

漫画を読んだ時に見たシーンでは失明なんかしてなかったのに、ルフィの目に傷があったことに血の気が引いた。

それで目にガーゼをしたルフィを見た瞬間、思わず説教してしまっ
た。

まだ七つのルフィ相手に本気で怒るなんて、こっちに生まれてもう
十三年もたってるのに……

その事があってから私はルフィに会うのが気まずくてルフィを避け
ていた。

シャンクスさん達が航海に出ても、私はルフィに会うのが気ま
ずくて本当に最低限しか会わなかった。今日だって、二人きりにな
るのが気まずいからって本屋さんの店主さんに場所を借りて引きこ
もっている。

(私最低だ…。弟相手にキレルなんて)

そんな事をふつつつと思う。

眺めている本の内容ですらも入ってこない。

そんな私を慮ってか店主さんも話しかけようとはしてこない。

「・・・んっ？」

何かが聞こえてピクリとする。

「ルフィの声かこれは？」

なにかもめ事があつたらしい。

村の人たちとは違う奴らの笑い声とルフィの怒っている声が聞こえた。

本から手を離してルフィの所に走る。

何かヤバい事が起こっている気がした。

そして私が見たのは、ルフィが山賊たちに殴ったり蹴られたりして光景だった。

「ルフィに触れるな、貴様らー！」

カツとなり気づいたら山賊の一人を叩きのめしていた。

SIDE：ルフィ

ねえちゃんとここんとこまともに話してねエ。

おれのことを叱ってから、確実にねえちゃんと過ごす時間が減った。

マキノとかと話してもおれが現れると気付かないうちにスツと居なくなることも多くなった。

それをマキノに聞いてもらってたら、シャンクス達をバカにした山賊たちが酒場に来た。

その後は、おれが山賊相手に喧嘩を吹っ掛けた。

「くそオ!!!おれにあやまれ!!!」

「この野郎!!!」

ぶん殴ってやろうと拳を突き出すけど

「ゴム人間とは・・・なんておかしな生物がいるんだろつなア・・・!!!」

軽く避けられてほほを掴まれて地面にたたきつけられる。

くやしい、くやしい、なんでこんな奴らに・・・

そのとき、

「ルフィに触れるな、貴様ら!!!」

思いつきり山賊をぶん殴って倒しているねえちゃんがいた。

「私の弟に手を出すなんて覚悟はできてるんだろつな!!!」

いつも、あんまり表情を出さないけど優しいねえちゃん。

そんなねえちゃんがキレてる。

金色の目が鷹みたいに相手を睨みつけた。

「このッ、野郎お!!」

山賊の奴らの蹴りや拳をスツと避け逆にカウンターを叩き込んでる。

「すげエエ」

いつも、おれとシャンクスが話している横で副船長と小難しい話をしているねえちゃん。

ヒョロとしていて全然強く見えないねえちゃん。

だけど滅茶苦茶強えエ。

ヒラリと上着の裾が揺れるたびに山賊の連中が一人また一人と地に沈めていく。

「クソッ!!」

おれをふんづけていた山賊が剣を抜いておれにむける。

「ルフィ!!」

「てめエが暴れたらこの小僧をぶつ殺す!!」

「貴様ッ!!」

それからは一方的だった。

ねえちゃんがあいつらに殴られ、蹴られ怪我だらけになっていく。

あいつらに蹴つ飛ばされて頭を打ち付けてからねえちゃんが動かない。

「離せえエ！！ねえちゃん！！足をどける！！バカ山賊っ！！！」
力を籠めて暴れる。
けど山賊の足はどかない。

村長が来て俺らを助けるように言ったりしたけど奴らに殺されそうになってたら、シャンクスが来て山賊たちをなぎ倒していた。

仲間をおいて逃げた山賊におれとねえちゃんが人質にされて、海に投げ出された。

ねえちゃんは目を覚ましたけど、おれと二人でじゃ泳げなくてもがいていたら、近海の主が山賊を喰って、おれ達も食われそうになつて、シャンクスに助けられたけどシャンクスの腕が食われて・・・。

おれはいろんな事を知った。

シャンクスや副船長達がおれに教えてくれたことだ。

シャンクスがこの村から出ていく時に、麦わら帽子をもらった。

おれは教えてもらった時に誓ったんだ、

「おれは、海賊王になる！！！」

それを見ていたねえちゃんが凄い優しい顔でおれを眺めていたというのはまた別の話。

十二話、私が原作に入った瞬間を目撃したことについて、（後書き）

アンケートの結果、クロスオーバーはさせないことになりました。
投票してくれた御方、ありがとうございます。

ルフィの視点が難しかったので文章がところどころ変になっている
かもしれません。

スローペースになりがちですが更新頑張ります！それとどんなもの
でも、構わないのでコメントお願いします！！

十三話〱私が義弟に遭遇した時の話について〱(前書き)

だいぶん、更新が遅れました。

誤字脱字がありましたら気軽にコメントお願いします！

では、これからも宜しくお願いします。

十三話　私が義弟に遭遇した時の話について

SIDE：ロンディーネ

・・・またか！

私は軽い苛立ちと頭痛を抱えながらお祖父ちゃんとルフィを見た。私が最初にお祖父ちゃんに会った時のような光景にデジャ・ビュを感じながら山を登る。

大体何で私達が山賊に会う為に山登ってんの？

本当にお祖父ちゃんが何を考えているのか分からない。

ルフィとお祖父ちゃんがコミュニケーション（ルフィがわめいているが、お祖父ちゃんの愛情表現だろう。うん、たぶん）を取りながら山を登っているのを見つめながらため息をつくのを抑える。

心なしかさっきよりも頭痛がしてきたけど気のせいだ。
うん。

早く慣れてしまえ、今後の自分のために！

「」「あああああああああああ！」「」

いつの間にか目的地についていて、目の前で三人組の山賊が叫んでいた。

もう二人もガーブさんの孫が増えるのかとか言ってるけどそれより

「 嫌い」

耳にガンガン入ってくる耳障りな声に眉をひそめる。
だいたい私は山賊が嫌いなのだ。

可愛い弟をぼこぼこにし海に放り投げた。
ルフィ

・・・シャンクスさんがいなければルフィは死んでいた。
そのシャンクスさんの腕も山賊のせいで魚に食われた。

これで嫌いにならない方がおかしいと思う。

「おい！！誰だお前！！」

ルフィの怒鳴る声を聞いてそちらを振り向く。

そこには仕留めた獣の上に返り血のついたパイプを持った年下の少年がいた。

・・・この子、誰？

とりあえず、へラつと笑うと軽くギロツと睨まれた。

S I D E : ダ ダ ン

ガープが、また孫を連れてきた。しかも二人も！！

前に預かったエースは十歳になったが、止める奴がいなくらいの悪童で正直に身が持たない。

そんな孫がいきなり三人に増えるなんて！！

一人は目の下に傷跡のある黒髪に麦わら帽子をかぶったエースよりも年下のガキ

もう一人は背中まである黒髪をとんぼ玉の飾りがついた白い結紐で結んだ。

表情を全く動かさない人形のように整った顔立ちのガキ。

人形のようなガキは、スツと眉をひそめて

「
 嫌い」

私達を見た後、興味をなくしたようにフイッと別の方向を向いた。

ガープとの話が決まっっていくのを横で聞きながら興味がなさそうにあたりを見まわしているガキは、至極つまらなそうな目をしていた。

そして、これで終わりという所で、

「おい！！誰だお前！！」

もう一人のガキの怒鳴る声を聞いて人形のようなガキがそちらを振り向く。

そこには、今日の獲物を倒してきたのだろうエースがいた。

人形のようなガキはエースを見て、ほんの僅かに笑った。

それを見てカチンとしたらしいエースもじーっと人形のようなガキを睨んでいる。

エースとの間に火花が散っているのを見たような気がして、あたしは溜息をついた。

ガープは見つめあつとるか仲が良いのう、なんて言ってるけどこれはありえない……

これだから、ガキは嫌いなんだ!!

S I D E : エース

めんどくせえ、何なんだこいつら……

むかついたから唾を吹きかけてやったら、キャンキャン喚いてくる麦わらを睨む。

キャンキャン喚く麦わらに気付いたのかそいつは初めて俺の方を見た。

俺より2、3年上にみえる髪をくくっている人形のような女だった。

俺を見ると少女は騒ぎの原因が俺が麦わらにあったことに気付き、俺のせいでこんなことになっているのが分かったらしく心底呆れたような金色の目で俺を見た。

イラッとした、それはそいつの金色の目を鷹のようだと恐れた俺のせいか、そいつがそんな目で俺を見るのが許せなかったのか、分からないけどイラついた。

いらだちを籠めてじーっと睨みつけると、ハッとバカにするように

鼻で笑われた。

・・・俺はこいつ苦手だ!!

十三話　私が義弟に遭遇した時の話について（後書き）

彼女達の第一印象はお互いに微妙に悪いです。

ロンディーネは山賊嫌いで無意識のうちに機嫌悪いし、エースは初めてあつた奴には無条件で警戒するからです。

しかもロンディーネの場合、あまり物心ついてきたところに表面筋が動かない父親と過ごしていたので基本無表情で不器用しかも結構口下手。なまじ顔が整っているために誤解されることが多いんです。

応援ありがとうございます！！これからも頑張ります！！

十四話〜私と義弟の関係について〜（前書き）

小さい頃のエースの話し方が捏造されています。

誤字脱字などありましたら教えてください。
お願いします。

十四話　私と義弟の関係について

SIDE：ロンディーネ

我が義弟ながらいい根性だな、ルフィ。

ダダンの家から出ていくエースに邪険にされているのにも関わらず、話しかけるルフィを感心しながら見る。

あそこまで拒絶されているのによく傍にいつて話せるな、第一印象が最悪に近かったのに・・・

自分の義弟ながら、見事なまでの主人公気質というか明るすぎるといつか・・・

「まあ、死なない程度ならな・・・（ルフィに手を貸してと頼まれたら一応手助けするけど、頼まれなかったら傍観が一番いいか・・・私はエースに嫌われているみたいだし）」

ダダンがこれだからガープの孫はうんぬん言っているけどスルー。ご飯と水を食べ終わったあと、食器をまとめて流しに入れる。

折れた突剣レイピアの代りに父さんがくれた刀を肩にかけ、帽子をかぶる。

「・・・出かける」

それだけ告げてダダンの家を出て修行ができる山の方に歩いて行った。

山の中腹にある広場の様に広がっている場所を発見し肩から刀を下

ろす。

鞘に手をやり一気に刀を抜き、重心を移動させる。

刀を振り抜き、返す刀で袈裟斬りを行う。

足運びも確りと、円を描く軌道を心がけ無心に刀を振るう。

踊る様というには華やかさに欠け、斬るだけというには無骨すぎる。

自分の特技である素早さを生かした。

あくまで水の流れるように人を斬る剣技。

それが、私、ジェラキユール・ロンディーネの剣だ。

相手の姿を投影しあたかもそこに存在するかのよう斬る。

一心に刀を振るうと日が暮れて影が落ちてきた。

それに気付き汗をぬぐい帰りの支度をする。

帰りの道すがら飛び出してきた獲物を仕留め担いで帰る。

（父さんと無人島で生活してた時もあるので狩やらサバイバルに必要なことがほとんど全て出来るようになった）
ダダンにそれをあけ渡し、壁に寄りかかり愛刀の手入れを開始する。

シャーシャーシャーと砥石を使いはころびがないか確認しながら、刀を研いでいく。

修行をしている時と刀の手入れをする時だけは何も考えずに行動できる。

その夜、ルフィが帰ってこない。

囲炉裏の傍でダダン達がエースの事を“鬼の子”とか言っていたけど無視。

そんな声が聞こえたのかなんとも形容しがたい表情を浮かべている
一人だけ帰ってきたエースに近づく

「・・・何だよ」

ムツとした顔で機嫌が悪そうに睨まれる。

「エース。腕、だせ」

「ハア!？」

「怪我してる。・・・化膿、したら腐って、肉が爛れ落ちるぞ」

それでもなかなか手を出さなかったから、ローに聞いた些細な傷から始まる本当に怖い外科の話をしたら大人しくなったから治療を開始する。

「訳分からねエ、・・・なんで俺を治療するんだ？俺のせいでル
ファイだっけか？帰ってこねエんだぜ？本気でなんでだよ」

ぶつくさ言いながら大人しく治療を受けるエースを見つめる。

「やかましい、ガキが・・・」

バチンと額を叩く。

「何すんだよ!！」

「ルファイはあれでもお祖父ちゃんに鍛えられているから帰ってくる

と確信してるし、キミを治療するのは私がしたいからだ、基本万国共通で怪我人、病人は治療すべきだろうが……」

それだけ言うと呆気にとられた顔をしているエースにスッと視線を合わせる。

「……キミは何となくだけど自分の事を下に見すぎているように感じる。キミは私より年下の子供なんだから……」

「お前に俺の何が分かるんだよ!!」

ギロツと睨まれる。

怒鳴ったからか目の前にある顔が赤いけど気にしない。

「キミの苦悩なんぞ知らん。私には興味もない。だがな、私はキミの何かを諦めたような目がムカつくし、キミは周りに頼らない癩癩持ちの子供ガキにしか見えん。」

淡々と治療しながら、言葉を紡ぐ。

「エース、キミはまだ子供だ。周りの人間や友人に頼ることも覚える。それと、私の事は嫌いで構わない。だが、キミが死んだり怪我をしたりしたら悲しむ者が着実にいると言う事だけは覚えておけ」

包帯をくるくると巻き金具で留めて歪みがないか確認する。

「これで、終わり。だけど、邪魔だからといって解くなよ、解いたら傷口に塩塗りこむからな」

それだけ言うと立ち上がりダダンに教えて貰った部屋に移動する。

「おい!!」

「まだ、何か？」

声をかけられた方に振り向く。

「……もし、だけど。“海賊王”に子供ガキがいたらお前は どう思う？」

「……“海賊王”ゴール・D・ロジャーに子供？親の罪は子の罪ではないと私は思うよ。だいたい、私の父は“鷹の目”だ。王下七武海の一角のな。そんな私が“海賊王”の子供に会ったところで普通に接するだけだと思うがね」

それだけいうと僅かに嬉しそうな顔のエースがそこにはあった。

「……御休み」

なんか、居たたまれなくなって部屋のドアを開け、荷物を放り込む。

「……おう、御休み」

ドアを閉め、エースの事はどうにかなりそうなのでさておきルフィの事を考える。

無駄に生命力も治癒力もあるし、サバイバルもできるからあまり心配して居ないんだが、七歳児なわけで、やっぱり心配なことに変わりはない。

「・・・とりあえず、七日しても戻ってこなかったら探しに行こう」
それだけ考えをまとめると布団に潜り込んだ。

SIDE：エース

ついできた奴をまいてダダン達の所に帰ってきた。
・・・あいつは谷底に落としたからか帰ってこない。

ダダンが俺の事を“鬼の子”と呼んでいた。ああ、いらいらする。
思いつき顔をしかめる。
そこには、俺に近づいてきたあいつの姉がいた。

「・・・何だよ」

「エース。腕、だせ」

いきなりそんな事を言われたのは初めてだった。・・・俺、お前と
初対面だよな？

「ハア!？」

「怪我してる。・・・化膿、したら腐って、肉が爛れ落ちるぞ」

それでもなかなか手を出さなかったら、そいつは無表情で些細な傷
から始まる本当に怖い外科の話話し始めた。
え、なにこれ？めっちゃ怖えんだけど!？
思わず大人しくなった俺にそいつは治療を開始した。

「訳分からねエ、・・・なんで俺を治療するんだ？俺のせいでル

「フィだっけか？帰ってこねエんだぜ？本気でなんでだよ」

ぶつくさ言いながら大人しく治療を受ける俺を最初、鷹のようだと
思った瞳が見つめてきた。

その目の真っ直ぐさに思わず息をのむ。

「やかましい、ガキが・・・」

眉間に皺をよせたそいつにバチンと額を叩かれた。

「何すんだよ！！」

とっさに言うと、そいつは不機嫌そうな表情で、

「ルフィはあれでもお祖父ちゃんに鍛えられているから帰ってくる
と確信してるし、キミを治療するのは私がしたいからだ、基本万国
共通で怪我人、病人は治療すべきだろうが・・・」

それだけ言うと、呆気にとられている俺の顔を見つめていた。
信じられない、ダダンが俺を“鬼の子”と呼ぶし、ジジイは俺が怪
我しても相手にしないから面喰ったのかもしれない。

「・・・キミは何となくだけど自分の事を下に見すぎているように
感じる。キミは私より年下の子供なんだから・・・」

そいつは淡々と俺の腕に治療を施しながら言葉を紡いでいたが、
そこに聞き捨てならないことを言われさつと頭に血がのぼる。

「お前に俺の何が分かるんだよ！！」

怒鳴ったからか顔が赤いけど気にしない。

だがそいつは俺に怒鳴られても、表情をかえず人形のような顔で、

「キミの苦悩なんぞ知らん。私には興味もない。だがな、私はキミの何かを諦めたような目がム力つくし、キミは周りに頼らない癩癩持ちの子供ガキにしか見えん。」

ここまで来るとこいつは思ったことを述べているんだということがよくわかった。

一切の遠慮を見せずどんどん俺の心なかに入ってくる。

怒鳴っても怒らず、すべてを受け止めたような顔をして俺の治療をする。

正直よく分からない。

「エース、キミはまだ子供だ。周りの人間や友人に頼ることも覚える。それと私の事は嫌いで構わない。だが、キミが死んだり怪我をしたりしたら悲しむ者が着実にいると言う事だけは覚えておけ」

諭すように、俺が前に見たのとは違う種類の淡い笑みを浮かべ、これで治療は終わりと言わんばかりに包帯がくるくると巻かれ金具で留められて歪みがないかどうかを確認された。

「これで、終わり。だけど、邪魔だからといって解くなよ、解いたら傷口に塩塗りこむからな」

それだけ言つとさつさと立ち上がりそいつは部屋に移動した。

俺はまだそいつと話したくて、半ば衝動的にあいつを呼びとめた。

「おい！ー！ー」

「まだ、何か？」

さっさと答えると言わんばかりの表情――（無表情なんだけど何となく感じられる）に、
思わず言うつもりの無かった言葉が零れ落ちた。

「……もし、だけど。“海賊王”に子供ガキがいたらお前は どう思う？」

それを、聞くとそいつは僅かに興味を持ったように瞬いたあとこう言った。

「……“海賊王”ゴール・D・ロジャーに子供？親の罪は子の罪ではないと私は思う。だいたい、私の父は“鷹の目”だ。王下七武海の一角のな。そんな私が“海賊王”の子供に会ったところで普通に接するだけだと思うがね」

淡々と自分の言葉を紡ぐそいつに僅かに笑みが零れた。

こいつは、今までのやり取りで嘘をつかない人間だって言うことが分かったから

凄く嬉しく思った。

「……御休み」

そいつは部屋を開け、荷物を放り込むと俺に向き合ってそれだけ言う
と扉を閉めた。

「……おう、御休み」

いままで、そんなことも言われた事がなかったからむずがゆい気持ちになっただけどそんなに悪い気持ちではなかった。

今日は良い夢が見られそうだ。

十四話〜私と義弟の関係について〜（後書き）

お互いに第一印象が少し悪かったものどうしが少しずつ歩み寄った結果。

主人公、精神年齢2 越えの主人公にとつたら何でもないので、エースのことも弟のような存在だと思っている。
エース、嫌なやつではなかったけど、弟崖から落つことしたりした俺の手当てしたり忠告したりわけわからん奴。

こんな感じです。双方ともに少しずつ歩み寄った結果。

番外編く北の海での一幕く（前書き）

なんて言うか甘いです。

ラブストーリーっぽいので、苦手な方は見ない方がいいと思います。

北の海の事とトラファルガーさんの子供時代は結構捏造しています。
ご了承ください。

番外編く北の海での一幕く

俺は忘れないあの誕生日を思い出す。
それは、寒く凍えるような夜だった。

俺の住む町に、しんしんと雪が降り積もり、優しい金色の月が輝いていた。
そんな夜だった。

真っ白い寝具のベットに腰掛ける。俺の位置だと表紙の名前が見えないが、ぱらぱらと一冊の本をめくり内容を確かめている少女が一人。

淡い光を発するランプの明かりを受けて柔らかく浮かび上がる青みをおびた黒髪はすんなりまっすぐ伸びて、髪の色とは逆の雪の様に白い肌を縁取る。そして月の様な柔らかい光をおびた金の瞳。理知的な顔にその髪と瞳の色合いは似合っていた。

「ディーネ……」

「なあに、ロー？」

マリアさんが死んでから凄く落ち込んでいたけれど、一緒にいるようになってから少しずつだけ俺を頼って無意識のうちに甘えてきてくれるようになったのが嬉しい。昔は、弟の様に思われていたからディーネに弟以外に見られて本人が無意識のうちに俺を頼って俺に依存しているのが可愛くてしょうがない。

「何をやってるんだ？」

ふふ、と微笑んで聞いたら

「内緒」

笑顔で返された。

「でも、楽しみにしててよ」

「そうか・・・」

本をかばんに戻し、ランプをベットサイドの台の上に移動させる。
それから厚手のカーデガンを脱いでベットの横のチェストに置いて
ディーネはベットにもぐりこんだ。

「ローも寝よう。明日は早いからね」

ヒョイっと毛布の端を持ち上げたディーネに言われる。

俺はディーネが怖くて眠れないのを知ってて、俺の家に居候するよ
うになってからも夢にうなされているのを知っていたから、それか
ら一緒に寝るようになった。

俺はディーネの事が好きだ。

愛してると言っても過言ではない。

だから俺はあいつのどんな表情でも好きだ。

けど、俺はディーネの笑ってる顔が一番綺麗で素敵だと思っているから、俺に笑顔を見せてくれるんだったら添い寝ぐらい何日でもやってやる。

「ロー？」

何時までもベットに来ない俺を訝しげな声でディーネが呼ぶ。

その声は不安で少し震えていて、どうしようもなく俺の加護欲を煽る。

「ああ、今行く」

ディーネと隣り合うようにベットに横になる。

俺達はまだ小さいから、ベットも枕も大きくて、少し埋もれてしまふようだった。

それから俺達は何時もの様に何分も他愛のないお互いの事を語り合っつてそつと手をつないで些細なことで笑って、一緒の毛布にくるまっていた。

その時間も、家の柱時計がなったことで終わりを告げる。

ポーン、ポーン、ポーン

その時計の音は高らかに今日という日の終わりを告げた。

歴史の古いその時計は百年前に作られたのに寸分の狂いもないということで近所で有名で、着実に今日という日が終わったのだと俺達に告げた。

もう、そろそろ寝ないと明日がきついなと名残惜しいけど寝ようと

したら。

「ロー？」

ディーネの小さな声がして、

「なん、」

振り向いたとき唇に当たったのは柔らかい感触と温かさで
驚き見開いた俺の瞳に映るのは顔を赤くしたディーネの姿で

「Happy Birthday Law! Your smile
has a special magic that always
makes me happy.

(誕生日おめでとうロー！キミの笑顔は、私を幸せな気分にかけて
くれる魔法だよ。)

それだけ言つとぱつとそつぽを向いて毛布に潜り込んでしまつて

(え、ちょ、えええええつえええええ！?)

混乱して固まっていた俺の時間が動きだすとともに顔がありえないほど熱くなつて、赤くなつていくのが分かる。

そつぽを向く前のディーネの顔も赤かつたのも思い出されて、俺はまた硬直した。

俺は結果的に全然眠れず、翌朝俺を見ると顔を真っ赤にしたディーネと同じように寝不足だったのはいうまでもない事実である。

蛇足だがディーネが読んではたのケーキの本で作ってくれたケーキは今までで一番おいしかった。

「と、言うのが俺の一番印象に残っている誕生日だ」

（ ）（ ）（ ）惚気キャンドリンられてるとしか思えません船長！！！！！！！！！！

こうやって、ハートの海賊団の日常は流れていく。

番外編く北の海での一幕く（後書き）

応援ありがとうございます。

これからも頑張ります。

十月六日はトラファルガー・ローの誕生日です。（第59巻SBSで判明しました）（「ト」ラファルガー・「ロー」より10月6日）。

この幼馴染ーズは、これが通常運行です。

周りが引くほどいちゃつくくせにつき合っていないという矛盾。

たぶんこれからも無意識にいちゃつきます。

しかし、どちらかが告白すれば自然にくつつきます。

でも再開まで時間がかかるので道のりはまだ遠いのです。

十五話〱私に弟ができた話について〱（前書き）

すごく、久しぶりに更新しました。

誤字脱字などありましたら報告をお願いします！！

十五話　私に弟ができた話について

SIDE：ロンディーネ

「　　何故」

思わず、呟いた。
理解ができない。

自分の従弟であり弟分のルフィのことなのに、理解することができない。

あの子は何なのだろう。

自分の弟であると認めている。
弟であると認識している。

だが、それだけだ。

私はこの子の事を本当に少ししか知らない。

人間は、人間を疑う生き物で嘘をつく生き物だ。

なのに、何故、私の弟は、
　　つ白で真っ直ぐなんだろう。

こんなに真

ありえない。

どうして、そこまで真っ直ぐなのか、なんでそんなに信じられるのかが分からない。

まだ、エースの方が分かる。

あの子はルフィよりも人間が嘘をつく生き物だということを知っている。

知っているからこそ、大切な人しか自分の内側に入れない。
真っ直ぐだけど、疑うということを知っている。

だから私はまだ、エースのほうがりやすいと思う。
警戒し過ぎの様な気もするが、小さい頃から気のいい人たちとは言
え山賊と暮らしていると聞いたからそれは当たり前だ。

ルフィの様に死にそんな目にあわされても、平気な様子でいられる
ほうが私としては理解ができない。

私は、あの子みたいに真っ直ぐじゃない。

人間ヒトを無条件で信じられるほど純粋なわけじゃない。
そこまで、素直ではないし、少しばかり冷めている自覚もある。

大切な人間しか守らない。

傍に寄せない。

近づけさせない。

ルフィの様に他人に簡単に手を差し伸べられるほど人間を信じられ
ない。

“不確グレイターミナルかな物の終着駅”のブルージャン海賊団の一人ポルシェーミ
に殴られて、死にかけたのに、エースとサボと仲良くなれたのも分
からなかった。

どうして人をそんなに信じられるのか、分からない。

今もあの子たちは一緒に、高町に行ったのだけとお金を稼ぐなら、
海賊や貴族からかっぱらうよりも、もっと効率のいい仕事がある。
なにも、犯罪行為に手を染めなくてもいいのに。

それは、貴族以外の人間には酷く厳しい法律がある国だからそれはとても危ない事なのに。

私は故郷でも万屋よろづや、あるいは何でも屋トランプルシューターという分類分けをされる法律の黒に近い灰色の領域グレイゾーンで仕事をしていたから、エース達のことの危険は心身にしみて分かつてる。

けど私は注意することはできない。

過去の私と同じようになにか目的があつて行っているのだったら過去に犯罪（に限りなく近い）を行った私に言えることではない。

なら、止めることはできない。

あの子たちの意思で決めたことなら、あの子たちの夢をかなえる邪魔をしない。

大けがをしない様に死なないように影から見守っておこう。

・・・ルフィが優しい子だつても、エースが不器用だけど本当は乱暴じゃないつても、サボが噂どりの子供ではないつてもダダンの家での一緒の暮らしで知っているんだから。

分からないなりに心配ぐらいしてもいいだろう。

はあ、と溜息一つ

「まあ、いざとなつたら守ればいいか」

あの子達の意思を守れるように静かに動けばいい。
気付かれずに動き、終わらせれたら上々だ。

それに、私は元々、“何でも屋トランプルシューター”の時代ときから、スタンドプレーも個

人プレーもお手の物だ。結論を胸にしまいこむと、グツと伸びをしてから脇に置いてあったお酒と杯をエースに届けるため歩き出した。その、お酒と杯で私達4人が姉弟になるなんて私は知らなかった。

SIDE：サボ

最初は目つきの悪い奴という印象しか持てなかった。

エースとルフィと一緒にダダン達の家に行った時に俺の事をじつと金色の目で見つめてきた。その時はすぐにエースやルフィ達に優しい眼差しを向けたから、その違いに気付かなかった。

その日の夜、エースとルフィが眠った後、声をかけられた。

“何故、ゴアの貴族が此処にいる”とエースやルフィに向けた眼差しとは違った冷たい目で鷹の様に金の目を冷たく輝かせながら。

嘘を言うことは許さないと、その瞳が雄弁に語っていた。

のど元に刃物を突き付けられたかのように冷え切った殺気に、停滞する空気。

三十分、いや刹那に満たないような時間だったのかもしれない。

からからになつた喉をふるわせて答えた。

俺の答えを静かに聞いた後、

「“ごみ山”をわざわざ馬鹿にしに来たわけじゃないことは分かった。・・・だが、ルフィとエース達を悲しませるんだったら、私はキミを許さない」

鷹のような目で俺を見つめた後、静かにしかし力強く宣誓した。そい

つは俺に口止めをした後、現れた時と同じように静かにそして速やかに去っていった。

だから、俺はあいつの何もかも見透かしているようなあの金色の目が苦手だった。

いや、あいつそのものが苦手だったのかもしれない。

そんなことがあった次の日に普通に話してくる大胆さも苦手な部類だった。

それに、あいつは変な奴だった。

俺達の夢を聞いても笑わないし、高町や端町で騒ぎを起こして帰ってきてても何も聞かなかった。

ただ、黙って俺達の傷の手当てと、心配をしてくれた。

怪我をするな、気をつけると何度も何度もまるで俺達が家族にでもなったかのように言った。

一緒の場所で暮らすようになってから、他の言葉も俺に言ってくれるようになった。

最初の鷹の様に鋭い目では無くて、月みtainな優しい目で俺を見るようになった。

鉄面皮の表情を緩めることもあった。

それに気づいた時の衝撃は今でも忘れることができない。

なんだ、この人は不器用なだけか、そう思った。

それをエースに言うとようやく気付いたのかよ、と笑いながら言われた。

ルフィに言ったらねえちゃんは優しいぞ、と言いきられた。

なんだ気付かなかったのは俺（サボ）だけか、と三人で声をそ

ろえて笑った。

それから、あまり苦手意識を持たずに会話ができるようになった。
今日、俺は苦手だと思ってた奴と、エースとルフィと杯を交す。

「「「「これで今日から、俺／私達は兄弟だ！」「」」」」

十五話　私に弟ができた話について（後書き）

主人公はルフィのエースと仲良くなる前のコルボ山での怪我などを見てそこまで信じ切れるところが苦手なようです。なんで、そんなに怪我させた相手の傍に行けるんだらう？みたいな感情があるようです。

応援ありがとうございます。

これからも頑張ります。

十六話上へ私と弟達と不確かな物の終着駅についてへ(前書き)

ダタンの口調がうまくつかめてません。

すこし、変なところがあるかもしれせん。

誤字脱字などありましたら報告お願いします!!

十六話上 人と弟達と不確かな物の終着駅について

SIDE：ロンドンディーネ

あの日、杯を交わしてからルフィ達と義姉弟になった。ルフィ達の手合わせにつきあったり（私の圧勝だった。父さんから仕込まれたのに師のいないルフィ達には負けられなかった。大人げないと言われようがこれは私の前世から持ち合わせている矜持だ）、狩りにつき合ったりしているうちに時が流れた。

今までは、南サウスフルの海や偉大なる航路グランドラインの夏島などにいたから感じなかった寒さを感じるようになって、

雪と寒さと白しくない美しい北ノースフルの海を、思い出すことが多くなった。人々が分厚いコートを着てせかせかと歩きまわり、子供達は雪で遊び、大人の手伝いで雪かきなどをするその光景を思い出してしまっ

た。

ここでは見られないその光景を

東イーストフルの海も素晴らしいが、故郷ノースの方がもつと素晴らしい。

あの雪のあの冷たさも美しさも寒さも何もかもが愛おしい。

私はもう随分帰ってなくて、ローにしか手紙を送ってなくて、雪にすら触れていない。

あの寒い雪の感覚も、寒い夜に作ったシチューの味も、寝る前に母

さんが作ってくれたホットワインの味も忘れてしまいそうだった。故郷の記憶も薄れてきた。

それに気づいた。

気づいてしまったら急に故郷ノースに帰りたくなって、手が勝手に手紙を書いていた。

父さんと祖父に、故郷に帰ってもいいですか？と、

それを書きあげた後、私はダタンとエースに声をかけてフーシャ村に行った。

変な胸騒ぎがした。

けど、それを無視するように手紙をデリバリー・クーに届けて貰いに行った。

あの時に留まっていればよかったのに、私は気付かなかった。

そう、気付けなかったのだ。

気づいたら何かが変わっていたかもしれないのに

SIDE：エース

あの日、杯を交わして、俺達は義姉弟になった。

それから姉になったロンディーネが手合わせで獲物を使っていないのに呆気なく倒されたり（サボも負けてた。ルフィはも負けてた。何時か勝つ！！）、狩りをしに行ったり（俺らが三人がかりで倒すワニを一撃で倒していた）、端町に奇襲をかけに行ったり（ロンデ

イーネは来なかった。仕事があるんだと)

ロンディーネが早朝から毎日の日課の剣術修行するのを見たり、そうやって毎日を過ごしていた。

毎日そうやって過ごせるのだとそう思ってた。

そんな保障などどこにもないのに、勝手にそう思い込んでいた。

そんな危険と紙一重で幸せだった日常が崩れるまで俺はソレに気付かなかった。

気づいていれば、何かが変わったかもしれないのに

SIDE：ロンディーネ

サボ達がいなくなった。

フーシャ村のデリバリー・クーに手紙を頼んだあと、もう暗くなってしまったので、村長に泊めてもらい。朝日がのぼった後すぐにダタンの所に戻ってエース達の事を聞いた。

すると今日はまだ帰ってきていないと答えられた。

じゃあ、あの木の上の家で寝泊まりしてるんだ。そう思った。

最近はこちらに戻ってくる方が珍しくなってきたしな・・・

せっかく、金平糖とかお菓子を土産にもってきたのに残念だ。

その時は軽く考えていた。

エース達がよく不確かな物の到着駅ケレイ・ターミナルにいることもその手前森にいるのも知っていたから、今日もそのたぐいだと思った。

だから、私は義弟達の現在の状態に気付けなかった。

北の空が赤に染まるまで、弟達エース、サボ、ルライがどんな目目にあっているのかも分かんなかった。

SIDE：ダタン

ロンディーネがフーシャ村から帰ってきた。

手紙を出しに行ったら遅くなってしまったので、マキノと村長に夕飯を食べて泊めてもらったらしい。

誰に出したんだ？と聞くと父さんとお祖父ちゃんに、と答えられた。

お土産買って来たんだけど？エース達は、と聞かれ、まだ帰ってきてないと言つと。

人形のように整った顔を変えないまま溜息をついた。

その顔は少しだけ残念そうに見えた。

それから、少しだけ話をした。

故郷ノースホルの北の海の話や、そこにいる親友の話を

こうやって、ロンディーネと話したのは初めてだった。

いつもはエース達の抑止力として動いているし、あまり山賊が好き
そうではなかったから・・・

この子は、思ったより人らしいのかもしれない。今までは表情を動
かさなためか人形にしか見えなかった、だから、意外だった。

この子はいいい奴なのかもしれない。

それを伝えようとしたら、急に空が赤く染まってきた。

それを見て、ロンディーネは顔を青くして、傍に立てかけてあつた
刀を引っ掴み。

北の空の方向。火元である不確かな物の終着駅に向かつて駆け出し
た。

大人を待たずに一人だけで行くなんて、だからガキは嫌いなんだよ
！！

十六話上々私と弟達と不確かな物の終着駅について（後書き）

これからも、応援を宜しくお願いします。

十六話下ゝ私と弟達と不確かな物の終着駅についてゝ（前書き）

所々表現にオリジナルな部分が入ります。

なにか、間違っているところがありましたら教えてください。

誤字脱字などがありましたらコメントをして教えて頂けると嬉しい
です。

十六話下〳私と弟達と不確かな物の終着駅について〳

SIDE：ロンドイーネ

走る、走る、走る、走る

速く、もっと速く、間に合うのなら最悪、足なんかどうなってもいい！！

だから、もっと速く！！

神様（藍嚙か？）、間に合わせてください！私はどうなってもいいから弟達だけは！！

コルボ山を転げ落ちるように下りいつもの半分以下の時間で不確グレイかな物の終着駅の手前の場所にまで到着する。

そして、不確グレイ・ターミナルかな物の終着駅の入口を見て悪態をついた。

「　　っ、くそっ！！」

火が燃えている。

人を、ゴミを、森を、飲み込んで、めらめらと燃えている。

押し合いへしあいどうにかしてこちらに逃げようとしている人たちがいる。

火だるまになって転げまわっている人がいる。

どさくさにまぎれて、人の物を盗む火事場泥棒がいる。

あちこちで人の悲鳴と煙がおこる。

あまりの光景に呆然としている私の前に、もう、焼けて動かないエースやサボヤルフィと同じ年頃に見える子供達の死体が、・・・人のやける匂いと一緒に目に入り込んできて

吐いた。

「うっえええ、ふっ、っ！！」

半ば焼けて顔と僅かな部分のみ人としてのものが残っていて、こちらをじいと思つめていているようで

思わず木の根元にしゃがみ込み、吐いた。

何もかもなくなつてのどが胃液で焼かれた時にようやく止まった。

吐しゃ物で汚れている口元を乱暴にぬぐい。

背筋をどうにか伸ばして立ち上がる。

私だって、父さんとの生活の中で海賊に襲われたり、父さんが海賊に暇つぶしをしかけた時に刀を持って戦って人を殺めたことあやもある。

最初は怖くて、自分が人を殺した時には吐いた。

あの独特の感覚も感触もどこを斬ればどうなるのかも知って、覚悟も決めていたけど

これは何？なんで？理不尽だ。不公平だ。不平等だ。

だって、この子たちは何もできないで死んでしまっている！！

父さんは戦う相手には一定の礼節を持って、と私に言った。

前世の祖父も同じことを言った。

これは、その礼節も何もかも踏みじじる行為だ。

この子たちは何にも対峙することなく、疑問を持ちながら死んでいった。

なら、人を人と思わず僅かな人権さえも奪い取るような、これは何？

多湿な“ごみ山”は風が強くて火がついたとしても燃え上がらないから大火事にはならない。誰かが油や爆薬を使って故意にやらない限り、これは起きない。否、起こすことなんてできはしない。

此処に住んでいる人たちは自分達の寢床で家なんだから火の管理にはすごく気を使うからありえない。ブルージャムも自分達の隠れ家である此処を焼き払いはしないだろう。

・・・一番確率がありそうなのは貴族と王家の奴ら。

ゴア王国に天竜人が視察に来ると言う話は聞いたことがあるけど、もしかしてこの国がゴミと認めているものを焼き払ってばれない様に始末しようと考えた、とか？

まさか、そこまで腐ってはいないだろうし。

それに、今はそれを考えるのは後回しだ。

考えている暇があるなら、できるだけ早く私はあの子たちを見つけないと、

なくして、後悔するのはもうごめんだ。

私は最強じゃないし、父さんやお祖父ちゃんには勝ったことすら無

い。
火も怖いけど、弟達は守りたいから。
一か所、火の弱いところを見つけると私はそこから熱風と業火に包まれた不確かな物の終着駅に突入した。
グレイ・ターミナル

SIDE：エース

喉が乾く、肌がひりひりとする。
熱風と業火が俺達の道を塞ぎ囲む。

ルフィに檄を飛ばし、あたりを見渡す。

逃げ道が無い。

あちこちが燃えていて火の壁が辺り一帯を囲んでいる。

喉が痛む。

腕からすり落ちそうになった鉄パイプを握りなおし、ルフィを連れて移動する。

このまま此処にいたら死んでしまう。

むせて、苦しくなりながらも逃げる場所を探す。

姉さんなら、この状況をどうするだろうか。

あの博識で器用な姉と一緒にいたら弟ルフィを守れるだろうか。

ブルージャムに捕まえられてこの火の中に残されることもなかった
だろうか、

ふとそんな事を考えた。

「、ルフィ！！」

エース！！サボ！！何処だ！！」

姉さんの声がした。

まさか、そんな、姉さんはダタン達の所にいるはずなのに、どうして？

炎をかきわけて現れて姉さんはあたりを見回していた。

「ねーちゃん！！」

ルフィが叫んで、姉さんに気付かせた。

「ルフィ、エース！！無事か？怪我してないか！？」

慌ててきたのか髪の毛の結び目が歪んでるし、白い肌が所々すすで黒くなっている。

俺が観察している間にぺたぺた体を触られて怪我が無いか確認された。

姉さんはブルージャムに縛られた時の縄の後に眉をひそめたけど、それを告げずに

「よ、よかった。無事だった・・・」

すごい安心したような声を出して、抱きしめられた。

ルフィは泣きだし、姉さんはいつもの無表情がどこかに吹っ飛んでるし、俺は俺で抱きしめられたことが無いからどうしたらいいのが分からなかった。

「・・・サボはどうしたんだ？」

まさか、逸れて!?

姉さんは顔を青くして探しに行こうとしたが、俺は裾を掴んで。

「……姉さん。サボは、」

家に帰った。

そう告げると姉さんは訝しげに俺達を見つめてきたけど、
そうかと答えて俺達の手を引こうとしたが、俺の言葉に立ち止まっ
た。

「なんで、探しに来たんだ?」

気づいたらそんな言葉が零れ落ちていた。

だって、命の危険まで犯して助けに来るのが分からなかったから。
そう言うと、姉さんは思いつきり顔をゆがめた後、俺の頭を小突い
た。

「エースの阿呆」

「……だって、わけわかんねエーもん」

「だから、阿呆だと言っているのだ。いいか、キミと私達は家族な
んだから。理由も理屈もなしに弟達を姉の私が

助けにいつてなにが悪い」

そうきつぱり言い切られた。この人には敵わない。
だって、欲しい言葉をくれる。

この人は俺の心をつかんで離さない。

俺とルフィは姉さんについて行ってこの中を駆け抜けることにした。早くしないとここにも炎が回って、足元の地面が崩れちまう。

「待ちやがれガキども!!!」

ブルージャム達に囲まれた。奴らは手に武器を持っていた。

姉さんは、フツと鼻で笑って

「待てと言われて待つ奴がいるわけないだろうが」

にこにこ俺が見たこと無いような笑顔で言い切った。

笑っているのになんか怖い。

いつもの姉さんじゃない。

俺よりも姉さんと付き合いの長いルフィも驚いた顔をしている。

それに、と姉さんは続けて

「てめエ!!!」

「図星指摘されて怒るんですか？やれやれ、こんな、大人になるのは死んでもごめんですね」

手でジャスチャーまでやってのけた。

周りを炎で囲まれている、その筈なのにめっちゃくちゃ寒い。

「だいたい、人の弟達に怪我させといて、そんな大人、しかも犯罪

者に呼びとめられて立ち止まる子供なんていやしませんよ」

ブルージャム達が怒りで人相が変わっていくのに姉さんは柔らかく笑ったまま。

「それに、むかえも来たようなので、そろそろお暇させて頂きますよ、っとー!!」

振り向きざまに刀を振るった。

俺とルフィを狙ったブルージャムの手下に向かって。

銀色の光が姉さんから放たれる度に鮮やかな赤が舞う。まるで何かの手品の様だ。

姉さんが刀を振るう度に、人が倒れていく。

そしてブルージャムしか立っていなくなった時、

姉さんは刀の切っ先をブルージャムに向けて何かを言おうとした。

その瞬間。

「やめねエか海坊主~~~~!!!!」

「ダダン」

「なんでお前らここに!!!!」

俺達とブルージャムを遮るように対峙する。

姉さんの笑ってない笑顔が消えた。

温度が戻る。

「先走んじやないよロンディーネ」

「だって・・・」

「なんの因果かお前達の仮親登録されてるんだ。親は子供を守るものだろうが!!」

ブルージャムの一味とダダン達がにらみ合う。

「ダダン達は、ルフィとエースを連れて先に行つてすぐに追いつくから」

「バカ姉!!そんな事出来るわけないだろう!!?」

「いいから。私の中で一番強いし殿にはもつてのこいだ」

それに、

「私、相当頭にきてるんだよね。」

俺が覚えているのはそこまで、気づいたら俺とルフィはドグラ達に担ぎあげられその場から連れ去られた。その場に残った武器を構えたダダンと刀を掲げた姉さんの背中が見えた。

俺だって、姉さんたちみたいに戦えるのに・・・!!

十六話下、私と弟達と不確かな物の終着駅について、(後書き)

応援ありがとうございます。

これからも頑張ります!!

番外編EF〈私のありえるかもしれない将来の話について〉（前書き）

クリスマスだぜってことで糖分を（自分的に）投入してみました！！
ちよっとほろ甘な話になっています。

みなさん、いいクリスマスを！！

番外編IF〈私のありえるかもしれない将来の話について〉

SIDE:ロー

ディーネとの思い出？そりゃ、山ほどあるが・・・

ああ、それが何かって？

なんでお前に言うようなんだ麦わら屋？

ん、火拳屋に頼まれた？

・・・まあ、牽制にはなるか。

何か、言ったかった？

何も言つてねえよ。

気にするな。

気が変わった。いいだろう。話してやるよ。

俺とディーネが、最初に会ったのは路地裏だ。

目があった瞬間、傍にいた野良猫よりも素早く姿をくらました。嘘じゃねえよ、嘘に聞こえるかも知れないが本当の話だ。

あいつは野良猫みたいなやつだったんだ。

警戒心は人一倍あった。

怖がりでもあったのかもしれないな。

どうして、仲良くなったのだった？

最初は仲良くなるつもりはあまり無かったな。

ただ会うたびにベンチに座るんだが、その間の幅が少しずつ狭まっ

ていくのが嬉しかったんだ。

そう、最初はそれだけだった。

それから、いろんな話をするようになってな。

いろんな話をした。

家の事はあまり話さなかったけど、それ以外だったら結構話したぜ。俺が親父に習った医学の話とか、あいつが調べてた“偉大なる航路”^イの様々な島の風土や伝承の話とか。まあ、基本雑食だ。真面目な話もすれば雑学の話をしたりもした。

そういう話をしてる時にディーネが時々幸せそうに微笑むのを見るのが好きだった。

可愛かったし、微笑みつてのは周りにも幸せさも伝わるからな。

それだけならただの友達だっただろうな。

話をして笑いあう。

普通のダチだろう。

でも俺は、初めてだったんだ。

ディーネが初めて認めてくれた。

身内以外で俺の夢を話を笑わなかったのは、あいつだけだ。

俺の夢を聞いた後、月みたいな金の瞳をキラキラさせて、うつすら顔を赤くして、そうなんだ、ローは凄いカッコいい夢を持ってるんだね、って。

凄く綺麗な顔で笑ったんだ。

否定しないで肯定してくれたのが嬉しくて気がついていたら俺の隣はあ

いつの場所だった。

それから、仕事の時は一緒に入れなかったが、よく一緒にいたもんだ。

此処では言えないような悪戯もしたし、風呂にも一緒に入ったことがある。

一緒に寝たこともあるな。

誕生日は手作りのケーキとかセーターとかも編んでもらったこともあるし、

一緒に宝さがしもしたことがある。

なんで、そんなに驚くんだ？

ああ、そうか。

お前らは、あいつのこと大人っぽいとか礼儀正しいと思ってるのか。確かに、ディーネは大人だし礼儀正しいけどな。

それ以前に結構変なところが子供っぽくて、からかうとムキになって怒る。

自分の身内が怪我したり死んだりすることを凄く恐れる普通の女なんだよ。

大体、あいつが剣を持つようになったのなんて、あいつの母親の病気を治す為にお金を稼ぐのに素手じゃまずいdarってことで親父さんが使ってた剣を引っ張り出してからだぞ。

才能が鬼才と称されるほどあったからその理由は気付かれなかったんだろっけど、あいつは怖がりだから、いざという時は自分が大切を守るように剣を極めようとしてるんだ。

なんで、お前らが気付かないのかが俺には分からないけどな・・・

何？ディーネの事を好きかって？

好きではないな。

あー、そう怒鳴るな、麦わら屋。

俺はそういう意味で言ったんじゃないっての。

・・・つまりだな、俺はディーネの事を

S I D E : ロンディーネ

この間。

ルフィにローの事を聞かれた。

初対面は路地裏だと、話し始めたら何故か複雑そうな顔をしていたが、

ローがらみの昔の話をルフィに話しているうちに思い出したことがある。

そう呟くと、何故か勢いよく答えられた。

何だって？

まあ、これくらいなら話してもいいか・・・

確かあれは、北の海の冬のことと珍しく雪も降らずに晴れた日の事だった。

小さい頃からローは、大きな夢を持っていた。

それは“ひとつなぎの大秘宝”^{ワンピース}を探して見つけること。

海賊王になってそれを見つけたことが夢だと周りの奴らにそう言っていた。

周りの大人たちはまだ子供だからって笑っていて、あいてにしていなかった。

正直、私もそう思ったこともある。

だけど、同時にそれは素敵だと思った。

浪漫があると思った。カッコいいと思ったんだよ。

…私はね、あれにやられたんだな。

きつと、ね。

「…俺は将来海賊王になって“ひとつなぎの大秘宝”^{ワンピース}を見つかるんだ。否、見つけてみせるんだ」

ローが自分の夢を語ると瞳がキラキラと光り輝いてさ、とつても綺麗だったんだよ。

青銀の瞳が海みたいで飲みこまれそうで、引き寄せられたんだ。

口から語られるのは輝く夢。自分の夢を信じるその強さ。私が持っていない夢の話。

それをすごく、眩しく見えたのを今でも覚えてる。

正直、うらやましかった。

その頃の私にはそんな胸を張って言える夢が無かったからね。

…嫉妬しなかったと聞かれれば嘘になる。

それまで、対等だと思っていたのに相手の方が凄く見えたとし思えた

からさ。

置いてかれた気分だったのかもしれないな…。

私の中でローは絶対に対等でいたい相手なんだ。

今でも対等でありたい相手だ。

子供の頃なら感情が先走るから今よりもその感情が強かったんだろう。

どうしようもない位、悔しかったし、羨ましかったし、とても眩しかった。

その頃は、自分が海賊になるなんて夢にも思っていなかった。

真剣に北の海に骨をうずめる気でいた。

母さんの病気を治して父さんを待つのもいいと思っていた。

けど今は、ローの夢が私の夢にもなっているわけで…。

賞金稼ぎから見事に転職を遂げ賞金首札付きになって仲間と一緒に海賊街道を驍進中さ。

ん、何さ、その不服そうな顔は？

俺が海賊王になるんだって？

生憎だがその夢はもう譲れないよ。

ローを海賊王にして“ひとつなぎの大秘宝”ワンピースを見つけるのが私の夢になったからね。

ルフィでもエースでもキッドやキラにだってこの夢は譲れない。

私の船長恋人の夢で、私が初めて誰にも譲りたくないと思ったものだから

らね。

私の船長を海賊王に。

白ひげでもキミでも他の誰でもない、私の唯一トラファルガー・ローの船長を王にする。
これだけは弟達にも友達にも譲れないね。

なんで、そんなにあいつの事を好きなのかって？

ルフィ、私はローの事を好きなんじゃないよ・・・

なんでお前もか、みたいな表情になっているのか知らないけどね、

つまりね、私は彼と彼の夢に剣をささげて一生一緒にいたいと願う
くらいにはローの事を

（愛してるってことだ／さ）

番外編EFの私のありえるかもしれない将来の話について（後書き）

何時も応援ありがとうございます。

年末年始は更新できない状況に落ち込むので今年の更新は多分これで終わりです。

来年もよろしく願います！！

十七話　私の思い、弟の思いについて

SIDE：ロンディーネ

のどが痛い、体が重い。

背中に担いでいるダダンを担ぎなおした。

くすぶる炎で酸化して炭になった木々の匂いに胸がむかむかする。

地盤はほとんど崩れていて、所々殆ど骨になった人たちの死体があつて目眩がした。

さつき崩れてきた瓦礫で切れた左足が痛い。

けど、ここで座つたら駄目だ。

だって、ダダンが

ダダンが凄いやけどをしている。

ブルージャム達は簡単に倒せた（父さんに叩きこまれているんだ。

そこらへんの海賊に負けてたまるか）。逃げる時に炎に囲まれそうになつて、それだけなのに・・・

なのに、なんで、

「　　なんで、私を庇つたんだ。　　、　　わけが、わからな

い」

返事が無いのは分かっているけど問いかけずにはいられなかった。

私は、死なない自信があったのに、私よりも弱いダダンは私を庇って死にかけている。

理由が分からない。

理解できない。

なんで、どうして、死んじやうかもしれないのに、無理やり押し付けられた子供を庇うのか？

エースやルフィ、サボなら分かる。

なんだかんだで打ち解けてたし、あの可愛い弟たちなら助ける。それならわかる、けど私は山賊が嫌いで避けてたのに、

なのに、なんで私を守ったのか、それが分からない。

ダダンの傷に障らない様にしながら痛みを歯を食いしばってできるだけ速く走る。

あいつらに見つかったら殺される。

少しでも“此処”から遠くに早くダダンのすみかに帰らないと、ダダンは死んじやうかもしれない。

そこまで考えて、ふとそれは、

「嫌だな」

と思った。

歩みが止まる。

足が何かに縫い付けられたかのように動かなくなる。

ぼたぼたと足から血が流れていくのがなんでかゆっくりに見えた。

私は基本家族と身内以外の人間がどうなるかと気にしないのに、なんだかんだで面倒を見てくれたダダン達は嫌いじゃ、なかった。だから、居心地のいい空間が無くなるのは嫌だな、と思った。

ああ、そうか私は、

「死なないで、ダダン。私、思ったよりも君の事が好きだったみたいだ」

起きてたら言えないけど、今は、眠っているから、いつもなら言えない言葉も紡げる。

私は山賊が嫌いだけど、ダダン達の事は例外中の例外のことだったらしい。

今までの生活で一番家族らしい暮らしができた。

普通じゃないけど普通の様な生活ができた。

それをなんだかんだで提供してくれたダダン達は嫌いじゃ、なかったんだ。

無神経ですうずうしくていららしたこともあったけど嫌じゃなかったんだ。

それを理解^{わか}った瞬間、何かがストーンと落ちてきて、

ああそうだったんだと、納得した。

だから、絶対に間に合わせるから、

「……死なないでよ」

それだけ告げ、全力で駆け抜け始めた。

S I D E : エース

あれから、何日か過ぎてもロンディーネ、もとい姉さんとダダン
は帰ってこない。

姉さんは強いけど、やっぱり一人にしたらいけなかったんじゃない
か・・・

そう思つて、探しに行こうとすると全員に捕まって布団に押し込ま
れた。

結構酷い傷とやけど残つてんだから動くな！

俺達が頭達を探すから安心しろ！！と叫ばれて。

ルフィも結構怪我してて隣の布団に寝かされてるし、
じつとしかないとぶん殴られそうな感じだし。
なんか、あいつらみんないらしてるのか？

そりゃそうか、自分達が信頼してる人がいないんだもんな。

「姉さん」

言葉が零れて落ちた。

早く帰ってきてよ。

ルフィや俺や皆、二人の事心配してるんだ。

大人が顔色を変えて、凄い勢いで探しているんだ。

皆、皆、心配しているんだ。

だから、早く帰ってきて、皆に心配かけたことにいつもあんまり変わんない表情を少しだけ変えて、謝ってくれよ。そしたら帰ってきてくれたことが分かるから。

そのあとは、できたら、苦笑いでもいいから笑って欲しい。

姉さんなら、簡単にできるだろ？

あとね、姉さんが心配してたサボは親の所にいるんだよ。

俺たちのいない方が幸せかもしれないんだ。

貴族の子供だったから高町の家にいるんだよ。

ねえ、姉さんは強いんだろう？

俺達四人の中で一番強いんだろ？

ブルージャムだって簡単に倒せるんだろ？

ダダンと一緒に帰ってこようとしているんだろ？

・・・死んでなんかいないんだろ？

だったら、早く、俺達の所に

「はやく、かえってきてくれよ」

膝を抱えて蹲った。

泣きそうになった。

家族の事で泣きそうになるなんて、初めてだった。

十七話　私の思い、弟の思いについて（後書き）

まだ、ちみっこのまま進みます。

早くロンディーネをおつきくさせたいです。

そして次回は、サボを……

十八話　私とサボとこれからについて　（前書き）

まだ、現時点でサボの生死が分からないので、そこらへんの表現はぼかしてあります。若干オリジナルな表現が入ります。

十八話　私とサボとこれからについて

SIDE：ロンディーネ

重い体を引きずって何日かかけてダダンのすみかに戻ろうとしてた私はダダンのすみかかと捜索人が目に入った瞬間、流血と睡眠不足、軽い脱水症状でぶっ倒れた。

それでも背中中のダダンは落とさなかったらしいから、まだましだろう。

エースとルフィに凄い怒られて、泣かれそうになったけど。心配してくれたのが嬉しかった。

ローは私が怪我すると心配してくれたけど、母さんには怪我のことを言えなかったから。父さんは怪我の程度の確認だけしかないし。手当ても一段落して、（ダダンの怪我はきちんと処置したけど、私の怪我は薬が足りなかったから包帯を巻いて固定しただけだったから怒られたけど）状態を聞くと足の怪我はどうにかなるらしい。なんでも、固定した時の措置がよかったようだ。私もダダンも大丈夫だって、言ってた。

父さんとローに教えてもらったことが役に立った。

怪我の痕も、後遺症も残らないと教えてもらって安心もした。

ダダンの怪我の具合にも安心したけど、私が一番ほっとしたのは、自分の怪我の事だった。

北の海イナマリに帰る前に怪我の痕と包帯が無くなってくれれば言うことはない。

いや、普通自分を庇った人の事を心配しろよと言われるかもしれないが、後の事を考えたら私の方がまずいことになる可能性の方がヤバイ。

ローが、怒る。

トラブルシューター
何でも屋をした時の怪我を治してくれたのはローだから、感謝をしている。けど、私が怪我をした時のローは怖い。

かお
表情が凍りついたかのように無表情になっていく、その過程と結果が怖い。

しかも、大火事に巻き込まれて、ローが知らない大人を庇って落ちてきた資材で怪我しましたなんて言ったら間違いなく機嫌が悪くなるし怒られる。

かお
言葉が荒れるのに表情が、能面みたいな状態で怒るのだから、たちが悪い。

それに、ローって気に入った人間以外の奴に興味もないし……。私（私の事を親友だと言ってくれた）が怪我する原因を作ったような奴には容赦ないし。

正直、バレたらヤバイ。

大人も嫌いだし。

元々、私を故郷から連れていった（傍から見れば誘拐だよな）祖父だって大っ嫌いなのだ。

その祖父に預けられた先の保護者を庇って怪我したし。

しかも、私が最初に火事の中に入ったのは弟達があの中にいる
って気付いたからだ・・・

これがばれたら、弟達とダダンの危険が危ない。

想像してたら凄く怖くなってきたから止めよう。

ばれなきゃいいんだし・・・

先のことよりもサボだ。

現実逃避とかじゃないよ、・・・帰るのが怖くなってきたけど。

それより、サボだ、サボ！

私の上の弟の一人で弟思いで、生まれがゴアの貴族の子供だけど私
の大切な大切な弟だ。

エースとルフィに聞いたら親に連れて帰られた、らしい。

二人に話を聞いて、考えてみると、

サボが親について行ったのは、きっと

「あの二人を守るため、か」

悔しかっただろう。

嫌だっただろう。

辛いだろう。

あの鳥籠の様な場所が嫌いで飛び出してきたのに、
大事な兄弟を守るために、親の作った鳥籠の様な場所に戻ったのだ。
まだ、サボは小さいのに自分の事よりも兄弟の事を選んだ。

それがどんなに辛いことなのか。

私の弟の中で一番大人びていて頭もよかったけど、
自由を私達四人の中でなによりも望んでた。

そんな、子供だった。

大人っぽいけど本当は寂しがりやな子供なのに、

その貴族は、あの年齢の幼い子供に、そして私の弟になにしてくれるのか

そいつらは、本当に親なのか

私の親は、母さんは優しく、父さんは厳しいけど真つ直ぐな愛情をくれたのに、それが親が最初に子供に与える義務がある物なのに、それすらしない親は本当に親なのか？

ああ、いらいらする。

弟を守ると誓ったくせに守れない私にも、そのサボの親とのたまっている大人の皮を被った可笑しい子供の事も、兄弟の事を考えて自己犠牲を決めたサボのことも、全てがムカつく。

口角が上がるのが分かる。

くくつと笑い声がでた。

今、私の周辺はそうとう薄暗いだろう。

私、サドだし、やられたらやりかえせの精神だ。

人に与えられた恩は二倍、怒りは三倍、屈辱は五倍でかえすような人間だし。

「怪我が治ったら、いっそ」

その言葉は、口の中で溶けて消えた。

帰ってきたドグラの衝撃的な言葉で

SIDE：ルフィ

姉ちゃんが帰って来てから、手当てをして俺達の傍にいたんだけど、

サボの話を俺とエースから聞いた後の姉ちゃんがすげえ怖ええ。

へえ、って言ったつきり、何も言わないし話さないけど、そーとー怒ってるってことはわかる。

とにかく、こえええ。

笑ってるけど、目だけはにこりともしてない。

心なしか寒気がするし、ほのかに暗い何かか辺りに渦巻いているよ
うな気がする。

エースは

「ああいつのを美人が怒るほど恐ろしい物は無いって言うんだろ
な」

って小声で教えてくれた。

確かに凄え怖い。

というより怒ってるのが珍しすぎてそういう意味でも怖い。

ダダン達の中で一番若いユートが勇気を振り絞って姉ちゃんに話
かけた。

「ロンディーネ、どうかしたか？」

「何でもありません」

「いやでも、なん「何でもありません」、そうか・・・わかった」

撃沈した。

「ああいつのをへたねって言うんだぞ」

エースがそう言っていた。

そういう空気の中、時間だけが過ぎていく。

姉さんだけが笑顔だ。

エースは眉を歪めてるし、ユートは泣きそうだし、何人かはどっか
に消えた。

ユートは小さい声で何事か呟いている。

この微妙な空気がぶち壊れたのはドグラが来たからだだった。

エースやユートが助かったと呟いたのが印象に残っている。

それが、俺達にとって最悪な報告だとしても。

S I D E : サボ

俺には三人の姉弟がいた。

最初は長女のロンディーネ。名字は厄介事に巻き込まれるからできるだけ内緒にしたいらしい。

青みを帯びた不思議な黒髪に、黄金や月みたいな金色の目を持った俺らの姉。

無表情で無感動な人間に見えるけど、実は一番姉弟の情が深い。俺達の中で誰よりも強く、誰よりも俺達の心配をしてくれた。

怪我をしたことに文句を言ってもすっかりと俺達の怪我の手当てをしてくれる。

次は、俺と同じ長男のエース。

猫っ毛の黒い髪に黒い目。

日焼けした肌にはうっすらそばかすがあって、笑うと凄く愛嬌のある顔になる。

笑顔が太陽みたいな奴。

ゴミ山や、街の奴らは悪童と呼ぶけど、俺らには優しい兄弟にしか見えない。

俺は海賊になる、と夢を話していた。

最後は、俺達四姉弟の弟のルフイ。

真黒い髪に同じ色の目。目の下には傷跡があって、いつも楽しそう

にしている。

兄弟で一番弱くて小さいけど夢は俺らに負けなくらい大きい。能天気によく分からん行動をする時もあるけど、俺らの愛すべき弟^{バカ}だ。

俺には、家では出来なかった家族の温かみを知った。皆、温かかった、優しかった。

貴族の付き合いみたく上辺だけの付き合いじゃなかったから、最初は凄く驚いた。

例えば風呂上がり髪を拭いてくれたりとか、俺ら三人がうたた寝したら姉さんが毛布をかけてくれることとか、たまにお菓子やなんやかんや作ってくれて、皆と一緒にいることとか。そんな些細なこと。

窮屈な家とは違った温かい空間。

俺にそれを無条件にくれた。

俺、今が一番幸せだ。むしろ、幸せすぎて怖い。

それを言つと長姉には呆れたように小突かれ。

長男には思い切りどつかれ、弟には突撃された。

「私／俺達と家族なら、もっと幸せになるんだよ!!」「」

「というより、大人になつても私達が家族なんだから今が幸せなら絶対にもっと幸せになれるよ・・・」と、呆れたように姉さんが。

「っーかこのメンツで、幸せになれなかったらおかしいだろ」と、もう一人の長男が。

「サボは幸せになれんだろ!!」
と、天真爛漫な弟が。

「「「それに・・・」」」

「それに？」

思わず聞き返すと

「「「家族なんだから、私ノ俺達、皆で幸せにする！！一緒に世界で一番幸せな家族になって、幸せすぎて不安に思わないくらい絶対に幸せにしてやるからな！！」」」

皆、姉さんは呆れたように、エースは照れくさそうに、ルフィは天真爛漫に、笑って。

「ついでに、反対意見は認めねえぞ！！」

と、にやりと笑ってエース。

「それと、返事はyes or はい。しか認めないから」

と、何時も通りの無表情なのに目だけは悪戯っぽく輝いている姉さん。

「で、返事！！」

と、にししと笑いながらルフィ。

三人に手を伸ばされて、俺は泣きそうになって笑って

「！！」

俺は何て答えたんだっけ？

そこで、記憶にノイズが入って、目の前が白く変わって

もう、ソレに何を答えたのかも思いだせない。

大事な大事な答えだったのに、初めて、守りたいと思った奴らのことなのに、初めて、一緒にいたいと思った家族の事なのに、思いだせない。

ごぼツと気管に水が入って来て、苦しい。

打ち付けられた身体が痛い。

痛い、痛い、いたい、イタイ、イタイ、イタ、イ。

姉さん、エース、ルフィ、ダダン、み、んな。

痛いよ、辛いよ、苦しいよ。

なんでかな？なんでこんなことになったのかな？

俺は、俺はただ、自由に、生きたかった。

皆みたいに、皆と一緒に、自由に生きたかっただけなのに！！

もう、俺に映るのは歪んだ水面と、バラバラになった船の部品だけで、

目を閉じた。

あと、感じられるのは海水の感覚だけだった。

それだけ、だった。

十八話　私とサボとこれからについて（後書き）

応援ありがとうございます。
これからも頑張ります！！

オリキャラ

ユート（15）

ダダン達に拾われ育てられた山賊の少年。

茶色っぽい金髪にくすんだ緑色の目をしている。

顔は十人並み。

面倒見がよい。　歳が近いのでルフィ達の面倒をよく見てた。

十九話　私と父と海の上の話について（前書き）

泣けない自分の事を冷たいと思っている主人公と、不器用で自分の大切なもの以外には冷たい人間の父親の話。
似てない様で似ている親子。

更新頑張ります。

十九話　私と父と海の上の話について

SIDE：ロンドンディーネ

昔から、上手く泣けない人間だった。

それだけは、今も昔も変わりなく。

前の人生では両親は生まれたばかりの弟を残して亡くなり、私はその時から姉として泣けなくなった。

面倒を見てくれた祖父に迷惑や心配も掛けなくなかったから、泣くのを我慢するようになった。

それから、だと思ふ。泣けなくなったのは

こっちで私を産んで育ててくれた母さんが死んだときだって、時間がたってから、一人になってからしか泣けなかった。

ソレのせいで陰口をたたかれているのだって知っていた。

それでも、人の前で泣くことなんてできなかった。

サボが、死んだと聞いた時だって……！！

「父さん……」

ぼつりと呟いた。

「　　なんだ？」

「泣けないんです」

大事な弟だったんです。

守ってみせる。

幸せにしてみせると思ってたのに、死んじゃって、悲しいのに泣けないんです。

「私は、冷たい人間なんでしょうか？」

あー、やっちゃったな。

父さんはこんな子供がいきなりしてきた質問になんて答えられないだろうな。

父さんは、これを聞いてどう思うんだろう。

「・・・・・・・・」

沈黙だよ。

ありえないくらいの沈黙だよ。

黙って私を見つめてくるから覗きこまれそうで怖い。

「いきなりこんなこと言って、ごめんなさい」

「謝るな」

「へっ？」

思わずぼかんとした表情かおで父さんを見上げた。

「お前は、冷たい人間ではない」

しっかりと言いさられた。

「ロンディーネ。お前は優しい」

「だ、だって、弟が死んだのに涙も出ないのに？」

「冷たい人間なら、そもそもそんなことは言わん」

私と同じ金色の目が見据えてくる。

スツと抱きあげられた。片手抱きだ。

思わず身体を動かすけど父さんはただ私を見据えて

「お前はただ、」

「ただ？」

「不器用なだけだろう」

クシヤリと髪をなでられた。

初めて、かもしれない。

抱きあげられるのも（赤ん坊の時はノーカウントで）、

こんな近くで父さんがはつきりと笑うのを見るなんて（苦笑だけど）。

「なんで、お前は・・・」

父さんの声が今まで聞いたことない声で、

ソレを聞いた私は私は思わず父さんの上着を掴んだ。

とてもあつたかくて、とてもやさしい。

涙が零れ落ちそうになってしがみつくと、父さんの大きな手が背中を撫でる。

胸にぼっかりあいていたものが埋まるような気がして、少し楽になる。

この人にだったら、頼っていいんだ。

父さんは、守ってくれるんだ。

おかしいな、何故だろう。

このままでいいと思うのは、なんでなんだろう。

うれ、しい、だ、なんて。

S I D E : ミホーク

俺とマリアの娘は、俺には似ていないとその日までずっと思っていたことだった。

瞳の色と顔の無表情さ具合は俺に似ていたが、それ以外はマリアにそっくりだったから。

俺みたいなの、無感情冷徹男になんぞ似ていない方が良かったらう。

あの日、あんな所を見るまで娘が俺に似ているとは気付かなかった。

「父さん……」

その顔を見てぎよつとした。

俺が幼い頃の、辛いことや悲しいことがあった時の顔と全く同じだったから。

上手く感情を表に吐き出せない子供の顔。

それを取り繕ってつき通すには経験が足りず、

全てを忘れるほどに幼くも知恵が無いわけでもなかった。

中途半端な感情に振り回され絶望している子供のソレ。

「なんだ？」

「泣けないんです。

大事な弟だったんです。守ってみ

せる。幸せにしてみせると思ってたのに、死んじゃって、悲しいのに泣けないんです。」

そこまで、ずばずばと言いきってから俺に尋ねた。

ねえ、父さん。

「私は、冷たい人間なんでしょうか？」

暗い光を瞳に宿して膝を抱えているのは、俺の娘。

昔の自分が悩んだのと同じようにつらそうな顔をしている。

嘘をつき通すほど、強くはなく。

誰かにすがりついて救いを求めるほど、弱くはなかった。

「.....」

ああ、嫌なほど似ている。

自身の過去の姿に、守れなかった後悔とその痛みを胸中に満たしている様が、そっくりだ。

マリアにそっくりだと思っていたが間違いらしい、しっかりと俺に似た所も持っていた。

過去の自分の姿を、姿見で見せられているようだった。

「いきなりこんなこと言って、ごめんなさい」

「謝るな」

「へっ？」

ロンディーネが目を見開いてこちらを見上げてくるが言葉は止まらなかった。

「お前は、冷たい人間ではない」

俺とは違って、泣けないことに悩んでいるんだから。

俺は、それについて考えたことはあったが悩まなかった。だから、俺とは似ていても同じではない。

「ロンディーネ。お前は優しい」

「だ、だって、弟が死んだのに涙も出ないの？」

「冷たい人間ならそもそもそんなことは言わん」

俺は自分が冷たい人間だと分かっている。

自分の大切なものが無事であるなら他のものなぞどうでもいい。そんな人間だ。

ロンディーネを抱き上げた。
軽い。

こいつはきちんと食べているのだろうか？

「お前はただ、」

「ただ？」

「不器用なだけだろう」

そう、この娘は優しい。

ただ、不器用なだけだ。

抱き上げたまま娘の柔らかい黒髪を撫ぜた。

「なんで、お前は・・・」

思わず声が零れて落ちた。

顔を見られない様に顔を埋めながら娘は抱きついて来た。

安心させるように背中を恐る恐る、抱きしめた。

この娘は俺が守ろう。

傷つきやすい優しい子供。

不器用で無愛想な昔の自分と優しいマリアに似て放つとけない、自分の娘を守ろうと誓った。

十九話〱私と父と海の上の話について〱（後書き）

文章が下手ですが、これからも頑張ります。
ミホークさん視点は難しいです。

二十話〜私とローと故郷での話について〜（前書き）

久しぶりの再会な二人。

お互いに会いたがってたけど、ロンドンディーネが地雷を踏んだようです。

二十話　私とローと故郷での話について

SIDE：ロンドンディーネ

パチパチと暖炉の火が燃えている。

クリーム色の壁紙が炎の光に照らされ淡い橙色に見えている。久しぶりに見る故郷の景色は昔とまったく寸分変わらずに雪に覆われていて、昨日私が綺麗に磨いた窓硝子は外と中の温度差によって温かみのある白色に曇っている。外に見える建物の屋根も、柔らかく光るガス灯も、そして人が通る道も何もかも真っ白に埋め尽くしてしまっている雪は、静かに降り積もっていく。音もなく降ってくるその白い雪は、まだまだ飽きたらぬとばかりに、屋根や道の層を分厚くしている。

この世界に生まれてから、慣れっこになった光景だ。

父親と三年以上ぶりに故郷の地を踏み、実家に帰ってきたところだ。なんでもひと月ほど腰を落ち着けてそれから海軍本部に向かうらしい。

先生達が家の掃除や整備の手続きをしておいてくれたらしく家の中はとても綺麗なままだった。ローに壊された私の部屋の窓も随分昔に直してもらったし、食料やりネンのシーツを取り換えるくらいで済みそうだと溜息をついた。

それが昨日。食料を買って、シーツや毛布も取り換えて、さあどうしようと思ってたのに、父さんはこの島の周辺の子供を沈めてくるというて出ていった。

何日かは帰ってこないだろう。

じゃあ、コレどうしようと思て頭を抱えざるをおえなかつた。

父さんと食べたいと思て昨日こつそり煮込んでおいて頑張つて作つたホワイトシチュー。

母さんに教えてもらつて自分が一番得意な料理でもあつて、それだから食べてもらいたいと思つたのに……。帰つてこないつて電伝虫に連絡があつた。

内緒にしてた私が悪いんだけど、キツイな。

「二日間はシチュー漬け決定だな、」

父さんが帰つてこないかと何度ドアや連絡の来ない電伝虫を見たか分からない。

取り合えず、今日は一人決定の様だ。

ハアと溜息をつく。

なんというか、この心情を一言で表わすとむなしいといしか言いようの無いような気がする。

「バカだな、・・・私」

あの気まぐれで暇つぶしに海賊団を壊滅させてしまつような父親に、何も言わないのがいけなかつたのだと思つ。

たぶん、私がなにか言つていれば、優先させてくれたと思つ。

父さんは、分かりにくいけど、家族は大切にする人だから・

母さんが生きている時には帰つて来てくれなかつたけど・・・

シチューは湯気を立てているけど、
父さんは帰って来なくて、もうどうしようもないだろう。

それでも、食べる気にはならなくてポーツとしてたら。
ドアノブの音がして思わずドアの前まで駆け寄った。

「っ、父さん？」

開けて見えたのは父さんではなくて帽子やコートまで雪まみれにな
ったローの姿だった。

「……よお」

「ロー……、久しぶり」

S I D E : ロ ー

目の前にいるのは、あの爺に連れ去られた時よりも大きくなった幼^デ
なじみの姿^{イーネ}。

記憶よりも伸びた青みを帯びた黒い髪を硝子の飾りがついた白い髪
結紐で結んでいる。

綺麗になったと思う。

前から可愛かったけどな……

中に入れてもらうと、ディーネの片足に真新しい包帯が巻いてある
のが見えた。

傷を圧迫しない様に片足がスリッパでもう片方が靴というアンバランスな格好。

ザアと何かが下がる音がした。声色が低くなるのが分かる。顔から表情が失せていくのが分かった。

あ、とディーネの口元が動くのが見えた。

「・・・バカが、」

思わず吐き捨てた。

自分でも驚くくらいの冷たい声だった。

俺でも驚いたんだから、ディーネには凄まじく冷たく聞こえただろう。

手首を掴む。

相変わらず恐ろしいくらい細い。

そして、そのままディーネをソファに座らせた。

その後、後ろ手に鍵をかける。

そして言った。

「さて、どうしてこんな怪我したのか言っただけか？」

目の前にいる幼なじみがひきつったような少し怯えているような表情をしているのが見えた。

俺はディーネのそんな表情はあまり好きではないんだけど、しょうがねえよな？

自分の宝物みたいな大切に、好きな存在が怪我してたら（しかも普

通なら怪我しない個所に俺だって怒るんだよ。

何時もみたいにはぐらかせると思うなよ。

そう、眩くと顔を真っ青にしたディーネが見えた。

とりあえず、お前が俺を怒らせるようなことをしたってことは分か
ったぞ。

二十話〜私とローと故郷での話について〜（後書き）

鷹の目は自分が帰ってきたことで騒ぐ、北の海の中で強いとされる海賊団を何個か潰しに行きました。見せしめに倒しておけば歯向かってくる奴が少なくなるのを知っているから容赦なく。二、三日で自分の首を取りに来る奴をたたきつぶし、自分の強さをすりこんでおくのが目的。

これも、地元と我が子を守るためです。

いつも、ありがとうございます。

これからも頑張ります!!

二十一話　私とローと北の海のとある島について　（前書き）

このトラファルガーさん家の息子さんとジエラキュールさん家の娘さんの仲は基本こんな感じですよ。

自分たちの行動に疑問を持たない子供・・・

二十一話　私とローと北の海のとある島について

SIDE：ロンディーネ

きつと、蛇に睨まれた蛙ってこんな気持ちなんだろう。

空気が冷気以外の何かで張りつめていくのが分かる。

久しぶりにあった幼なじみ兼親友が無表情の仮面の下、
烈火の如く怒り狂っているのを見て、頭を過ぎるのは思考と言う名の
現実逃避。

人間本気でテンパると疑問詞しか浮かばないんだなっということがよく
わかった。

・・・正直わかりたくなかったけど

「お・ま・え・は・バ・カ・か」

私の話を静かに聞いた後、淡々と一音一音区切りながら言葉を投げ
かけてくる。

視線と言葉で人が刺せるなら私はもう刺されまくりだろう。
それにだんだん耐えきれなくなっって俯く直前に

ローがハアと溜息をついたのが見えた。

ギシリとソファのスプリングが軋む、気づいたらローが横に来ていて

「ディーネ」

名前を呼ばれて顔をあげたら、思い切り頬を引っ張られた。

「っ?!!!(え、何すんのキミ!!!)」

「おー、よく伸びる」

ぐいぐいと引つ張られる、キミやっぱり怒ってたのね……
無表情じゃなくなったローの顔を思わず見た。

「りよ、っー?!?!い、ひゃい!!!(ロー!?!痛い!!!)」

「うるせえ」

「~~~~!!!(理不尽!!!)」

そのまま、ローの気がすむまで散々弄られた。

「嫁に行けない……」

人を散々弄り倒して、なんかツヤツヤしてるローを思わずジトリと
見つめた。

ほっぺた痛いし……

最終的に攻防戦になってマウント取られてソファに押し倒されたし。

「ああ?なんだ、そんなこと悩んでたのか?」

フフフとローは笑って。

「俺ん所に嫁に来いよ」

「っ?!?!?」

思わずポカンとしてローの顔を穴が開くほど見つめた。

(ちよ、待て、こいつ今なんて言った!?)

「お、これ、ディーネのシチューじゃねえか。もらっていいか?」

それにこくと頷いた事しか覚えていない。

どうやら、その後私はローと一緒にシチューを食べて片付けたらしい。

そこらへんでようやく我に返る。

「相変わらず、ディーネのシチューは上手いな」

「・・・そう?」

そんな会話をしていたら、ローが帰る時間が迫ってきた。

コートかけに掛けてあったコートを投げ渡す。

白い毛皮を思わせるような帽子もだ。

父さんがいないことで感じていた寂しさはいつの間にかどこかに飛んで行っていた。

ドアノブに彼が手をかける。

出ていく前に振り向いた。

その顔は私がよく知っているローの優しい表情で、

「あれは嘘じゃないからな。考えとけよ」

私を混乱の極みに叩き落としてくれた。

なんでさ……

SIDE：ロー

俺の言葉に俯いて唇をかみしめるディーネの姿を見た。
前から直せと言ったその癖は未だに直っていないらしい……

その幼なじみの姿を見て、どこか安心した自分がいた。

見なれたドアを開けた先にいたのは俺の記憶よりも大人びた幼なじみの姿で、

伸びた身長もそうだが、同じように伸びた髪や、

記憶に残っている顔から幼さが抜けてもっと綺麗になった顔立ちとかのせいで、

ロンディーネ、否、ディーネが知らない人間のように見えた。

北の海の気温に適した黒い系統にまとめられた厚い生地の特ナルネックのセーターに温かそうなパンツという当たり前の格好を幼なじみがしているのを見てもずっと微妙な違和感があった。

だが、ディーネの昔からの癖を見た時にその違和感は氷のように溶けて消えた。

「ディーネ」

照れ隠しにディーネの頬を伸ばしてみた。

「っ？！」

「おー、よく伸びる」

ぐいぐいと引っ張ってみる。

真っ白い肌は、触り心地がよく、血の通った温かいものだった。

それにしてもよく伸びる。

「りよ、っー!?!い、ひゃい!?!」

「うるせえ」

「~~~~~!?!」

たぶん、理不尽だとかいろいろ言ってるんだろが無視。

最初に見た時のこわばった表情も溶けてるし、言うこと無しだな。

他人はこいつの事を人形の方が人間らしいと抜かすが、それは大間
違いだ。

だって、俺相手にはこんなにも様々な表情を見せてくれる。

笑顔だって太陽みたいに明るく綺麗に笑うんだ。

それを知っているのは俺だけでいい。

そう、心が疼く。

散々いじくった後に解放したら、じと目で見られた後にぽつりとこぼされた。

「嫁に行けない・・・」

若干、涙がにじんだままで言われてもな。

むしろ、ゾクリとするというか。

喉が鳴りそうになるのを防いで言った。

「ああ？なんだ、そんなこと悩んでたのか？」

フフフと内心を隠すために笑って。

「俺ん所に嫁に来いよ」

「っ！！？」

見開かれたディーネの澄んだ瞳に見つめられて、何拍かたった。

俺の言葉を飲み込んだのか顔が瞬時にリンゴみたいに真っ赤に染まっ
つて、

ああ、だの、うう、だの言葉にならない声を発した。

冷たく見える顔立ちなのにその実、こんな一面があるのだからもの
凄く可愛い。

「お、これ、ディーネのシチューじゃねえか。もらっていいか？」

赤い顔のままのディーネに問う。

このままでは俺の顔も赤くなりそうだったから。

ディーネは油がきれ、錆ついた歯車の様にゆっくりと頷いた。

それから覚えてしているのは徐々に食べたディーネのシチューの味と、
はっとさせられるほど美しい月色の瞳だった。

それから、最後に言葉を投げかけた時のディーネの顔は可愛かった。

リンゴみたいに真っ赤になって、動揺しきった表情^{かお}。

ちよつと困つたような嬉しさと動揺に染まつたあの表情は文句なしに可愛らしい。

「フフフ」

思わず笑いが声に出た。

俺の幼なじみはこんなにも可愛いんだと叫びたい気分だ。

此処は北の海の雪の島。

雪や氷に包まれた白銀の街。

オーロラ、戦乙女ヴァルキューレにヴァイキング、北欧伝説と称される伝説が息づく神秘の宝庫。

ソレに似つかわしくないだみ声が路地に満ちた。

そつと話を盗み聞くと、どうやらディーネを人質に“鷹の目”の首を取ろうと思っっているらしい。

バカじゃねえのか、と思う。

今まで何故、“鷹の目”の家族であるディーネ達親子が無事にこの島で過ごせたのかも知らないのか。

それは“鷹の目”がこの島の住人に深い信頼を置いていたからだとか何故理解できないのかが俺には理解できないね。

そう、嗤って傍に立て掛けてあつた角材を手に取った。

ウザい火の粉は根から潰しておくにこしたことは、ナイ。

「なあ、そのオニーさん。俺と遊んじゃくれないか？」

俺が、一方的にアソブだけだけだな。

そうやって、俺は嗤った。

S I D E : ミホーク

サクリ、と新雪を踏む。

相変わらず此処は変わらない。

雪と氷と古い伝説渦巻く雪の島。

この故郷に、マリアとロンディーネを住ませたのは他でもない。

北の海の民間人が住むなかの島で一番安全な場所だと知っているからだ。

此処の住人は強い。雪の街は連帯感もある。

俺の代で豊んでしまったが剣術の道場や、

未だに存在する武術の道場が数多く点在する武術の島なのだ。

へ々な海賊よりも強い住人が住む島。

だから、俺はこの故郷にマリア達を住ませたのだ。

北の海の人間は島自体での連帯感に優れ、それを害する人間は許さない。

この子供の様に、

「・・・ああ？」

何見てんだよ、と子供は笑う。

トラファルガーによく似ている子供。

「いや……、ソレをどうするんだ？」

「どつて？　　海賊だろ、コレ？」

海兵に差し出すなりどうにでもするよ。

と子供は答えた。その受け答えの仕方トラファルガーに似ている。

「だいたい、あんた死ての人間だろ？違うか、“鷹の目”さん？」

こいつは、絶対トラファルガーの倅だ。断言できる。絶対に……

それが、腐れ縁で幼なじみのトラファルガーの倅との出会いだった。

二十一話　私とローと北の海のとある島について（後書き）

七武海の子供だったら知らないうちにこんなことに巻き込まれてい
ると思つた。人質に出来るし、殺せば（情が薄い人間じゃなければ）
確実におびき出せるし、自分の故郷に妻と娘を住ませたのには意味
があつたんだよって話。

後、雪国の人は他人には排他的だけど、地元の間人には甘いイメー
ジがあります。北の海の人と一緒に苦労してる分、他の地域の人間
よりも団結力があるってことで・・・（捏造だよ。多少根拠はある
けど・・・）

後、トラファルガーさんのお父さんとジェラキールさんのお父さ
んは、腐れ縁で結ばれている幼なじみです。

応援ありがとうございます。これからも頑張ります！

二十二話　私と父と父の同僚について（前書き）

女の子成分がディーネと母親しか出てきていなかったたので出してみ
た。

二十二話　私と父と父の同僚について

SIDE：ロンディーネ

父さんとトラファルガー先生は幼なじみなんだって、
父さんとローの家に行った時に教えられた。

なんだろう、この地味に驚く事実。

トラファルガー先生曰く、幼なじみで笑顔で殴りあえる仲。先生が
そう言った時は父さんは、腐れ縁だとか言わなかったけど、あ
いづが剣の道を選んでいたら最大の壁だったかも知れんと、教えてく
れた。

父さんと先生が会った瞬間に凄まじい勢いで口での攻防戦になっ
たのには驚いた。

ローも少しありえないものを見たようにギョツとしていたし・・・
二人の攻防戦が激化する中で、一緒に呆然と見ている事しかできな
かったし・・・

聞くと、

「僕とこの馬鹿は今まで挨拶代わりに何千回と闘って来たんだ。さ
っきのもこんにちはと云う意味なのさ」

と笑顔で答えられた。

流石はローの父親と言つべきなのだろうか、笑顔の種類がローと一

緒だった。

父さんは苦々しい顔をしていたけど、その言葉を否定しなかった。思わず、ローと二人でひきつった笑いを浮かべてしまったのはしょうがないことだと思う。

そんな事があつたのはひと月前。

今、私は碌な思い出がない場所に来ている。

そう、父さんが七武海の会議に参加するからだ。

正直に言おう。

私は七武海が嫌いだ。

正確に言つと、あの桃鳥野郎が大嫌いなのである。

いつそ、どこかで野たれ死ねと星に願うくらいには嫌いである。だからそんな奴がいる七武海は嫌いだ。

それなのに、父さんに連れて来られるなんて・・・膝をついてしまいたくなる。

こんな目の前に泣いてる女の子がいたら出来ないけどさ・・・上質な黒い生地ワンピース。レースとフリルで飾り立てられたソレを着た。

桜色の頭を俯かせて泣く女の子。

「・・・大丈夫？」

気がついたら、思わず尋ねていた。

めんどくさいことにしかならないの分かってるのに声をかけたのは、自分の前で子供が泣いているのが嫌だったから。

それ、だけだ。

断じて、可哀そうだと思ったわけじゃあない。

SIDE：ペローナ

モリア様に、連れてきてもらった場所で私は泣いていた。

ぬいぐるみのくましーをベンチに引っ掛けて破いてしまっただけで泣いていた。

何度見てもくましーの腕と体は離れたままで、中からは綿が飛び出しているのは変わらない。

「っ、ひっく、」

ごしごしと目をぬぐおうとした時に声が、声が掛けられた。

「・・・大丈夫？」

大人とは違った高い声。

少し、戸惑い気に声をかけられた。

うるさい！！と叫ぼうとして、顔をあげたら、眩い金色に目を奪われた。

きれいだ。

黄金を磨き上げたような切れ長の目を縁取る長いまつげは髪と同じ、青みを帯びた黒。背中の中ごろに届くほど長い鮮やかな髪は、編ま

れてもまとめられてもいなく、ただ背中にとらされていた。ただ、欠点をあげるとするならば、その整った顔に表情が少ないことだろうか……

「大丈夫？」

私が返事をしなかったのを聞きとれていなかったかと思ったのかももう一度尋ねてきた。その声は優しさが含まれていて、収まりかけてた涙腺が刺激されたのかポロリと大粒の涙が零れ落ちた。

「っ!!??」

その人は自分が泣かせたわけじゃないのに、私が酷く泣き始めたのを見て、動揺したのかギョツと目を見開いている。

手にズイっと白いハンカチを押しつけられた。

涙をぬぐえという意味なのか。

その人を見上げたら、表情には表れていなかったけどどこか困ったような雰囲気か漂っていたから、あえて何も言わずに受け取った。

「……ありがとう」

小さい声で言うと、ポンと頭を撫でられた。

「気にするな」

頭につけられた手はモリア様のように優しくかったけど、硬くなくて、柔らかかった。

「何故、泣いていた？」

膝を折って私の目線にまで身体を下げてくれた。表情には表れていないけど声には気遣いだとか、優しさがあふれていて、また泣きそうになった。

「、っ」

「、話しづらいことなら黙ってても・・・」

その人は困ったように髪をかきあげた。

「だいじょぶ。言える」

ひっく、っと嗚咽に遮られながらもそう言つと、その人は髪をかきあげるのをやめた。

「っわた、しが、モリア様にもらったくましーを壊しちゃって・・・」

私の拙い説明を何も言わずに聞いてくれた。聞き終わって、ゆっくりと

「そっか。少し見せてごらん」

くましーを見せると、

「ああ、大丈夫。これくらいなら直せるよ」

そう言つて、だから安心なさいつて僅かに口角をあげた。

裁縫は女の子の嗜みさ、とか何とか言いながら
懐から小さな箱を取り出し軽く縫い直してくれた。

「はい。もう、引つ掛けない様にね」

綺麗に直したくましーを渡して、踵を返そうとしたその人のシャツ
の裾を思わず掴んだ。

「え？あの、何？」

困つたような雰囲気で問いかけられた。

「名前……」

「え、」

「名前、聞いてない」

そう言つと、その人は口を開いた。

SIDE：モリア

今日は、ペローナを連れてきた。

スリラーバーグもいい所だが、ペローナはまだガキだ。
他の世界も見せてやりたかつたつてーのもある。

会議が終わつたらキューカ島にでもよつて、服やらなんやらを買つ

て帰る予定だ。

ペローナを待たせてある中庭まで行くと、そこにはペローナともう一人いた。

女　それも12、3歳かそこらの幼さが残る少女だった。

女としてはまるで未完成な年頃だったが、

それでもすでに恐ろしいまでの美貌の片鱗を垣間見せている。

ビスクドールの様に整った顔立ちのペローナと比べてもまるで遜色ない。

泣いていたペローナに話しかけ、頭を撫でた。

自然に膝を折って視線を合わせていることから、

ペローナぐらいの歳の子供の面倒を見るのにも慣れているのだろう。

「おい」

声をかけようと動くうとしたら、そこには“鷹の目”がいた。

「　　一体何を、」

その二人を視界におさめたのが、“鷹の目”と称される瞳を冷たく光らせ、

「モリア。貴様、ロリコンか・・・」

凄まじい暴言を吐いてきやがった。

「ちげーよ！！何ぬかしやがる！！」

俺の社会的地位を滅ぼすつもりか“鷹の目”！！

「そうか。あれは、あの顔立ちのせいです。そういった輩に目をつけられやすいからな」

あのフラミンゴ野郎とかな・・・と呟いている。

「あー、ペローナもだ」

分かる分かると何故かそこで、俺は部下、あいつは娘についての話になった。

俺達の間的一致した意見は「あのフラミンゴには近づけるな」ということだった。

「モリア様！！」

ペローナに手を引かれて、“鷹の目”の娘が連れて来られるまで・・・

二十二話　私と父と父の同僚について（後書き）

この人たちの話し方がよく分からないのでちょっと不安。

ペローナはモリアに部下として扱われていると思ってるけど、モリアには女の子だから娘扱いをされてそう。多分ペローナはこの時点で能力者。この小説ではモリアに拾われた事になっています。

過保護な保護者組。この二人。普通に仲良くなりそうな勢いです。娘二人は普通に仲良いです。というよりもペローナが慕っている感じ。

番外編〈小ネタ集 part 1〉（前書き）

オリジナルで捏造な過去のお話とか多いです。

番外編く小ネタ集 part 1

1. 私と父さんと修行の日常風景（体術編）

ほお、なかなかだ。

俺の足元でへばっているロンディーネを見降ろしながら内心感心した。

技自体の速さもキレもある。力もその歳にしては上等だ。

「っ、」

だらんと力の抜けた状況で荒い呼吸を繰り返す娘。

体中あざだらけだが、何度も立ちあがってくる根性を見せた。

全身を使い蹴りを拳を繰り出してくる姿はその年齢にしたら驚嘆としか言いようがない。

しかし、ロンディーネは接近戦を重視する戦法をとる為に、肘撃（肘打ち）や靠撃（肩や背面部で敵を打ち付ける攻撃）など、近接での体当たりを重視する。

昔のトラファルガーを髣髴する体技なのだが・・・

そう思い聞くと、

「え、えっと、習わざるを得なかったというか、半分意地というか・・・」

と遠い目をしながらぼやかれた。

お前、一体故郷で何があったんだ。

しかし、だいたい想像がつく自分が嫌だが・・・

お互いに顔を見合わせて溜息をついた。

2・私とペローナとゴスロリと

あれ？なんで私、こんな絶体絶命なわけ？

なんかした？

いや、なんにもしていないよね？

じゃあ、なんでペローナが迫ってくるんでしょう、マジで誰か説明
プリーズ！！

「ロディ姉さま」

ニッコリ笑うペローナは可愛い。桜色ピンクの髪も淡い葡萄酒ヴァイオレットの瞳も、わざわざペローナの為に誂あつひえたかのように、木漏れ日の光を浴びて煌めいている。
服装だって、黒に薄紫のレースがついたワンピースに黒いタイツに先っぽが銀色のブーツを合わせた格好で、誰が見たって可愛い女の子だ。

その手に持っているものがなければ・・・

「ペローナ」

「なんですか？」

小首をかしげる動作も可愛いんだが、これだけは聞かないと

「ソレは、何？」

若干震える指でソレを指した。

「ドレスですけど？」

「じゃあ、なんでそれを持って迫ってくるんだ？」

「やだなあ、姉さまに着てもらおうですよ」

引き笑いが零れ落ちそうになった。

無理だ。確かに、ゴスロリのデザインやなんかは可愛い。それは事実だ。

しかし、精神年齢が高いからってのもある。

しかし、もっと大きい理由はペローナが可愛いから似合うのであって私にそんなフリルやレースは似合わないだろう！！

着れるか！！

言葉を吐きだしそうになったがなんとか堪える。

そして、助けを求めようと、首を向けた。

父さんにはさりげなく避けられた。モリアさんは笑っている。

これが四面楚歌か・・・

そして、私はペローナの笑顔に屈した。

(もうマジ勘弁してくれ)

(キヤア、やっぱり似合いますね！！次は、これを着てください！！)

3・熊とローと私

私は、思わずローが腕に抱いているものを凝視した。

キミの家って人専門だったよね？

「ロー、ソレ・・・」

思わずひきつった声を出してしまってもしょうがないと思う。

「死にかけの所を、」

拾った。こともなげに言いきられた。

「どう、するの(白クマ、って何食べるんだっけ？そもそも、人が育てていいものなのだろうか?)」

「取り合えず、抱いとけ」

ぽんつと手渡せられる。

わぁ、可愛くてふわふわでもこもこだね。

ってそうじゃないから!!

「え、」

この時の私はポカンとしていたんだろう。

ローはフフフと笑いながら、ちょっとあったかいミルクを持ってくるから、名前とか考えといてくれ。

ディーネはそういう動物好きだろうし、俺よりもネーミングセンスは良いだろう。

そう、かるーく告げられ、私は絶句し、立ち尽くした。

私にどうしろというのさキミ……

(結局名前はクヌートになりました。子供ができたら、ローが命名するそうです)

(ディーネ?誰に話しかけてんだ?)

番外編く小ネタ集 part 1 (後書き)

ロンディーネの使っている体術(というよりも八極拳とかクンフーに近い)はトラファルガー家の人間に習ったもの、ベポが使ってるのはローが教えてたらしい。

ロンディーネはゴスロリ自体、綺麗だし手が込んでるなあとは思いますが、着るほど好きではない。というよりもスカートをあまりはかない。

クヌートはベポのお父さんの名前。

これからも更新頑張ります!!

二十三話上 人と父の覇氣修行について (前書き)

なんか、どんどん短くなっているような気がします。
取り合えず、頑張りました。

二十三話上「私と父の覇気修行について」

SIDE：ロンディーネ

あれから、時は流れた。

髪も伸びたし、顔つきだって大人びた。

手足も伸びたし、背丈もぐんぐん伸びているから、体術だって威力が上がる。

三年前とは大違いだ。

父さんと一緒にグランドライン偉大なる航路前半の海。
パラダイス通称“楽園”を旅したり。

修行して、戦って、戦って、怪我して、治して、戦って、船沈めて、賞金首を討ちとって、修行して、拿捕した船の何割かを政府に送る為に手続きして、父さんが褒めてくれて、どこか連れて行ってもらうって、そんな感じで過ごした。

お前、戦ってばっかじゃねえかとは言わないで欲しい。

父さんと暮らしていたらこんな生活が当たり前だ。

後半の海“新世界”にはいくら聞いても連れて行ってくれなかった（父さんが“新世界”に行く場合は、故郷かコルボ山、場合によってはモリアさんの根城スリラーバーグに預けられた。何故、お祖父ちゃんの所は駄目なのかと聞いたら凄まじい目で見つめられたのでその日から聞いたことはない）。

「ロンディーネ」

「はい」

おごそかに尋ねられた。

「お前は、先日15になった」

「はい」

そう、私は先日に15の誕生日を迎えたのだ。

顔立ちは中性的なままだが、もう身体は第二次成長期を迎え女性特有の曲線美ができてきたので、もう男の子に間違えられることもない。

身長も伸びたのだ。

父さんが高いから、前よりも伸びると思う。それを思うと胸がわくわくとする。

おっと、それよりも父さんの話だ。

「お前の腕もあがった。もはや、偉大なる航路、グランドライン前半の海ではほとんど敵もないだろう」

「、っ（え、凄い褒めてくれるんだけど!?!）。ありがとっ! びいませます」

頬が緩むのが分かる。

どうしよう、凄く嬉しい。

「そこで、だ。お前をとある島に連れていき、覇気を習得させる」

「覇気？えーっと、剣術で言う所の剣気、闘気、気組みみたいなものか？」

「　　覇気、ですか？」

「覇気だ」

詳しい説明は船に乗りながら、話す。
行くぞ。

ぽかんとしている私を尻目に、
父さんはコートの裾を翻して、港の方に歩いていった。

S I D E : ミホーク

よく、此処まで成長したのだと思う。

最初のうちは子育てに参加せず、9つの時にはほぼ初めて会ったといつてもいいくらいの父親に嫌な顔もせず、此処まで成長してくれたのは嬉しい。

男手一つで育てたために、少し口調が乱れる時はあるが、きちんと育った。

似た青みを帯びた黒い長い髪に、雪か、磁器のように白い肌。

マリアに似た中性的な顔立ちからは幼さが消え、大人びた美しい顔立ちになっている。

唯一、マリアと違うのは、その目だ。

切れ長で意思の強さを思わせるような炎を宿したような、黄金の瞳。

俺と同じ色だ。

娘はこれから多分、凄まじい程の苦勞を背負っていくことだろう。

俺の一人娘であると同時に、海軍の英雄の孫。
これで、苦労しないというほうがどうかしている。

ならば、せめて自分が知っているものを、一つでも多く伝えたい。
そう、思っのが親心ではないだろうか？

そう思い声をかける。
すると、珍しいことに綺麗に微笑んだ。

うれしそうに。

昔のマリアに重なって、こそばゆい心持になる。
見ていられなくなって思わず視線を外す。

妻マリアに娘ロンディーネを重ねるような愚行はしない。
しかしそれでも、その頬笑みは、記憶にある最愛の人の姿に重なる。

ああ、そっくりだ。

時折、記憶とそっくりに重なる娘の姿を見ると、胸が押さえつけられるように痛む。

それを気のせいだと思っことにして、俺は踵を返した。
船に向かって、ゆっくりと歩き始めた。

ロンディーネが、少し慌てたようについてくるのが分かる。
こっという癖は昔から変わっていない。

ふっと口角が上がるのが分かる。
そうして、俺は歩き出した。

二十三話上々私と父の覇気修行について（後書き）

覇気の修行内様は次の話に書きます。

鷹の目親子はクライガナ島シツケアール王国に向かっていきます。

二十三話下 〓私と父の覇気修行について〓 (前書き)

実は似たモノ同士の親子。

二十三話下〜私と父の覇気修行について〜

SIDE：ロンディーネ

これは、死ねる。

青天の空を視界におさめながら、ふと、そう思った。

いつそ、憎たらしいくらいに青く澄んだ空。

風すらもすがすがしく爽やかだ。

泥まみれになりながら地面に転がり、
荒い呼吸をこなしている私とは大違い。

この島では珍しい日光でさえ嫌いになりそうな勢いだっただ。

身体は重い傷こそないけれど浅い傷があちこちに奔り、服はズタボ
口。

洒落にならない。

と言うよりも、父さんが容赦がない。

剣に関しては妥協しない人だから、容赦があつた方が嫌だけど。

それにこれだけ仕込まれているってことは見込みがあると思われる
いる。

そう、世界一の大剣豪に思われて嬉しくない奴はいないだろう。

私は父さんの前を見据えるあの強い眼差しに憧れて、何時か越えて
みせると誓ったのだ。

それだから、耐えて、頑張つて、もがいている。

守りたいものがあるから。
父さんに憧れたのは守りたいものを守り通せるようになりたかったから。

小さい、弱いままじゃ守れないものがあると知ったから。
それならば、強くなれるように力を求めた。

大切なものが零れ落ちない様に、壊れない様に、守れるように、
無様でも構わないからもがき続けようと決めたのだ。

それで、ぼろぼろになっても自分の行動に悔いはない。

自分で選んだんだ、後悔なんてしない。

グツと身体に力を入れて起き上がる。
傍らに落ちていた刀を拾う。

そして、父さんと向かい合う。

「
行きます」

集中、集中、今の私の身体はただの剣の付属品。
剣と一体になり一太刀喰らわせてくれる。
神経をギリギリまで研ぎ澄ます。

そして、父さんの懐に飛び込んでいった。

S I D E : ミホーク

よく持つものだ。

自分の娘ながら、愚直と言ってもいい程に真っ直ぐに喰らいついて来る。

泥と血にまみれてもじつと前を見据える強い眼差し。

何度倒れても自分の力で絶対におきあがる不屈と言ってもいいくらいの精神。こころ

何度叩き伏せられても、何度怪我を負っても諦めない。

否、理解をしながらも、重症では無い限り、自分が全力で有利に戦える限り向かってくる。

そして、自分が全力で有利に戦えないのが分かると離脱にかかる。

戦闘能力は、誰に似たのか抜群だ。センス

速さもある。

ある程度の力もある。

そして何より思い切りの良さと、判断力、勘がある。

覇気も触りを教えてやれば、大雑把だがひと月足らずで使えるようになった。

今ではソレの洗練と強化の為に戦っている。

見聞色の覇気が一番得意で、霸王色の覇気が一番下手。とは言うても普通なら使えない霸王色の覇気が使えただけで潜在能力は凄まじいものがあるつ。

その年齢も考えたら“鬼才”、“天才”、“剣の申し子”と言ってもいいぐらいの馬鹿げた才能を持つ俺の娘。

生き急いでいるのか。

ひたすらに剣の技や覇気を学び、ただ真っ直ぐに高みを目指すその姿勢は見てはつとさせられるほどの潔い綺麗な何かがある。

それを見て思うのは、潔白の綺麗さ。
しかし、それと同時に見えるのは危うい精神。

昔、俺に本格的に剣の教えを請うた時に私は大切なものを守れるように強くなりたいんです。

静かに、僅かに顔を陰らせながらポツリと零したソレ。

ロンディーネは、気付かれにくい精神が強い。

だが、同時に酷く弱い。

両極端な振り幅の心を持っている。

ロンディーネは、自分が守りたいもののためなら、
何にも屈さず不屈とでもいうべきのココロで戦えるだろう。

しかし、自分の大切なものが奪われたらたやすく崩れてしまうだろう。

それこそ、硝子ガラスのように。

綺麗で、真っ直ぐで、強いくせに、脆くて、弱い、自分の娘。
いや、真っ直ぐだからこそ弱いのか、まあそれはどうでもいい。

これが、守りたい大切なものにどうやら自分も入っているらしいのだ。

酒を誤って飲んだ時に真っ赤な顔でばやいていた。

何時もなら、素直に話せないであろう本音の感情。

それを聞いた時に俺はこいつが独り立ちするまで見守ろうと思えたのだ。

父親としてでもあり、母親としてマリアができなかったことである。
だから、自分がと決めていた義務ではなく。

自分の意思で見守ろうと決めた。

それが、きっかけ。

「生き急ぐな……」

そう、真っ直ぐで強く、脆くて弱い娘に声をかけた。

返事はない。

当たり前だ。

気を失って、寝ているのだから。

意識がない時にしかこんな事伝えられないのだから、世界一の大剣豪。

そう呼ばれる俺も一人の父親でしかない、ということか。

そう、思った。

二十三話下〜私と父の覇気修行について〜（後書き）

鷹の眼さんも世界一の大剣豪と呼ばれていても娘の前じゃ一人の父親でしかないと思う。あと、ライバルだったシヤンクスが霸王色の覇気を持っているのならミホークも霸王色の覇気を持っているのでは？ってことでこの小説の中のミホークは霸王色の覇気持ちです。

ロンディーネは避けないと死ぬる。と思ったから見聞色が一番早く覚えたために一番最後に覚えた霸王色の覇気よりも洗練されていて強力です。

鍛え続けている時間の問題です。

二十四話「私とキクと野良猫の話について」（前書き）

覇気をほぼ二年がかりで鍛えて、賞金稼ぎとして父親から自立した頃の話。

映画オリジナルキャラのシュライヤが出てきています。

子供の頃より人間味が意外と出てきたロンディーネと結構ツンツンのシュライヤの話。シュライヤの年齢がよく分からなかったので19歳（デットエンド時）に設定してあります。

これからも応援お願いします。

二十四話　私とキクと野良猫の話について

SIDE：シユライヤ

こほりと血が零れた。

口の中が切れたのか内臓とかがダメージを受けたのかどちらなのだろうか？

他愛もない疑問が頭をよぎる。

些細なことで今は関係のないことで、俺は現実逃避をどうやらしているらしい。

ぼろぼろになって放り出された四肢はほとんど感覚がしない。

いくつか曲がっている様に見えるが痛みすら感じない。

感じるのは、痛みでも、熱さでも、辛さでもなく。

ただ

「寒い・・・」

寒い、寒い、寒い。

昔はこんな夜中に路地裏に倒れこんだりなんてしていなかった。

船大工の父親と母親と妹のアデルがいて、寒い日は家族一緒にいた。母さんが毛布をかけてくれて、父さんが文句を言いながらベットまで運んでくれて、アデルと一緒に寝た。

寒い日だって平気だった。

でも、もうそんな幸せな日は来ない。

あいつが、ガスパーデが全部壊した。

父さんも母さんもアデルもじいちゃんもばあちゃんも友達も、皆
殺された。

心と脳髓に刻み込まれた記憶と、燃えるような灼熱の感情。

許せなかった。

俺から取り上げられた日常。
壊された故郷。

俺の心を駆り立てたのは復讐だけだった。
絶対に殺してやると、誓った。

背中の怪我が治ってある程度でかくなったら、世話になっていた親
戚の家を飛び出した。
親戚の泣きそうな声も悲しそうな顔も、何も聞かずに見なかったふ
りをした。

それからの日々は辛くて痛いことだらけだったけど、あんまり何も
感じなくなっていくた。
ただ、あいつに刃をつきたてる日を夢見て眠る。

それだけの日々だったのに。

仕事でへまを踏んだ。

散々殴られて蹴られて、
ひとしきり俺を殺す寸前にまで追い詰めて満足したのだろうか、
路地裏に放り出された。

重い体を引きずって、別の場所に移動して、倒れた。

そうして、冒頭に戻る。

俺を照らしてる月は見たことのないくらいまん丸で少し憎らしいくらい明るかった。

(あ、やべ・・・)

急速に色が失われていく世界で、

最後に見たのは、尻尾が二又に分かれた猫と月と同じ眼をした背の高い女。

「・・・おい」

その声を聞いたと同時に目を閉じた。

死にそうだった。

担ぎあげられた身体が感じたのは僅かな浮遊感と、温かさと安定感。

家族を亡くしてから、こんな風に背中にしよわれることもなくて、久しぶりに触れた他人の身体は温かくて、涙がこぼれそうになるほど優しくくて。

(まるで、母さんみたいだ)

そう思った時に涙がこぼれたのは気のせいだ。

SIDE：ロンドイーネ

父さんへ

そこそこ、賞金稼ぎとして名が売れるようになった今日この頃。

父さんはいかががお過ごしでしょうか？

多分、暇つぶしで海賊艦隊を潰したり、
高名な剣士を叩ききったりしているのだと思いますが、
剣士である前に娘として言います。

怪我してませんよね……？

父さんが強いのは長い間一緒にいた私は知っていますが娘としての
心配ぐらいさせてください。

ご飯はちゃんと作って食べていますか？

深酒をしすぎたりしていませんか？

昼寝を邪魔されたからと言って海賊団を壊滅させていませんか？

怪我や病気はしていませんか？

心配をさせてくれないくらい強い父さんでも、私は時々すごく心配
になります。

父さんも母さんみたいに私を置いて行ってしまうのではないかと怖
く感じることもあります。

だから、私が怖くなくなるまで、大人しくといたらあれですけど
心配ぐらいさせてください。

まあ、それはさておき、最近起こった出来事は（以下中略）

私はまだ剣士として新世界にはまだ名が響いておりませんが、
いつかは父さんの様に世界に名を轟かせたいと思っています。

P・S おキクさんの他に野良猫を拾いました。

「誰が、野良猫だ!!」

そこまで、書いた所でどなり声が横から巻き起こる。

「私は17歳でキミは14歳だろう?年頃の娘の所に年下で少年とはいえ男がいるなんて書いたら殺されるよ(キミが)。それに、シユライヤ。キミ、猫よりも猫らしいし……」

14にしてはか細い体躯の少年。

名前はシユライヤ・バスクードという。

「だから、俺は猫じゃねえっての!!それに、お前、猫なら、キクがいるじゃねエか!!」

「少し癖のある猫っ毛で、簡単に人になびかないで懐きにくいところなんてそっくりだよ。あと、キクの正式名称はおキクさんだよ。キクは愛称だ」

んなの知るか!!

そう言ってそっぽを向いたシユライヤの顔が出会ったばかりの弟の^{キウス}顔に重なって、思わず笑った。

それに憤慨する様もエースにそっくりだ。

くすりと笑い、癖のある髪を撫ぜる。
指をすり抜けるくすんだ色の髪はひどく柔らかい。

こつという仕種をするとシュライヤは

「俺はもう子供じゃない!!」

と言いきるから滅多にできない。

何故、私が駆けだして未熟者の賞金稼ぎの少年を拾ったのかというところレは数か月前に時間を戻すようだ。

身内以外果てしなくどうでもいいと、正直思っている私がズタボロになったシュライヤを拾ったのは、シュライヤが駆けだして未熟とは言え賞金稼ぎだったのと自分の記憶の中の最初に出会った頃の警戒をしまくっていたエースの目にシュライヤの目がそっくりだったからだ。

おキクさんが警戒しなかったからというのもあるけれど。

私もよく知らないけどこんなことに鋭いおキクさんが警戒しなかった。

それだけで、危害は加えないんだろうなあとは分かっていたけど、最初は凄かった。

包帯まみれの状態で逃げようとするは、奇襲をかけてくるは、昔のエースの方が大人しいかもしれない。

そもそも怪我を負ったのは自身の力量に比べて分不相応な敵と戦ったからで、シュライヤ自身の責任。それでも、思わず拾ってしまっ

たのは、賞金稼ぎ業界のことがふと頭によぎったからだ。
あそこ結び付きも横のつながりも薄いけど無いと不便だから。

それで拾って船まで連れ帰って、その重症な怪我をした身体を手当てした時に、その年齢の少年の平均よりもがりがりだった身体と背中に古い大きな傷跡を見てしまったから。

多分、この傷は少年が見て欲しくないものだったのを察してしまつてばつが悪かったというのもある。

罪悪感を感じてしまつて、普通の少年と同じようになるまで面倒をみると決めた。

手当てをし終わって目を覚ました時の戦い方も危なっかしいので見ていられなかった。それにどうやら私は、手当てをして目を覚ますまで部屋で何日か過ごした少年に情がわいてしまつたらしい。

それでも、手当てをしたことには感謝されているけど、懐いてはくれない。

仲良くなつたのはある一言だった。

何故、そんなに若い身空で賞金稼ぎとい堅気では無い職業になつたのか、とは聞かない。

人には言いたくないことや心に秘めておきたいことの二つや三つあるものだ。

だから、無理には聞かない。

キミが話したいと思つたのなら話せばいい。

私が彼を拾って一週間目。まだ、彼の名前を知らなかった時にそういうと、

何故か凄くほつとしたような目をしてて。

それからだと思う。

きちんと普通の会話をするようになったのは。

この疑似姉弟関係というか奇妙な師弟関係に陥ったもそれからだと思っ。

考え込んだ私を見て、顔を覗き込んできたシュライヤの頭を撫ぜてごまかした。

まあ、いいか。

一緒にいるのもおもしろいし。

SIDE：おキクさん

吾輩は猫である。

吾輩の主人であるロンディーネに付けられた名前はおキクさん。愛称はキク。

ご主人よ、何故吾輩の名前がワノクニチックなのか？

気に入ってはいるがご主人は北の海の出だろう。

どこにワノクニが入る余地があったのだろうか？

・・・今度聞いてみよう。

ご主人に拾われる前の名前は、イエルカ、カール、ルウエシ、シエリス、スインカ、カルヴ、ヴィクター……。他にも数え切れないほどだ。

毛並みは雪の様な白。

人間には金目銀目と呼ばれる金に見える濃い黄色と淡い青灰銀の目をしているのが特徴である。

人間の世界ではオッドアイとか虹彩異色症と言っらしい。

そして、もう一つ特筆すべきことは吾輩が18年近く生きていること。

ソオン
動物系幻獣種。

ネコネコの実モデル・猫又を食べた猫であるということだ。

この実を食べてからは色々あった。

若い時分に猫又になり、親はおらず、友達もいなかった。

この尻尾のせいで厄介事によく巻き込まれ、もともと住んでいた西ウエストブルスの海ケというところから偉大なる航路ケランドラインに連れて来られた。

何人かの醜い人間に売られ買われを繰り返し、とある売人ブローカーに買われた時に逃げ出した。

吾輩を逃がさぬ為に用意された追っ手を振り切り、

逃げ込んだとある島のとある町でご主人に出会った。

ご主人も追われていたらしい。至極つまらなそうに追っ手どもを見つめており、

返事をするのも面倒だと冷めて温度の無い目で彼らを視界におさめていた。

彼らに“飛剣”と呼ばれたご主人の顔はとても冷たくそして美しいかった。

あつと言つ間に海賊どもをのしてしまったご主人は、吾輩に「・・・キミも来るか？」そう言つて、くるりと踵を返してしまった。

吾輩は慌ててその背中を追いかけたのだ。

思わず、ついていききたいと思つてしまったのだから仕方あるまい。

共に過ごすようになって悪魔の実を、
能力を使って吾輩のしっぽを見せた時も動じずにむしろ、
綺麗で面白いと言つてのける辺り尋常ではない。

元々吾輩を匿い面倒事しか巻き起こさない吾輩を自分の猫にした辺
りで他人とは神経が違うのだから。

そのご主人は、今自分の弟子・・・？と言つていいのだろうかシュ
ライヤを甘やかしている。

手紙は書き終わつて、デスクの上に置いてある。

シュライヤ。シュライヤ・バスケット。

ご主人が月が綺麗な夜に拾つた子供。

筋がいいと認めていた。

どこか影を引きずつた子。

時折、瞳に暗い色を宿す危うい子。

だけど、不器用でぶっきらぼうで悪い子ではない。

親子の様な姉弟の様なそれを微笑ましく思つけれど、いらっとする
のも事実。

「・・・離れる」

そう話すと感じる視線。

シュライヤのぎよつとしたような視線を浴びながらご主人の肩に飛
び乗った。

ご主人の肩は吾輩のものだ。

驚愕を張り付けたシュライヤの顔を見つめながら。
にやりと笑った。

二十四話　私とキクと野良猫の話について（後書き）

おキクさん（18）

ネコネコの実モデル・猫又を食べた猫。一人称は吾輩だが女の子。

悪魔の実を食べた影響で人間とほぼ同じ寿命がある。

白い毛並みに金と銀のオツドアイで美人さん。

悪魔の実を食べたせいで人間の言葉が喋れて、流暢に会話できるし、人間並みに、場合によっては人間以上の知恵がある。尻尾は二又にしてる時もあれば普通の猫と同じようにしている時もある。

悪魔の実モデル・猫又を食べたせいか、人間になれる。

しかし、耳と尻はついたまま。

人間の時の姿は綺麗系らしい。

おキクとロンディーネにサンドされているシュライヤはリア充だと思おう。

あと、ロンディーネは隠れファザコン。

番外編く小ネタ集 part 2く（前書き）

本編が進まないからかっとしてやった。

実はあんまり後悔してない。

取り合えず本編の更新頑張ります。

取り合えずローとロンディーネの幼なじみ組はいちやいちやしてたらしい。

番外編く小ネタ集 part 2

1. ローとロンディーネがいちゃついでるだけ。

(もう、くつついてる。なんか少しいかがわしい雰囲気(多分雰囲気だけ))

愛しい恋人は何時だって俺を子供扱い、いや、弟扱いする。

確かに、俺の方が歳が上なのに元から大人っぽく俺よりも大人びて見えるのも昔からの事実だ。それにはディーネが実に密かに面倒見のいい姉貴分という性格が影響しているのだって知っている。ディーネは凜として格好いいし誰よりも綺麗だしヘタな男よりも男前だしそれでいて恐ろしい程に身内には甘いし優しいしもしかしたら自然と俺の方が甘えたりもしてたことがあったりしたんだろう。

だから子供扱いされることも仕方がないといえば仕方がないかもしれない。けどな、お前が無意識とは言え何度も何度も子供扱いされるのは男としてとてつもなく複雑でムカつくんだ。男のプライドだとか意地とかが俺には当たり前前様の様にあるわけで。それにとてつもなく愛しい愛しい恋人に子供扱いの上に若干弟のように思われてるのは不満だ。大いに不満だ。別に全力で拒否するほど嫌って訳じゃないんだがな。女に甘やかされていい思いしないなんて男じゃねえ。それだけは言える。それが愛しい女なら尚更だ。でもな、恋人としては対等な関係が望ましいんだよ。俺は。お前に愛されるよりも俺の方がお前の事を愛したいんだよ。今よりももっとディーネがドロドロになるまで愛してやりたい。ディーネが俺を愛してくれる以上にディーネの事を俺の愛で愛したいんだ。もう、十分愛される？いや、俺はまだ足らねえ。まだ、まだだ。まだお前に渡す愛も伝える愛も足りてない。ああ、そんなに頬をリンゴみたい赤く染めるなよ。可愛すぎてぺろりと食べちまいたくなる。なあそれに知っ

てるか？俺が愛してるって言うのはお前だけだつてこと。商売女になんて言ったことねーんだよ。いいから恥ずかしながら黙って聞いてくれ、愛してるんだ。お前だけを。お前を俺の愛で窒息させまいたいほど。世界で何よりも深く愛してるぜデイナーネ。おっと、お前可愛すぎるから話が脱線しちまったじゃねえか。なあ、聞けデイナーネの馬鹿。顔真つ赤にすんなよ可愛いんだよ。昔見たことのある人魚より可愛いとか俺のデイナーネって最強じゃね？いや可愛さ的な意味で。っーか可愛すぎるんだよお前。思わず苛めなくなる。っとまた話が脱線しちまった。まあ、俺がまとめた結論を述べるとだな。俺をあんまり子供扱いしてんじゃねえよつてことだ。俺はお前が思つてるほど子供じゃねえんだぜ。本当にな。それに、なあ、知ってるか？子供扱いなんかしてるからいざつて時に痛い目にあうんだよ？こんな風に、な。それとこういう厭らしいことに関しては俺は子供は卒業してんだよ。それこそとつくの昔にな。てかこういう事はデイナーネの方がまだお子さまだよな。与えられる熱に必死に声とか零れ出そうな吐息を我慢してるとことか顔見られたくなくて腕とか手で何とかして隠そうとするとことか気持ちいいくせに嫌々と首振つて否定しようとするとか本当に子供みたいで可愛い。超可愛い。海賊女帝屋やジュエリー屋なんて目じゃねえよ。ああそんな目で睨むなよ。涙でうるんだ目で睨まれても怖くねえ。むしろ色っぽいし艶やかだ。 ぞくぞくする。

なあ、デイナーネ

デイナーネは俺にこれからどうして欲しい？

(そうやって、青銀の目をした彼はワラッタ)

2・意外な特技を持つてるロンディーネ。音楽好きと会ってみた。
(賞金稼ぎ時代)

流れるような音が店内を流れる。

いや、流れるなんて言う生易しいもんじゃない。
支配するっついてもいいくらいの綺麗な音。

古いピアノから流れるのはジャズ。

音楽が好きなオラッチも聞いたことのない曲だ。

引いてる人間の顔こそ少し硬めで感情が分かりにくい、だが音は素直だ。

ダイレクトに音を奏でるのが好きだと聞く者に伝えてくる。

最後の音がなり止んだ。

思わず、拍手をする。

その音にピアノの前で情熱的にまで音楽を紡いでいた黒髪の女がこちらを振り向く。

射抜く様な金色の目がこちらを向いた。

「海鳴り」？」

訝しげにこちらを眺めてくる女は“飛剣”の通り名を持つ賞金稼ぎだったが、

ふとそんなことが頭によぎったが、そんなのもうどうでもよかった。

「なあ“飛剣”！！お前オラッチの船に乗らねェか！！？」

「はあ!？」

しかめっ面をした女とオラッチの口論は続く。

(その会話が止んだのは海軍がオンエア海賊団に喧嘩を売ったからだっただった)

(音楽好きに悪い奴はいねーんだよ!!)

(知らん。ほっといてくれ)

3. 酔っ払いローと素面なロンディーネ

(アラバスタよりは後でシャボンディよりも前。ロンディーネ賞金稼ぎ時代)

「俺と一緒にいない方がお前は幸せになれるんだろうな」

そう、私の横に座っている男が心情を吐露した。

“北の海”^{イースト}生まれの人間は住んでいる環境のせいか酒に強い人間が多いそんな中でこの生粋の北の海生まれの人間が酔い零した言葉は、嘘じゃなかった。

本気の言葉だった。

思わず表情がこわばる。

いきなり何言い出すんだこいつ。

私の少しばかり困惑した顔を見た後、バーのカウンターに突っ伏す。

(こいつは俺といたいほうがきつと幸せだ)

とか考えているんだろうなと昔からの付き合いのせいで思考が読み取れて少し苛立った。

(むかつく。勝手にキミの考えを押し付けるな、この酔っ払い)

カランと手の中のグラスの氷が鳴った。

その音に体は動揺していたのか思わず頭が揺れる。思わず、じつと横の男を見つめた。

少し苛立ちながら指でグラスの縁をなぞった。

時折、爪で硝子のグラスに爪を立てる。

耳障りな小さな音が耳朵を打った。

ゆっくりと口を開く。

「キミは時々、凄く馬鹿だ」

「は？」

私の声に反応して伏せていた顔をあげる男。

ちらりと見たその顔は、肌の色で気づきにくい酒のせいで目元が淡い赤色をしていた。

私に来る前にこの島のほとんどの酒場の酒を空にしたらしいから酔いが回ったんだろう。

酒神よりも酒に強いつて話なのにな。

自分も飲み過ぎて頭が蕩けているのだろう、普段ならありえない方

向に思考が働いた。

こいつも本音言ってるんだから、私だって本音ぐらい零してもいいんじゃない？

それにさっきまでの苛立ちも含めて、少しくらいイジメてもいいだろう？

あえて、横を振り向かないまま零す。

「・・・確かに、キミの傍にいない方が幸せだろうね（仕事とか安全だとかも含めて）」

そう言うと、音もなくへこんだ雰囲気の方が横にいて、うわっと素で思った。

ていうか少しばかり引いた。

「・・・だろうな」

意気消沈してる姿を見て、もう少し見ていたいとか思ってしまったけどまあそれは今はいらん。

「けどね、」

「んだよ・・・」

へこんだまま返答を待つ男の顔を見据える。

「 私は、幸せになるならキミの横がいい」

また、カランとグラスの氷が鳴った。

番外編〈小ネタ集 part 2〉（後書き）

糖分過多だったような気がする。

あと、ロンディーネがピアノを弾けるのは死ぬ前に習ったことがあるのと、こっちの世界の両親に仕込まれたからです。母親はともかく、ミホーク弾けるのかという疑問はあるかと思いますが、城を住居にしてるんだったらピアノぐらい颯爽と弾けるんじゃないかと思っただけの設定です。

二十五話 〓 私とおキクと野良猫の日常について (前書き)

これからも応援よろしくお願いします。

二十五話　私とおキクと野良猫の日常について

SIDE：シユライヤ

目を覚ましたら、自分の住む地方には無い技法の施された天井が見えた。

この船には未だになれない。

成長途中の身体に比べてもまだ大きいベッドから身を起こして立ち上がる。

ベッドのほかにこの部屋には服を納めるチェストと備え付けのクローゼット。

小さな机といす。それに、銀色のシェーカーが見える。

元々、ロンディーネの船の部屋だからあいつの服以外の私物は置きっぱなしになっているものも多い。

例えば、ダイニングに設置されている古めかしい細工の施された美しい光沢のピアノであるとか、高級そうなチェスセットであるとか、そういう細々したもの。

そして、俺が使っている部屋には銀色のシェーカーと細々としたバーテンダーの仕事用の道具もある。

剣士で賞金稼ぎなのに、何故？と問うたら、昔、戦闘で酒場を壊して修理費をはらったのだがバーテンダーが怪我をして少しの間働けなくなってしまった。そこで、昔、舌の肥えた父親に喜んでもらおうと基礎を身に付けていた彼女が女将さんにとっつかまって三ヶ月間働かされたのだという。

その給料と一緒に饒別としてバーテンダーの装備を一式貰って来たのだという。

いざとなったらバーテンダーにでもなるつもりかと聞いたら、笑って、剣を握れなくなったらだと答えた。

柔らかかそうな人相の癖に、その実一本びしつと背筋が伸びているのだから恐れ入る。

譲れないものは譲らない不屈の精神を持つ女。

追いつこうと走っても一向に近づかないその背中。

それを追いかけるのはなかなか疲れることである。

そこまで考えた所で、取り合えず、朝飯がてら今日の修行について聞いてこようと、

ベットから立ち上がって着替えた。

それがあんなことになるなんて思いもよらずに……

SIDE：おキクさん

ふわりと鼻孔をくすぐる、薄荷の香り。

ご主人の指や首筋や髪からするのはそんなほのかに甘い香りだった。

口寂しくていらいらをこまかすためだからと言って薄荷の煙草（煙草ではないのだが煙草としか表現がしにくい）を吸うようになつた

ほら、シュライヤが真つ赤なゆでダコみたいになってしまった。

「あ、あんた、早く着替えて来い!!」

くるりと踵を返して、どたどたと動揺しつつ去っていった。

首筋まで真つ赤だったあたり、お年頃だとしか言えない様な気がするよ。

「ご主人・・・」

「ん?」

「熱いシャワー浴びて目を覚ましに行きたまえ」

そう言うのと長いまつげをふるりと持ち上げた後、首を少し傾けながら、困ったように

「うー、分かった」

そう言って、着替えを掴んで浴室に向かって行った。

ふらふらしているがまあ大丈夫だろう。

それよりもシュライヤの方が吾輩は気になる。

んーと伸びをして、ご主人のソファから飛び降り、顔を赤くしたままであろうシュライヤの元に歩いて行った。

SIDE：ロンディーネ

熱いシャワーの水を頭から浴びながら、水が飲みこまれていく排水溝をぼんやりと眺めた。

だんだんはつきりしてくる意識。

温まってくる体。

(シュライヤには少し悪いことをしてしまったかもしれない)

熱いシャワーを浴びながら壁に寄りかかる。

湯気で曇る鏡には、健康的な体型をした若い女が写っていて、気づかぬ間に此方を見つめていた。

しばらく浴びていたお湯を、蛇口をひねって止める。

換気扇のスイッチを押し、水気を簡単にワイパーで取ってから、洗面所に移動する。

簡単に髪を纏めてタオルで覆ってから、体をぬぐい、下着を身につけ、服を着る。

皺一つ無い真っ白なシャツに剣を納めるホルスターのついた銀のバックルのベルト、細いシルエットのズボン。最後に底とつま先に鉄板を仕込んだブーツをはいて完成。

覆っていたタオルをとって洗った髪を拭くとまだほのかに薄荷の匂いがした。

薫る薄荷の香りに思いだす。

初めて賞金稼ぎになって殺してしまった子供。

正確には海賊の子供。

私の通り名の由来にもなった“飛剣”の、
所謂“飛ぶ斬撃”を喰らいそうになった父親を庇って目の前に飛び
込んできて、
咄嗟に父親ごと斬ってしまった。

子供の引き攣った顔と、全身にかかった血の色と匂いと口に飛び込
んできた鉄の味。

それが当分の間、こびりついて離れなかった。

どこにいても、

何をしてても、

何を嗅いでも、

何を食べても、

血の匂いと味がついて回った。

だから、それをどうにかできないかと思ひ。

吸い始めた薄荷の煙草（正確には薄荷煙草と言うべきなのだろうか
？）。

本物の煙草に手を出さなかったのは健康面に厳しい幼なじみと
健康的にくる被害や壁や天井につくヤニが汚くて嫌だったから。
要するにビビったわけだ。

自分の感情やら記憶をごまかすために吸い始めた薄荷だったけど、
今はもう無かったら口寂しくなってしまうくらいに依存している。

・・・それも、どうなんだろう？

おキクにご主人は薄荷の香りがする、とまで言われるくらいだから
相当だろう。

まあそれでも吸っていないと不意に吸覚や味覚に血がよみがえるか
ら、肌身から離せない。

いつそ呪われてんじゃないの？と考えるほどだ。

恨まれるのは覚悟していた。

憎まれる覚悟だってした。

殺す覚悟もいつか殺される覚悟もしていた。

それでも、まだ足りなかった。

そういうことなのだろう。

グイツと身体を伸ばすと、刀をベルトにおさめてダイニングまで歩き出した。

・・・シュライヤにもフォローしてあるからおキクに謝る為に。

二十五話〱私とおキクと野良猫の日常について〱（後書き）

多分、シュライヤはタイミングが悪い。

おキクとロンディーネはマイペース。

彼女とシュライヤは恋愛感情皆無のどちらかといえば家族に近い感じの感情で結ばれています。

番外編 I F 〱 ローと私と一緒に編 〱 (前書き)

似非シリーズもどきの短編三本。ほろにがい甘さ。多分付き合ってる。

SS並みの短さです。

時間軸的には2 3 1です。

それでもいいかたはどうぞー!!

番外編 I F 〱 ローと私と一緒編 〱

1. 卑怯な私とずるいキミ

ぼんやりとかすむ視界にとろける思考。

自分のものとは違う体温。

触れる手つきは酷く優しく。

緩やかに移動する速度から考えて私は酔ったところを運ばれているらしい。

それにしても月が綺麗だ。

知らない人間だったらすぐに体が臨戦態勢になるのにならぬという事は私に触れているのは身内で。

私を運んでいるのは横に座って飲んでいたローだろう。

昔と同じように背負って運んでいるらしい。

ふふと思わず笑みがこぼれた。

世は、ローの事を極悪人と断じ残虐非道と罵る。

それは確かに本ただけれど、海賊だからと説明がつく。

それにたくさん優しい所もある。

私にとつたら昔からとても優しいやつなのだ。

・・・私が大好きな人なのだ。

そう、思ったら口が勝手に動いていた。

こんな時にしか言えない自分に腹が立つ。

卑怯者だ。

「ろ、」

ああ、口がうまく回らなくて、舌つたらずだ。それでも君に伝えたい事があるんだ。

「君、といっしょ、だと・・・つき、がきれー、だ」

それは昔、明治の文豪が訳した言葉。

異国の愛を囁く言葉。

ひどく遠まわしで、けれど心を籠めた言葉。

「・・・俺は、死んでもいいけどな」

額面通りに受け取るだろうと思っていた言葉にカウンターを喰らった。

・・・なんで、知ってるんだらうか？

まあ、なんにせよ。

「・・・卑怯者」

「お互い様だ」

お互いに耳や首を赤く染めたまま、一人が一人を背負って帰る様子は滑稽だろう。

けど、私達はそれが精一杯で、ティーンよりも青かった。

大人が青年達よりも青い恋をするなんて、ね。

昔から君の背中では私の定位置だった。

多分、キミだってそうだろう。

一緒に過ごすのが当たり前だった。

横に立つのが普通だった。

傍に いる の が 当 たり 前 だ っ た 。

お互いに好き合っても、この居心地のいい関係を壊すのは怖かった。だから、お互いに踏み込まなかった。

昔、繋いだ手を離すのが怖かった。

手を離して抱きしめようにも、どうしたらいいのかわからなかった。だから、お互いに気付かないフリをした。

お互いにただの幼なじみのフリをした。

恋人同士にはお互いに踏み込めなかった。

お互いに、どこか歪んだ関係だった。

お互いに距離を取ろうにも取れなくて離れ過ぎるのは嫌で違和感がありまくりだった。

私は卑怯者で、キミはズルかった。

逃げ道を用意しとく位には、卑怯だったし、ズルかった。

お互いを傷つくのも傷付けるのも嫌だった。

だから卑怯な私は酔った振りをして、ズルいキミもそれに乗った。

「ずるいなあ・・・」

「お互いに、だろ？」

そうして、しばらくの間、ふたつの影がひとつになった。それを、月が、月だけが見ていた。

2・矛盾を抱える俺と気付かないお前

ベットに寝かせたディーネの髪を撫でる。

昔の感覚と変わらず、絹みたいな手触りでスルリと俺の手から零れ落ちてく。

黒い夜のような色が白いシーツに広がった。

髪を一筋手にとって口づける。

こんな時にしか、こつという風にできない。

本当は、抱きしめて、キスして、可愛がってやりたい。それぐらい、ディーネの事が好きで愛おしい。

でも、俺はこの幼なじみという関係を壊すのが怖い。だから、何も言わない。

けど、

(気付いて欲しい。いや、気付かないで欲しい)

矛盾するこの感情^{コロロ}。

自分から手を離すのが怖い。

この関係を変えるのには離さねばいけなくとも、俺は怖い。
この手を離したことで変わる関係が恐ろしい。

・・・他人にとっては些細なことでも俺にとつたら重要だ。

でも、きつと。

俺が手を離れたほうがこいつは幸せになれるのだ。

そんなこと、とつくに知っている。

それでも、俺は、この手を離したくない。

・・・どうしようもないくらいに感情をこいつに抱いている。

ツウと指でディーネの唇をなぞった。

そこに口づける度胸もないくせに。

いつか、そんな日が来ればいとそんな希望^{ゆめ}を抱いてる。

(・・・アイシテル)

眠っている時なら言えるのにな。

この距離を、この関係を壊せない自分に苦笑。

「おやすみ、ディーネ」

そう、額にひとつ口づけを落として扉を閉じた。

3. どうしようもない感情

(・・・どうしよう)

おでこに触りながら呟いた。

(寝たふりなんてしなきゃよかった。いや、途中まで寝てたから嘘ではないのだけど)

耳がじりじりする。

首筋や頬や頭が熱い。

絶対、これ顔とか赤くなって体温上がってる。

トマトみたいだ。きっと。

「うあああつあああ・・・!!」

耳を澄まし、全身全霊を駆使して、誰もいないのを悟った後じたばたする。

なにこれ、めっちゃこそばゆい。

ぎゅっと抱きしめた枕はローの香りがして、それにも赤面。

私にどーしろってーのさ!!

だって、キミとの関係を私は失いたくないんだよ・・・。
この関係が進むかもしれないよりも失くす方が怖いんだ。

・・・だから、私は何も言わないから。

全部、飲みこんで忘れてしまおう。

(キミが泣きそうな顔だったことも、キミの声が震えていたことも、キミの手が私に触れたことも、全部。記憶の底に沈めよう)

(だって、私は、・・・キミとの関係を壊したくないんだ。キミと一緒にいたいんだ)

番外編 I F ㄟ ローと私と一緒編 ㄟ (後書き)

この二人はくつついててなんぼな気がします。

私のもうひとつのOPの小説の子が片思いな分、甘くしたくなるの
かもしれません。

これからも頑張ります。

番外編〜私と君と弟妹と〜（前書き）

1 番目は甘いです。

2 番目は普通にほのぼのしています。

3 番目も平和です。

それでもいいかたはどうぞー!!

番外編　私と君と弟妹と

1．熱帯夜

（ローとロンディーネの話。時間軸はシャボンディよりも少し前あたり。なんとなくいかかわしく、エロイです。ローがエロイのがいけないんだと思います）

熱さにやられたんだと思う。

そう誰に聞かれるわけでも見られる訳でも無いけれどそう、言い訳した。

北の海生まれのこの身体には辛い、熱。^{ノース}
茹だる様に暑くて、気持ち悪いぐらいだった。

だから、お互いに熱に頭がやられたんだと思う。
簾が吹っ飛んだんだ。お互いに、そういう事にして置こう。

「ディーネ、っ……」

ぞくりと腰に来るような声で囁かれ、痛いぐらい抱きしめられる。
それなのに、それとは真逆なくらい優しいついでにむようなキスを、
耳朶に、
頬に、
脛に、
唇に、
首筋に、
落としてくるローを視界におさめながら、

何故こうなったのかについて熱に犯された頭で考えた。

ローから貰う口付けは不快なものではなくて、むしろ心地よいもので、

無意識のうちにもっと、もっと、と口走っていた。

その言葉に煽られたのが口付けは深く長くなっていった、背を向けていたベットに優しく押し倒された。

そうしてる間にも削られていく理性。

むき出しになっていく本能。

絡みあう体。

重なる影。

上昇する体温。

ああ、まるでケダモノみたいじゃないか。

窓から入ってくる熱い夏の夜の風。

夏島の夏の風だ。

「ロー、」

ベットに縫いとめられる体。

覆いかぶさる目の前の男。

それに抵抗せずに、むしろそれに答えている私も熱にヤラレテいるらしい。

「あつ、い」

シャツの下に、ツウと流れる汗。

素肌に張り付くシャツ。

ぐしゃぐしゃに絡み合うシート。

薄い月明りに照らされるお互いの体。

髪から滴り落ちる汗。

口づけを交わし合い混じり合い引き合う、銀色の線。

触れる指先、淡く色付く肌。

上がる体温。熱い空気。それに爆ぜるような部屋の中。

窓辺に取り付けられた風鈴の音が鳴るのが聞こえた。

頭ん中はぐちゃぐちゃに融けていて、でもそれでもいいかと思っ
ちゃって、

もう訳わかんなくなっちゃって、ローならいい。

そう、思ってしまった。

ああ、もうこんなこと考えるなんて私もいろいろ末期だ。

触れられた所と触れた所が酷く熱い。

じわりじわりと侵略されるような感覚。

私は、その手が酷い位に優しいことも、暖かいことも、

安心を与えてくれることも知っているのに、

咄嗟に思ったのは喰われる、という感覚。

ゾクリとするような感覚が体に刷り込まれていく。

体に与えられる熱は酷く熱いのに、私に触れる手は、ひどいぐらい
に優しくくて。

もうそれだけでいいと思った私は頭の螺子がどこかに飛んで行っ
たらしい。

「ロー、」

「。ディーネ」

私の言葉に、嬉しそうな顔をしたローがいて、ローの返事に満足した自分がいた。

ケダモノ達の夜はまだ終わらない。

2・妹分と私とマニキュア

(妹に甘いお姉様。賞金稼ぎ時代)

フリルやレースに飾られたペローナの私室の中。

ふわりとした素材でできた猫足のソファーに腰掛け思わず言葉をもらした。

「綺麗だなあ・・・」

思わず綺麗だと零したのはペローナの指先。

ネイルアートの施された繊細な爪であり、爪先である。

「綺麗ってこれのことかロディ姉様？」

きらりとランプの明かりを受けて煌めく爪。

剣を持つ為に武骨気味な私の手とは違い、小さくてかわいらしい手だ。

「そう。細かくて繊細で綺麗だ」

御伽噺のお姫様のような手に指先。

爪は丁寧に入られ磨かれて、モリアさんがペローナの事を大切にしているんだということが分かる。衣服とか、高くて品がいい奴だし、こんな広い私室をくれるなんて、女の子のペローナの事をよく考えてくれてるんだなと思った。

ペローナは爪に瞳に合わせた薄紫色のマニキュアを施し、その上にキラキラと光る水晶や、小さな宝石のかけら、そしてスパンコール？だっけかよく知らないけどキラキラな光りものが乗せている。

普通の女の子らしくない私でも、こういう女の子らしいものには憧れる。

ランプの光りにきらきらと輝くそれはとても綺麗だった。

「・・・姉様もやってみる？」

きらりと瞳を輝かせてペローナが問うてきた。私が、こういうことに興味を出すことが珍しいのを知っているから嬉しそうに。

その顔を見ると嫌とは言えなくなってしまふ。

というか、もう道具の入ったメイクボックスを手に持つてるし、頼むしかないだろう。

「・・・じゃあ、頼もうか。でも、あんまり細かいのは駄目だ」

刀にひっかけてたりしたら、危ないから。

そう言うと、神妙な顔をして、頷かれた。

「・・・何色がいい？」

そう指に手を添えながら言われてふと考える。

「黒とかでいいんだけど・・・」

シンプルなのでいい。一応トップコートを塗っているから。そういうとペローナはひどく不機嫌な顔になった。

「駄目！！そんな地味なの！！姉様にはもつと濃い派手な色合いが似合うと思う。雪国育ちで肌が凄く透明感があって白いんだから」
きっぱりと否定された。そんなこと言われてもな・・・。

「じゃあ、青か藍がいい。黒に近い藍か銀混じりの青」

とっさに口からこぼれたのはあいつの色で。

ふとあいつは、私の生活にひっそり大きな影響を残していることに気付いた。

「私は銀を混ぜた黄色でもロディ姉様の金色の目に映えていいと思っただんですけど・・・。姉様が言うのなら藍色にしますね」

慣れた手つきで除光液で爪の色を落とし、様々な色のマニキュアの入ったメイクボックスから青を取り出して並べる。

そして、私の要望に答えた色合いを取り出し、慣れた手つきではけを使い始めた。

このあと、ちょっとゴテとした飾りをつけるか付けまいかでちょっとした口喧嘩が起こったのはご愛嬌だ。いや、だって妹にしてみらうのに飾りが取れたらショックだし・・・。

結局、私がラメを使うってことで妥協しあっただけだね。

3・お菓子

(実は、弟達にケーキをよく焼いていた姉)

「シュトーレンが食べてエ・・・」

我らが船長は、そう言った。

「おい、ルフィ。シュトーレンってシュトレンのことか?」

思わず問い返す。

シュトレンはあいつの故郷東イーストブルの海ではなくて、俺の故郷北ノースブルの海で有名な菓子で、クリスマスイーストブルの約四週間程前に大きく作り、クリスマスまで少しずつスライスして食べることの多いクリスマスシーズンによく見かける。レーズンなどのドライフルーツがたくさん入った、ずっしりと重い長方形のパン菓子だ。

焼きたてよりも、時間が経った方がしつとりとして一番美味しい。そんな菓子。

「そっだぞサンジ」

「・・・何で東生イーストまれなのに知ってたんだ?あれは北ノースの菓子だろ」

思わず尋ねると、ルフィは

「ねえちゃんが昔から、作ってくれんだ!」

すっげえ笑顔で思い出した記憶に笑ってって。

ねえちゃんは料理が上手くてな〜とか言っているのが料理人としてのプライドにかちんときた。いや、家庭的な女性は素晴らしいとは思うんだが料理人の前で姉の料理が一番うまいとか言われると流石に……。

「分かった。 作ってやる」

「おお！！ありがとなサンジ！！」

「……おお」

やっぱり、太陽みたいにきらきらした笑顔を見て俺は、

(ぜってえ、俺のメシが一番だつて言わせてやる……！！)

静かな誓いを胸にたてた。

あそこまで、この大喰らいに言わせるなんてどんな姉だとか、そんなことも考えつつ。

打倒、ルフィのお姉様！！

そう料理人として誓った。

番外編〜私と君と弟妹と〜（後書き）

ローが絡むと、何故か甘えになってほのかにエロくなる不思議・・・。

番外編も多くなってきたので番外編を別にしようかと考えているのですが、どうするか悩んでいます。番外編ってこのままでもいいんでしょうか？それとも新しくコーナー作ってわけるべきなんでしょうか？

二十六話 〳私と猫と弟子の恋の話について〵 (前書き)

結構苦勞してる主人公。

よじやくとある感情に気付いたかも……。

二十六話　私と猫と弟子の恋の話について

SIDE：ロンドイーネ

昔から、人の感情を読み解くのが得意だった。

視線や口調、瞳と声の強弱、顔、立ち振る舞い、雰囲気、その他諸々。

それを察するのが得意だったのだ。

それは一重に前世に値する生活が複雑だったせいかもしれない。

ただ、この事柄が得意になったのは今生の父と幼馴染が影響しているのは確かだ。

それだけは、言える。

寡黙すぎる父と気分屋な幼馴染。

それに磨かれたと言ってもいいかもしれない。

人の顔色を見抜くすでに賞金稼ぎという職業柄、

感謝した事は多いが無きや良かったと思う事があるなんて想像していなかった。

さて、どうしよう………？

弟子と飼い猫が両片思い状態。

猫と人間といっても、悪魔の实の人間型だと見かけはほぼ人間だし、

肉体、知識、思考も人間に酷似しているから問題は無い。歳だって三つくらいしか変わらないから、許容範囲内だろう。

しかし、私はお互いから変な誤解されてがつつり自分も三角関係に巻き込まれてる。

この状況、笑えない。

むしろ、私を巻き込むな。

自分に関係ない色恋沙汰に巻き込まれるとか経験無いからどうすればいいのかわかりません。

「ってことなんですけど、どうすればいいんでしょうか？」

「・・・何で、俺に言う」

「父さんは論外だし。お祖父ちゃんはもっと論外で、たまたま知り合いの男性が非番でいたからです」

はあと溜息をつくスモーカーさんを尻目にコーヒーを啜る。苦い。

こればかりは父とも幼馴染に進められても苦手なままだ。

「・・・すみません。でも、あの空気の中にはまだ戻りたくないんです」

そう言った私は死にそうな顔をしていたんだろう。

「・・・めんどくせえ」

そう呟いたスモーカーさんが立とうとしていたのに座りなおしてくれただけだ。

「好きな奴がいるとでも言えばいいじゃねえか・・・」

「それを言ったら、猫に弟子が好きだと誤解されたんですよ・・・」

はあと溜息をつく。

ケーキにぐさりとフォークを突き刺した。

「そうか」

酷く、可哀そうなものを見るような目で見つめられる。

ちよ、やめて、マジで、そんな目で見ないで。

「・・・慈しむような目で見ろな」

そうやって行儀が悪いと思いつつもテーブルに突つ伏した。

ロー。こういうのに慣れてそんな君に、今、凄く会いたい。

むしろ、今すぐにヘルプミー。

SIDE：スモーカー

こうして見るとこの子供は普通の子供だと思つ。

個人で二億の首を取った事のある“飛剣”の賞金稼ぎには見えない。

当たり前前で当たり前前に悩んでる大人になり掛けた子供だ。

「（・・・苦労しまくりだけどな、こいつ）」

表面筋が死んでるとしか思えないほど鉄面皮な鷹の目が父親で、破天荒を絵にかいたようなガープが祖父だ。日常生活とはかけ離れた日常を送っている。……不憫だ。

「で、聞いているんですか？」

座った目でじとりと見つめてくる。

父譲りの金色の瞳は射抜く様な光を帯びている。

「ああ」

「それならいいです。というか、何で私だけこんなに悩まなくちゃいけないんだ……！」

あー、だの、うーだの唸ってる子供。

海軍本部にいた頃と変わってやしねえ。

「だったら、故郷のガキが好きだとも言えばいいじゃねえか」

「はあ？」

心底訳が分からないと言ったふうに俺をじつと見つめてみる。斬り裂く様な強い力を籠めた瞳だ。

「だから、ガープ中將に喧嘩を売ったガキだ」

思い当たる節があったのか、顎に手を当てて、言った。

「……そいつって、雪国には珍しい肌の色をしてみましたか？」

「ああ。色の濃い肌をしてたが」

「っロー・・・!?!」

あいつ何やってんの!?

愕然としたように動揺する子供。

いきなりそんな事言われれば、そうなるだろう。しかも、大分仲のいい間柄の様だし。

「中将にドロップキックぶちかました。確か、『ディーネを返せ!』と言いなから」

「は、え、それって、本当ですか?」

わたわたしながら尋ねる様子は、賞金稼ぎなんて危険でどちらかと言つと世界の裏側で生きる大人に見える子供が年相応に見えて微笑ましかった。

「ああ・・・愛されてるじゃねえか」

くくくと喉の奥で笑うように言つてやると、目の前の子供は、ボンと音を立てて赤くなった。

肌が白いから傍目から見ても赤くなるのが分かる。

「あ、愛!?!? いやいやいや!! 私とローはそんなんじゃないよ・・・!?!」

「落ち着いた後、そのガキは『好きな人間が攫われるのも同然に連

れてかれた』とも言ってたな」

俺の言った言葉にとどめを刺されたのか、普段の仏頂面気味の表情がどこかに吹っ飛び、年相応の普通の女の顔を真っ赤にさせて、おろおろし始めた。

父親にも祖父にも似てない、年相応で見てて何故だかほんわかするものだ。

頭に手を乗せた。

「まあ、頑張れよ」

S I D E : おキク

ご主人が慌てて帰って来た。

うつすらとその頬は赤い。

しかも、若干動揺しているようだ。

こんな事、今までだって無かった事だ。

「おキク、シユライヤ。ちょっと、北の海まで行くよ」

北の海。

昔ご主人が話してくれた故郷。

雪と氷の白い国。

「吾輩に異論はないけど、どうする？」

「ロンディーネ、此処は偉大なる航路だぜ、わざわざリヴァース・マウンテンまで戻るのか？」

そう、問題はそこなのだ。

「いや、もう真ん中は過ぎてるから、このまま、シャボンディ諸島で補給をしてマリージョアまで行く。キクには悪いけどシャボンディでは出来るだけで歩いて欲しくない。出歩くのなら三人でだな」

「なんで、マリージョアなんだ？」

「この大きさの船ならある程度のお金があれば壊さずに運んでくれるからね。裏技に近いけど」

「・・・吾輩も知らなかったにや」

そう、話しているうちに時計の鐘が鳴る。

「では、諸君。行こうか？」

「ああ」

「分かった」

そう言って、三人が三人とも持ち場に散った。

二十六話 〱 私と猫と弟子の恋の話に ついで 〱 (後書き)

これからも、頑張ります。

二十七話〜私と別離と猫の告白について〜（前書き）

シュライヤ編はここで終わりです。

彼も色々葛藤をかかえて過ごしてきました。

今回はようやっとローに再開です。

ついでに時間軸は原作開始二年前です。

二十七話　私と別離と猫の告白について

SIDE：シユライヤ

このまま此処にいたら
ないか。

決心が鈍ってしまうんじゃないか。

そんな考えが心によぎる様になったのは何時の頃だったか。

あの人に拾われて、弟子になってからの生活は優しすぎて。

やさしくて、あたたかくて、あたりまえのものを当たり前のようにくれた。

あの人はもう手に入らないと思っていたものを、正確には酷似した
ものだけどくれた。

俺やキクを見る目は真っ直ぐで優しくて温かくて、母さんみたいで。

これ以上此処にいたら、復讐の気持ちが薄れていくような気がした。

どうしようもないくらい憎いのに、復讐したいと思っているのに、
この人達はどうしようもなく優しいんだ。
甘えたくて縋りたくなる位に優しい時間を三年間俺にくれた。

けど、これ以上は駄目だ。

俺は、そんな自分が許せない。

目を瞑れば思い出せるあの炎の光景。

赤くて、皆、殺されて、今だって夢に出てくる。

父さんも母さんもアデルもじいちゃんもばあさんも友達も皆死んだ。殺された。

赦してはいけない、赦せない奴らが生きている。

赦さないと決めた。赦してはいけないのだ。

それなのに、俺は、こんな温かい場所にいることなんてできない。

あいつらを殺すまで、俺は、こんな場所にいたら駄目だったんだ。

だから、この場所から出て行こうと思った。

この場所は、俺みたいな復讐者には、優しすぎて駄目だ。

ふと、あの金と銀のオッドアイの瞳が脳裏によぎったけど、それを振り切った。

薄荷の香りも振り切った。

名残惜しいと言われればそうとしか言えない。心残りがある、それだつて嘘じゃない。

あいつを残していきたくは無かったけど、この修羅の、復讐の道にあの白を巻き込みたくなかった。

あの人の所にいたら絶対に無事だつて知っているから。

血なまぐさい日常しか与えられない俺より、強くて優しいあの人の所にいたほうがいいんだから。

あの場所に、まだいたかつたけど。

それでも、これ以上此処にいたら駄目だと思った。

だから、俺はばれない様に船を出た。

それなのに

「で、こんな夜更けにどこに行くんだ、シュライヤ」

なんで、この人は、

満天の星空を従えて月を背に立つ人は、不機嫌そうにその金の瞳を歪めていた。

S I D E : ロンディーネ

やっぱり、こうなったかと内心溜息をついた。

胸と瞳に復讐の炎を宿した子供。

もう、子供ではなく青年だったけれど、私に言わせればまだまだ子供だ。

復讐なんて何も生み出さないと知っていた。

その癖に、自分を何故生き残ったと赦さずに傷つきながら破滅への道を歩く子供。

自身でも分かっている癖にその歩みを止めやしない。

それに気づいたのは稽古をつけて結構すぐだった。

死にたがりの復讐鬼。

私が何を言っても聞かないのは何故か分かった。

それなら、せめて死なない様にと稽古をつけてやった。

それでも、恵まれていたとは言えなかった。

シュライヤの体格はお世辞にも筋肉の付き易い質とは言えなかった。幸い身長は伸びたけど、筋力には恵まれなかった。

才能は、あるだろう。

精神力だつてある。

しかし、始めた時期が悪かった。

私が拾った時には痩せていてぼろぼろだった。

その為に怪我を治してからでないかと稽古も出来なかった。

独学で戦い方を身に付けていたので基礎もできてなかったし、変な癖だつてついていた。

体力も痩せていたから少なかつたし、よくあの状況で生きていたと思う。

それでも、料理をおなか一杯食べさせて船の移動中は基礎練と体力作りに取り組ませて、ようやくと身について来た所だ。

それ位、ひどかつた。

基礎をしつかり覚えさせて、つばぜり合いに持ち込まない身の軽さを利用した戦術を教えたけど。

まだ、教えてない事がたくさんある。

飛ぶ斬撃だつて教えてないし、覇気にだつて手が回らなかつた。

その状態で、敵には勝てないだろう。

元海軍将校、“將軍”ガスパーデに勝つのは今は無理だ。

でも、きっとこの弟子は諦めない。

だつて、三年一緒に過ごしても復讐を諦めさせれなかつた。

復讐なんて何も生み出さないと知っているのに、止める事が出来なかつた。

だから、本当は言いたい事も言えやしない。

「復讐なんてやめてしまえ」、「行くな!」そんな事すら言えない。

まだ、胸と瞳に宿る炎が消えていないのを知っているから。

だから、これは自己満足だ。

「シュライヤ、餓別だ」

ヒュっと、片手に隠していた黒い帽子を投げた。
きちんと受け取ったのを見て、私は踵を返す。

「・・・死ぬなよ、馬鹿弟子」

他には何の言葉もかけない。

ただ、死んでほしくないだけだ。
三年も一緒に過ごした弟子なのだから。
感情移入してないと答えればバカみたいだ。

だから、この言葉だけで十分だ。

口下手な私と不器用な君なら、こんな単調で短い言葉で十分。
頭を下げる気配がした。

「今まで、ありがとうございました!!」

それに、私は片手をひらりと泳がせることで答えた。
お互いにもう、振り返らなかつた。

SIDE:おキク

トソつと目の前に降りるとギョツとした、シュライヤの姿が見えた。滅多に取らない人型（最近特訓して耳としっぽも隠せるようになった。びっくりすると飛び出るけど）に驚いたのかもしれない。

「キク……」

何で、とそのままざしは問うていたけど、それには笑顔を持ってして答えた。

「吾輩は、君と行くぞ」

「バカ、んなこと言うじゃねよ！お前は、あの人の所に居いる！！」

本気で怒り怒声を放つシュライヤ。

でも、惚れた男が自分の事を心配して言うてくれているのを理解わかっているのに、

引きさがる女はなかなかいない。

吾輩はもろにそのタイプだ。

ただ、どうしようもない位に愛しい好いた人と一緒にいたいと願う女だ。

バカだと言われてもいい、それくらい惚れているのだから。ただ、傍にいたいだけ。

ご主人にだつて許可を取つて来た。

シュライヤと共にいたい、と告げた。

返事は、幸せになってこい。だった。

要するに幸せになれるのならどこへ行っても構わないという事。

まったく、不器用でぶっきらぼうで優しすぎるご主人だ。
初めて会って頃から、まったく言うていいほど変わってない。
一本気で頑固で生真面目でとろけるくらいの愛情をくれる優しすぎるご主人。

一緒に居た事を、ご主人がご主人であった事を吾輩は誇りに思う。
それぐらい誇らしい人。

そこまで、思える。

そしてまだ、怒っているシュライヤの口元に指を近づけた。
動きが止まる。

空間が酷く静かに感じられた。

「吾輩の事を心配してくれているのだろうか？」

けれどな、と言葉をつづけた。

「吾輩は、お主の、シュライヤの、傍にいたい・・・」

空気が固まる。

目を見開いたシュライヤの瞳に、薄らと涙目になった吾輩自身の姿が見える。

真っ直ぐに視線を交わして、口元を指していた指を引っ込めた。
そして、僅かにシュライヤの服の裾を引っ張りながらぼつりと零した。

「駄目、だろうか？」

お主が、一緒じゃなきや、嫌だ。
傍にいたいんじや。

そう、言った。

二十七話〱私と別離と猫の告白について〱（後書き）

いつも応援ありがとうございます。

これからも更新頑張ります。

二十八話、死にかけの私と彼の仲間について（前書き）

キャスケット（シャチ）とペンギンは同じ島の生まれって捏造して
るよ！！

それでもイイ人はどうぞ！！

何故、キャスが彼をキャプテンと呼んでいるのかは次回。

二十八話 死にかけの私と彼の仲間について

SIDE：ロンドイーネ

運が悪かった。

今の私を表すなら、その一文で表わせる。

運が悪かったのだ。

ここ何年か振り返ってもそのなかで一番悪かった。最悪だ。

知らない間に厄年になってたんだらうか？

シユライヤとキクと別れてから、何組もの海賊団にぶつかり、喧嘩を売られ、戦い、勝ったのに、そいつの獲物に毒が塗られててかすってダウンしてフルボッコされかけたりとか、そういうのが色々積み重なって大けがしたとか、海王類に追っかけまわされた拳句に嵐に直撃して船が沈みかけて、自分でもどうして生きているのか正直わからない。

で、ようやく故郷の島に帰って来たと思ったら、

故郷が襲撃される直前で傷口が開くまで大暴れする羽目になった。

正直、辛い。

というか、私が何故にこんな目に？

「ッ、ッ、」

ゆるめの服の下の応急処置として自分でわき腹と左肩に巻いた包帯には血が滲み、
いくらか顔も痛いことから、他人から見て分かるような所も怪我をしているだろう。

故郷を襲いかけてた海賊の最後の一隻を一刀両断にして、
普段からは考えられないほどのろのろとした動作で船を港に付けた。
上手く力が入らず、何度やってもロープを巻きつけるのに失敗した。
最終的には腕に括りつけてどうにか巻き付けた。
そうして、何とか錨を降ろし、船を固定する。

そんな、簡単な動作にも目眩がするほどだった。
寒い気候で有名な北の海なのに、背中にびっしりと汗をかいている。
手だってまだこの前の毒が抜けていなかったのか震えのような麻痺
の様な感覚が止まらない。

震える足で、雪の降り積もった陸地に着地する。

…死にそうだ。

頭はガンガンと叩かれているかのように割れそうで、寒気と悪寒が
止まらない。

心なしか目もちかちかと点滅している様に不鮮明だ。

耳鳴りさえもしてきたのだから笑えない。

これ、墓穴に一步足を踏み入れてるんじゃないだろうか？

もう、どうでもいいから早く家に帰って休みたい。

そう思い、足を踏み出し歩き出して誰の目にも届かない路地裏に入
った瞬間。

限界だったのか黒く染まり掛ける視界。

ダンつと手を咄嗟について初めて、手が血だらけだった事に気づいた。

オレンジ色のレンガの壁がいやに鮮やかに赤に彩られる。

あ、これ、無理だ。

頭によぎったのはそんな戯言の様な事実で、ぐらりと体が崩れ落ちそうになった。

咄嗟についた手がずれ、ずるりと血が壁に赤色の線を引き、汚す。

咄嗟に壁にもたれかかる。

凄く寒いはずなのに何も感じなかった。

誰もいない路地つてのは自分の意地の出した結果だった。

人のいる所で膝をつくのは自分の意地とプライドが許せなかった。

その結果がこれ。

ずるずると行儀が悪いと叱られてしまうような体制で、壁に背を預け地面につく。

力の入らない足を行儀悪く投げ出して、紅く染まった雪を眺めながら目を閉じた。

もう、瞼をあげているのもおっくうだった。

路地裏で死にかけていた私の元に、声が聞こえた。

それが、最後だった。

SIDE：キャスケット（シャチ）

俺の名前はシャチ。

しかし何時もキャスケット帽をかぶっているからなのかキャスケット

トとも呼ばれてる。

愛称というかもう一つの名前みたいになっているのは、最初に呼び始めたのがキャプテンことトラファルガー・ローその人だったのが相性が名前よりも呼ばれるようになった要因の一つだろう。

まあ、それはさておき。

どうしよう？

路地裏が赤かった。

それに驚いて足を踏み込んだ路地裏は紅く染まってて、その中心に黒い髪の女がいた。

荒い呼吸に、寒いなか額に浮かぶ汗。

真っ青な顔に、閉ざされた瞳。

医者じゃなくても、危険な状況だと一目で分かる。

そんな状態でも壁に寄りかかっている女は、綺麗だった。

昔、何度か見た事があるような気がする。

記憶を辿ると目の前の女に似たうっすらとした面影が思い浮かぶのだが、

今はそんな悠長な事をしている場合じゃない。

目の色を見れば完璧に分かるんだろうが、この状況でそんなことしたら俺は鬼だ。

上着を裂いて傷口に応急処置をする。

上着がもつたいたないと頭に声がよぎったがそんなことよりも人命救助だ。

簡単な処置をした後、服が汚れるのも構わず抱き上げる。抱き上げた女からは濃厚な血の香りがした。

「つう……、」

僅かなうめき声上がる。

抱き上げて初めて分かる事だが、相当体温が低い。早く医者に見せないと危険だ。

そして何よりも、たぶん、この女は、キャプテンの…

頭によぎる記憶をたどるのを後回しにする。

そして出来るだけ、傷口を揺らしたり圧迫しない様にして雪の中を駆けだした。

目的地は、キャプテンの家。

俺の知りうる限りで凄腕の医者の家だ。

S I D E : ペンギン

キヤスケットが、女を連れて帰って来た。

死にかけの、血まみれの女。

横顔しか見えていないけれど、その顔は、あいつの面影が残っている。

多分、ジェラキユール・ロンディーネだ。

下町でぎりぎり合法の何でも屋をやっていたジェラキユールの家の子ども。

“飛劍”と呼ばれる有名な賞金稼ぎ。

武術の盛んなこの島で最年少での剣術の抜きん出た才能を持っていて、

100年に1度の天才だの鬼才だの剣聖だの色々言われてた。

本人はどこ吹く風と流していたけれど、凄まじい才能の持ち主と噂されていた。

そのせいか、家系のせいか、周りから色眼鏡で見られてた。

口を一文字に結んで、常に仏頂面。

危険な仕事をしてきたから周りも天才と見なしていたのと同じくらい腫れもの扱いされていたのだから、仕方ないのかも知れない。

それ以前に、他人の事が嫌いの様だった。

殆ど誰も傍に寄せ付けなかった。

彼女の名前や親を目当てに近づいてくる奴らが多かった。

それ以外の奴らもいた。

それでも、自分の傍に人間を近づけるのをよしとしなかった。

あの、鷹の様な金の瞳で氷の様に凍えるような一瞥で終わらせた。

そんな人形のように冷たい人間だと思った。

けど、違う事を知った。

普通に無邪気に笑ったのを見た。

それはローの横で、普通に、綺麗に。

人形じゃなくて、人間にしかできない顔だった。

それからだ。

あいつが普通の人間に見えた。

気付かれない様に観察をしてみた。

そしたら、不器用なだけなんだこいつってことに気付いた。

それから、こいつは覚えてないと思うけど、何度か話したときがある。

でも、こいつは、大人はさておき数少ない同年代の中でローしか見ていない。

それ以外の人間なんて歯牙にもかけていない。

そんな、冷たいくらい線を引く人間だった。

俺は心の隅で、こいつは殺しても死なないと思っていた。

そのせいか一人でも立っていける強い奴が血塗れな姿で死にかけの体をなしていたのには、ひどく驚いた。それと同時に、港に入ってきたそうになった海賊を潰したのはこいつだと確信をした。

そして、応急手当の痕があるから、最初から怪我をしていたんだろうと推測する。

やっぱ、馬鹿だ。お前は故郷を守る為に剣を使っただらうけど、ローや俺達や大人だっているんだから、怪我人なら怪我人らしくしとけ、馬鹿。

俺やキャスだってローに言われて医学をかじってるから分かる。

何の反論もするな、重傷だ。

医者見習いとして本来なら何か苦言を呈すようだろうが、

それは、

俺の横で大魔神の様に黒いナニ力を放出させてるローに任せる。

…あー、ドンマイ。

骨は拾ってやる。

誰よりも医者なローを怒らせたお前が悪い。

二十八話「死にかけの私と彼の仲間について」(後書き)

応援ありがとうございます。

次回も更新頑張ります。

二十九話　私と俺とこわいことについて（前書き）

ローがでてくると、なんだか、なあ…という感じになります。

お互いに大好き（無意識な分も含む）だからかな…。

でも、なんか最後謎なシリアスになっています。

それでもいいかたはどうぞ。

二十九話　私と俺とこわいことについて

SIDE：ロンディーネ

・・・寒く、ない。

そう思って、重い瞼を押し上げた先の景色は、どこか見なれた天井だった。

シユンシユンと音をたてる薬缶やかんと音を立てて爆ぜる暖炉。

柔らかい白の壁におちついたベージュのカーテンに清潔な白のシーツに衣服。

どうやら先生の病院の部屋だということを理解する。

地味に伝わる鈍痛。

ノロノロと手を動かして頬に触れると、ガーゼに指が触れた。

やはり顔にも怪我をしていたようだ。

むくりと体を起こす。

・・・激痛に襲われた。

「ッー」

痛い。

物凄く、痛い。

笑えないぐらいに、痛い。

それでも耐えきれない痛みじゃない。

歯を食いしばる。

シーツを包帯に巻かれた腕でギュッと一回握りしめた後、

ゆっくりと床に足を降ろして立ち上がる。

父さんから初めに教わったのは、顔色を隠す事。
鉄面皮な仏頂面に磨きがかかった。

ポーカーフェイスもお手の物だ。

父さんや私の様に一人で海を旅する者や戦う人間にとって、
顔色を他人に読まれるのは不都合きまわりない。

達人ともなると、顔色だけで体調やコンディション。

怪我の有無が分かるらしい。

私の様に肌の色が白い人間だと、血が足りなくなったり、

体調が荒れると唇の色が変わって体調が一目で伝わりやすいのなら
尚の事。

だから、自分が負けないように不利にならない様に徹底的に仕込ま
れた。

もはや血肉のように当たり前に根付いた癖。

それに、私は女だから淡い口紅やうつすらと色のついたリップでこ
まかせる。

演技力にだって自信はあった。

それなのに、

悲しいかな目の前の幼なじみのローもとい大魔神様にはこの癖のよ
うに根付いた私の様子を見抜かれ、その拳句に彼の怒りに油を思い
きりぶち込んだような有り様になったのである。

体調に関係なく冷や汗が一筋背中に流れた。

寒さと関係なく背筋が冷える。

この空間は非常に緊迫した空気があふれている。

空気が半端なく重苦しい。

ついでにローの後ろにいた帽子を被った二人組はさっさと逃亡した。
正直、羨ましい。

私も一緒に連れてけ！って感じだった。

ローの冷たく光る青銀色の瞳が真っ直ぐに射抜く。
形のいい口元が動いた。

「お前なあ、馬鹿だろ……」

カチンとした。

いや、確かに私は無理したよ。しましたよ。

しかし、それを押し通したのは故郷を守りたいのと君にすぐに会い
たくなつたからで。

君と私って実にひっそり故郷好きだからってのもありましたよ。

君は医者だから心配かけたのも何となしに理解してますよ。

それでも人の話も聞かずに開口一番がそれか？

もしかして君は私に喧嘩を売ってるのか？

すっごいイラつくんだけど。

「私が馬鹿だとしても、君には関係ないだろ……」

フツと鼻で笑うおまけ付き。

さらに空間が凍りついていく。

テメエぶつ殺したるか、そんな物騒な言葉がローの背後に見える。

それに私は僅かに口角をあげることで答えた。

やってみろ、バーカ。

静かに、でも確かにぶつかりあう視線。
ゴングが鳴って、火花が散った。

「フフフフフ」

「ハハハハハ」

遠くで吹雪の音が聞こえた。

S I D E : 口

血塗れでぐったりとしたその姿を見て、心臓が止まりそうになった。
こんなありきたりな表現だが心臓がわしづかみにされた気分だった。

ヒュツと喉が乾いた音を立てて鳴った。

手が震えそうになった。

全部抑え込んだ。

お前以上に重症な患者だって受け持った事があるのに、それよりも、
緊張した。

と、いうよりも怖かったのかもしれない。

もし、失敗したら・・・、そんな考えが頭を回り続けた。

手術というか処置は完了。

一番深かった腹部の傷の縫合も上手くいった。

輸血する血液も足りた。

二月に一度、半ば定期的に献血するような地域で良かったと思う。

寝顔も運び込まれた時の紙の様な白さよりもましな色になった。
峠は越えた。

あとは目を覚ますのを待つだけ。

一秒が一分に、一分が一時間にも感じられるような狂った時間。
そんな時に限って親父もお袋もない。

お袋は子供を身ごもってる。

親父は予定日に近いからと俺に仕事を任せて母に付き添っている。

いてくれたら、少しは楽だったのかもしれない。

いや、こんな姿を見られるのはごめんだ。

「ディーネ、」

そつと頬に触れる。

・・・柔らかい。

肌が白いが故に一瞥するだけで分かる顔色の悪さと、

切れた唇や頬の傷の赤やうつすらと青くなつた目の周りの怪我が痛々しい。

頭はぶつけてない様だから、内出血や失明の確率は少ないだろう。
それが、今、あちこち怪我をしているディーネの不幸中の幸いか。

ディーネは今日、港に入る前の海賊を何隻も沈めたらしい。

それはいろんな人員を集め、船をつくる為に

俺らが賞金稼ぎまがいの事をしていて倒してた海賊の別部隊で、
俺らが僅かの間だが街をあけている事を知つての犯行だった。

だから、俺らの責任だつてあるだろう。

だがそれを、何故怪我をしているお前がするんだろう。

怪我をしてるんなら他の奴に、それこそ街の奴だの・・・俺らがいるのに。

どうしてお前は、一人で　　するんだろつ。

俺は、そんなに、頼りないのだから、

俺じゃ、お前を守れないのか、

俺は、お前を守りたいのに。

というが無茶し過ぎなんだ、馬鹿。

心配かけるな忌々しい。

普通に腹が立った。

言葉にしたらどうしようも無くなる感情という代物ものが俺の中にも存在したらしい。

何で、周りを頼らない。

(そんなに信じられないのか)

何で、一人で背負い込もうとする。

(信じるのが怖いのか)

何で、どうして、俺を頼ってくれない。

(俺は、昔のままじゃないのに)

それなのに。

どうせ、お前の答えは決まってる。

(昔から何一つ変わっちゃいないのだから)

お前は笑いながら、だって大切だから。

そう、言うんだろつ。

自分が傷ついても大切なものが無事ならそれでいい。

そんな、どこか歪んだ、愛。

そう、それは確かに大切なのだろう。

けどな、お前と同じような事を考えている奴だっ
て此処に一人いるんだ。

だから、俺はお前の事を許さない。

俺はお前がずっと好きで。

守りたい者の中にお前だっているのだから。

だから、お前が傷だらけなのも死にかけなのも絶対に許さない。
勝手に怪我して死にかけてんじゃねえよ。

アア、畜生。

さっさと気付きやがれ。

俺はどうしようもないくらい、お前のが大切なんだ。

覚悟しろ。

もう、絶対に逃がさない。

見張ってないとお前はどこかで野たれ死んでそんな怖さがあるから。
目のつく所に居てもらう。

二度と手を離さないと決めたのだから。

ただ、覚悟しておけ。

俺は、欲しいモノは絶対に手に入れる。

簡単に逃げられると思うなよ。

SIDE：ロンディーネ

殴り合いになりかねない雰囲気の中、お互いが幼馴染故の容赦ない口論が続く。
それを打ち止めたのは、ローだった。

「…そうか。此処まで言っても判らないのなら、いつそ……」

何をする気なんだろう？

そんな疑問が頭に浮かんだ。

ローらしくもない。

しかし、私が余裕を保てたのは此処までだった。

「あ……」

ローが動いた。

その瞬間、私とローの間にあつた距離が消えた。

いきなり距離を詰めたローに驚き、意志に反して体が反射的に後ずさる。

一歩下がると壁に背が当たり、足が止まる。

更に追い討ちをかけるように傷ついた肩を掴まれ、壁にガンっと押し付けられた。

痛みは殆ど無かったのに私の思考回路は真っ白になっていた。

ローが私にした行為よりもローに怯えた自分に動揺したからだ。

思わず目を見開く。

キスもできそうな、吐息が混じり合う距離に私の好きな青銀の瞳があつた。

自分が息を呑む音が静かな部屋の中でやけに大きく聞こえた。

心臓の音さえ聞こえそうな静寂の中で、

「男つてのは、こういうことを出来る奴がいて、」

感情のこもらない平坦な声が耳朶を打つ。

「特に俺は戸惑いを覚えずにこんな真似が簡単に出来る男なんだが、知ってたか？」

耳に届いたのは、聞いたことの無い低い声だった。

ゾツとした。

掴まれた肩は怪我をしてる方を掴まれているせいかわりに痛みを感じることが、

その感覚でローは殆ど力を入れていないのが判る。

どうしようもなく優しく柔らかい手つきで、

・・・簡単に振りほどけるはずなのに、体が動かない。

腕や体が、私とは別の生命体になったんじゃないかと思うぐらいで、鉛を呑み込んだように体が重かった。

早く手をどうにか振りほどかないといけないのに。

それでも体は動かない。

頭も真面目に動かない。

私の呆然と見開いた目がただただ、ローの青銀の瞳を凝視しているだけで、

喉は張り付き、悲鳴はおろか声を上げることすら出来なかった。

誰よりも人目を引く青は、ただ、冷たく。

ゾツとするような光を瞳に写し込んでいた。

だれだ、これ？

まともにも働きたした思考が、疑問を飛ばす。
ゾツとする心。
強くなる鼓動。
研ぎ澄まされていく感覚。
私の目の前に居るのは君なのに。
ロー、なのに。

なんで、こんなに怖いんだ。

こんな、ローを私は知らない。
いつの間にか抜かされた身長も、
声変わりして低くなった声も、
ごつごつとした手も、
細身ながらも男らしくなった姿もですら、知らない。
こんな冷たい瞳だって見た事がない。

私は、なにも知らない。
昔のローしか私は知らない。
その事実には愕然として、忘却自失な状況に陥り掛けていた私を見て、
ふと、ローがクスッと笑った。
手が肩から外される。
重苦しく、冷たかった空気が弛緩する。
息が、ようやく出来たような気がした。

「なあ、怖いだろ。…お前は強いけど、男を甘く見過ぎだ」
頬に手が触れた。

いたわる様に頬を大きくて温かい男の手が流れる。
嘘の様に冷たさが消えて、私に触れている手も声も、昔と同じなの
に。

それなのに、私の喉は声を上手く発することが出来なかった。

「俺は、お前には優しいからな。ディーネが怖がることと嫌な事は
しないが。」

世の中の男は此処で退くほど優しくないし甘くねえんだ。

「こんな思いを二度としたくねえなら、心に留め置いておけ」

何を答えたのか、まともな返事をしたのかでさえ、よく分からない。
ただ、何故かローの青い目に目を奪われたのだけは覚えている。

どこかやはり重苦しい空気が流れる。

そんな、中。

パタンとドアを閉める音が、聞こえた。

二十九話　私と俺とこわいことについて　（後書き）

いつも、応援ありがとうございます。
これからも頑張ります。

三十話〜私がローに混乱した事について〜（前書き）

小説全体 PV 837 / 700アクセス

ユニーク 108 / 599人

達成しました!!

応援ありがとうございます!!

これからも頑張ります!!

三十話　私がローに混乱した事について

SIDE：ロンディーネ

雪を踏んで歩く。

足元からはサクリという軽やかな音がする。

この音は変わらない。

それに喉の奥で笑いながら、傷口を痛めない様にゆっくりと歩を進めた。

子供の時分は時間がかかった道のりも今なら半分以下だ。

そういうので、大人になったのだと自覚する。

大人になって変わったことも変わらなかったこともたくさんある。どちらでもかわらないかもしれないが。

357

目的地までの道のりの途中で白百合の花束を購入する。

先生の診療所から直接ぬけだして来て、怪我まみれな拳句に

目に見える頬にまで怪我をしている為か店員から怪訝な目で見られたが気にしない。

それに多めに料金を置いてきたので、文句は言わせない。

吐く息まで凍りつきそうな風にコートと解かれた髪がひらりと宙を泳ぐ。

髪やコートが風邪で弄ばれるのを感じながらも放っておく。

その風に一度目を瞑る。

そして、目を開く。

歩みを止めずに歩き続ける。

傷による痛みと発熱に足が重くなり、
足を凍っている雪に取られそうになりながらも足を止めずに歩く。
歩く、歩く、歩く。

自分のが血まみれだったためにちょっと拝借してきたサイズの合わ
ないブーツの指先が悴んできた所で、目的地にたどり着いた。

怪我に骨が軋み、吐息が零れ落ちる。

脂汗がポトリと背筋に流れた。

歯を食いしばる。

背筋を伸ばす。

行儀の悪い、みっともない真似はこの前では許せない。

例えそれが自分だとしてもこの人の前でそんな事をするなんてもっ
てのほかだ。

自分の自己満足だとしても、これは譲れない。

白くつもり、染め上げられたソレ。

昔の記憶と寸分たりとて変わらない、ソレ。

積もった雪を、素手で取り除く。

指先のかじかんでいたが気にせず構わず実行に移した。

雪を払ったら、白の石が現れた。

そこに刻まれた文字が目に入ってくる。

【ジュラキユール
Dracule・Mariaマリア】

花をたむけた。

「お久しぶりです…、母さん」

墓石は何も語らない。
けど、此処に気が付いたら足が向かっていた。

正直、頭の中はごちゃごちゃで分かんない事だらけで疲れた。
でもあの目が頭から離れない。

あの声も離れてくれない。

その後、考えても分からなくて衝動的に飛び出した。

昔と違う。

それだけなのに、こんなに胸がもやもやする。

「どうしたらいいんでしょう、か？」

S I D E : ロ ー

(やべえ…!)

じりじりと耳や頬に血が集まり体温が上がっていくのが分かる。
自分の部屋のドアを閉め、ずるずるとそのまま床に座り込んだ。
いくら清潔にしているからといって医者が板張りの床に座るのはいかになものか。

しかし、何事が言われても今は少しばかり放っておいて欲しい。

(最後に、なんであんな顔を……)

伏し目がちな瞳。

口から零した言葉。

こちらに伸ばされかけた手。

華奢な体を思いきり抱きしめたい衝動にかられた。

(あの目は卑怯だろ)

金の瞳は困惑と不安、驚愕に彩られていた。
が、僅かに目に感情が見えた。
それはそれは綺麗なモノで。

抱きしめたいと思った。

自惚れてもいいかと言いつつになった。
好きだと言つてしまいつつになった。

(…あの目は卑怯だ。引き込まれる)

何時もは凜とした金の瞳が、俺を、見て
俺に、縋る様に俺を見つめてきて、それに引き込まれつつになった。

こんなに悩むのは柄じゃない。

それでも、傷つけないと思つし、守りたいと思つ。
逆に傷つけない、泣かせたいと思つ。

矛盾だらけだ。

冷気が床に触れた面からじわりじわりと伝つて来る。

それに体を蝕まれながら、俺は、髪をかきあげ

(絶対寝れねエ…)

心地よい睡眠を諦めて瞼を閉ざした。

そして朝、適当に胃に優しいスープを作る。

医療用の固形スープの素に改良を加えた一品だ。

お盆にスープと水の入った瓶とコップをともに乗つける。
靴音を廊下に響かせ、病室の扉を開ける。

「ディーネ、遅くなって悪いが飯を……」

いねえんだけど。

もめけの殻になったベット。

無くなってるディーネの服とコート（寝ていたのだから洗って置いておいた）。

サイドテーブルには、謝罪の書かれている小さなメモ。

一通りメモに目を通した後、ぐしゃりと音を立てて手の中の紙を潰す。

よし、ぶん殴ろう。

むしろ、ベットに括りつけてやる。

いくら混乱してたからってブーツをパクって、逃亡する奴がいるか
馬鹿！

だいたいお前は重症の怪我人だろうが！？

玄関まで行き、壁にかけてあったコートを乱暴にひったくり、袖を通す。

帽子をかぶり、手袋を懐に突っ込んだ。

ドアを開けて足を踏み出す。

雪がちらほらと降り始めていた。

冷気が肌をさす。

肺まで凍るような空気の中、足をとある方向に向ける。

あいつがいる所なんてとうの昔に知っている。
変な所であいつは変わっちゃいないのだ。

S I D E : ロンディーネ

寒い。

そんな事を考えながら、母の墓に背中を向けた。

此処に来た目的は果たしたのだから、さっさと本命の目的地に向かおう。

あそこなら誰も来ないし、なんだって静かに落ち着いて考えられる。

あいつは、来てくれるだろうか？

そんな、考えも横切ったけど。

それに首を振る。

あいつのせいで、こんなに胸がざわついて考えているんじゃないか。

元凶に来てもらってどうするんだと自分でも呆れるけど、

何となく、来て欲しいと思っっている私がいいた。

僅かに口角を緩め苦笑を一つ。

今度こそ、立ち止まらずにゆっくりと移動を始めた。

後ろは、もう振り返らなかつた。

三十話〜私がローに混乱した事について〜（後書き）

さっさとくつつかないかなこいつら、と私は思います。
気付けバカ！！って感じですね。

後、墓参りに行ったのは、どうにかならないかなあとというディーネの希望を籠めた何か。次に彼女が向かったのは…。
次回を期待して下さい！！

あと、ローとディーネはラブラブですが一歩間違えたらヤンデレになることに気付きました。最近病んでるっばい考えというかネタが頭に浮かんできます。
どうでしょう？

結構更新に波がありますがこれからも頑張ります。

三十一話、第三者から見れば疑問が浮かぶ二人について、（前書き）

久しぶりに投稿です。

これからも頑張りますが受験生なので更新遅れ気味になると思います。

そして似非シリアスです。

三十一話 第三者から見れば疑問が浮かぶ二人について

SIDE：ロンディーネ

私とローは大分昔から付き合いのある幼馴染だ。

関係を聞かれるのならば、大体こう答える。

本当は幼馴染で私のヒーローみたいなやつ。

恥ずかしいから絶対に本人の前では言わないと固く誓っているが、

あいつは私のヒーローなのだ。

何時もは放っておいてくれて、本気でヤバい時に助けてくれる。

私のなかのヒーロー像は奴であると言っても過言ではない。

あいつは私の事を自分より先に立っていると思っっているようだがそれは違う。

本当は逆だ。逆なのだ。

私はあいつの後ろに居て、ずっとあの背中を見ていた。

あの背中があれば安心できて、あいつの隣に居るのが好きで、

いつだって膝をつくことなく真っ直ぐに前を向く強さにあこがれた。

あいつはいつもどうしてか、人が一番辛い時に絶対に手を差し伸べてくれる。

そういうような奴だった。

そう、だったのだ。

そういう感情を持っている相手だったのだ。

凄く大切に守りたくて大事な奴なのに、今は分からない。

あの時の目の色や触れた手の感触に思考回路がどこかしら可笑しくなったみたいだ。

何で、どうして、あんなことしたのか、分からない。

あの冷たい青が目から離れない。

背筋がゾクリとした。

怖いのに目が離せない。

それにビビって驚いた癖に他の人間にそんな真似をしたことがあるのがムカつく。

そんな矛盾する思考。

何度考えても幾度思考回路を変えても、そう答えが出る。

はあと溜息をついた。

私って馬鹿なんだろうか。

こんなんじゃ、私がローの好きみたいじゃないか。馬鹿馬鹿しい。

幼馴染で私のヒーローで相棒。

それだけなんだ。

さくりという雪を踏み分ける足音に意識が思考の海から引き上げられる。

髪や睫毛、肩にうつすらと積もった雪も払わずに、その足音の持ち主に向かってゆっくりと振り向いた。

青銀が冷ややかな意志を投げ掛ける。

沈黙が間に漂った。

雪が深々と積もる。

静寂した空気のなか、彼が口を開いた。

「・・・阿保」

医者としてか幼馴染としてか両方が、酷く真剣で心配をかけた重み

のある言葉で。

「うん、そうだね」

頷くしかなかった。

・・・心配をかけたのも無茶をしたのも私なんだから。

ローは医者としてそう言っているんだから。

全体的に私が悪い。

「馬鹿が、心配させんな阿呆。

さつさと帰るぞ」

不機嫌そうな声色。

しかし、しっかりと掴まれた手。

昔よりも男らしくこつこつこつした手に包まれた。

温かくて、酷く優しい。

敵わないなあと思う。

変わったように見えて変わっていないんじゃないだろうか、こいつ。

何時だって私がどうしようもなく行き詰ったり、

耐えきれなくなると絶対に助けに来てくれる。

こいつの本質はあまり変わらないものなのかもしれない。

とても複雑に分かりにくくなっていくけど。

私にはそれぐらいが調度いい。

どうしようもなく優しく、甘えさせてくれる、頼れる奴。

そんなキミ。

というか、キミって

「…絶対に迎えに来てくれるよね」

ぼそりと呟いた言葉は風に吹かれて消えた。

S I D E : 口

目的の女は、予想した所にいた。
昔の俺らの隠れ家。

二人で作った小さな秘密基地の前に佇んでいた。

どれほど長くその場に佇んでいたのかは知らないが、男より全体的に華奢で女らしい丸みを帯びた体や帽子をかぶっていない頭に白い雪がうつすらと降り積もっている。

雪を踏み分ける音で気付いたのか。
こちらをゆっくりと振り向く。

金の目が俺を写した。

沈黙が辺りを支配する。
深々と雪だけが降っていた。

舌打ちをしたくなる。

なんて顔をしゃがるんだ、と思う。
何時もは後ろを振り返りもせずの前だけを凜と見つめている癖に、
迷子みたいな不安げな顔をしゃがって。

卑怯だ。
ずるい。

言おうとしていた言葉が喉に張り付いて伝えられない。
ガリツと奥歯が軋む程、歯を食いしばり、拳を握りしめる。
怒鳴ってやろうと思ったのにその感情はすぐに冷えていく。

理由は分かっている。

ディーネだ。

昔からこいつは自分が分からないものに酷い恐怖心を抱く、
今の状況がまさにそれだ。

俺にされたことに焦って、悩んで、迷走してる。

それに厭ってる訳でも気味が悪い訳でもない。
ただ、まだ気付いていないだけ。

それをお前は俺がした事や俺の事、嫌じゃないし、否定しないのか。
無意識に、自分では気付いていない癖に俺のした行為を、
それで伝わったのか分からないが多少の想いをうけとめている。

ずるいと思う。

この女は一度懐に入れた奴に優しい。

それこそ優し過ぎる位に、甘くて優しくくて残酷だ。

だからこそ、この女は嫌いにならせてくれない。

それが辛くてもこの女の事を知っていれば、諦めることも手を離す
事なんて出来ない。

だから、ずるい。

ずるすぎると思う。

また待つようだ。

お前が気付くまで。

今言ってもまだ気付かないだろうし、根比べじゃねエか。

・・・待つのはなれてるし、逃がす気はこれっぽちもないけどな。

「・・・阿保」

ぽつんと言葉を落せば

「うん、そうだね」

自分でも分かっているからかこくりと頷いた。

…こんなにしおらしいと調子が狂う。

「馬鹿が、心配させんな阿呆。」

さつさと帰るぞ」

咄嗟に出た声は、昔と同じ言葉だった。

SIDE：ロンディーネ

歩き始めてすぐに背中に背負われた。

危なっかしいと言われて、問答無用と言わんばかりに。

伝わりにくいけど、怪我を心配しての事みたいだ。

キミの好意は少し分かりにくい。

けど、凄く優しいことだと思う。

背負ってくれたのは嬉しいけど、キミの体温で火傷をしそうだ。

そう、呟くと

「お前が冷たすぎるんだ」とすげなく返された。

そんな私は方にひっかけるようにローのコートを、
頭には帽子を、かじかんだ手には男物の手袋を着せられている。
後ろから見たら変な光景だろうなあ……。

それでも、ローは私を背負っていく。
傷が痛まない様にゆっくりとそれでいて酷く優しく。

(……キミは何も言わないね)

それに甘えて気付かないふりしてる私が言う事じゃないけど。

「……ロー、もう少しだけ」

待っててよ、その言葉は表に出せなかったけれど通じたらしい。

「ああ」

ローの首に回した腕に力を入れて、顔を背中に埋めた。

キミが優しくすぎて、泣きそうだ。

優しくすぎてずるい。

待つ気はあるけど、逃がす気なんてない癖に

じわりと涙腺が緩んだ。

三十一話、第三者から見れば疑問が浮かぶ二人について、（後書き）

何故くっ付かないこの二人。

そして、お互いを知りつくしてるからこんな感じになります。

三十二話 自覚した感情と崩れゆく関係について (前書き)

- 一人がようやく少しずつ自覚し、
- 一人が我慢をやめ始めた話。

三十二話 自覚した感情と崩れゆく関係について

SIDE：ロンディーネ

ジェラキユール・ロンディーネとトラファルガー・ローは幼馴染である。

基本的に一番オーソドックスな説明を求められたら私はこう説明をする。

一言ですむし、言い切れれば相手もそれ以上突っ込んで来ないから。そんな理由もうつすらぼんやりある。

ジェラキユール・ロンディーネとトラファルガー・ローの簡易説明はこれなのだ。

私達は二人とも長々と他人に自分や自分の身内について語るのはいだし、面倒な事になるのが面倒臭い、それなので説明を一文で済ませようとする。

それゆえに、これが一番簡単な説明方法なのだ。

これだけ言い切ると相手は踏み込んで来られない素敵な言葉と説明だ。

相手は大体二の句が告げられずに背中を向ける羽目になる。

しかし、あえて詳しく私とローの関係を説明するとなれば、やはり幼馴染だ。

それが基本的な私達の関係で脚色もない、変わりようもない事実である。

そもそも私とローは幼馴染で親友で相棒でもあって、悪友だったり、お互いに本音を言い合える仲であったり、密かに私のヒーローだと

思っていたり、絶対に横に立ちたい相手、絶対に負けたくない置いてかれない相手（他にもいろいろあるが割愛する）だったりもする。

そうあくまで私とローの間柄は友情とか親愛とかで結ばれている代物なのである。

多分、そうなのだ。

というか、そうでないと私が困る。

・・・どうしたらいいのかわからなくなってしまう。

だから、お互いに色恋沙汰関係は慎重に避けていた。

お互い大きくなる何かを無視してた。

それなのに10何年の付き合いに今更そんな色恋が絡んできた。

一生友達だと思ってたし、実際にそんな関係だったのに。

どうしてどこで何がこうなって

何故に、こうなった。

少し前からローの様子が変わってた。

私だってそれぐらいは気付く。

しかし、まだ大丈夫だと思ってた。

まだこの関係は崩れないと思っていた。

しかし、私が思ってたのは裏切られた。

その結果がこれだ。

じわりじわりと幅は狭まり、逃がす気はないと言わんばかりに道が塞がれていく。

待つ気があると抜かした癖に逃がす気はないのが見え見えだ。

もう幾らあがいても元の幼馴染という優しくて穏やかな関係にはも

どれない。

それなのに。あいつ、何のためらいもなく賽を振りやがった。下手すれば関係どころか色々と修復不可能になるのを分かっていた癖に。

自分でも予想だにしていなかった事を平然とやられたのに。それなのに、こんな事されても許せる自分が怖い。

その感情を若干自覚した私はどうすればいいんだろうか。…こついつ時にどうすればいいかが分からない自分が嫌いだ。

待つという選択肢を提示してくれた男の言に乗って、私は故郷から撤退した。

…もう、捕まっているようなものだけだ。

だって、もう あいつの事を考えるとそれだけで胸が痛い。

「やられた……」

北の海特有の凍えるような風を頬こゝろに受けながら、思わず呻いた。あいつ、前からずっと計算してたんだ。

S I D E : ロ ー

ディーネが此処から旅立って行った。

最後に話した時に見たあの表情かおは忘れられそうにない。凄気せいきだるげにでも視線は真っ直ぐに俺を射抜いて来て、口を開いた。

「 確信犯」

それだけぼつりと呟いて振り返らずに船に飛び込んだ、あいつ。
その後ろ姿が水平線に消えるまで、じっと見送った。

それにしても気付いてんのか、あいつ。

それは少しでも俺の感情を自覚したってことなんだが。

待つって言う選択肢を自分で選んだんだぜ、あいつ。

隠れてるし、分かりにくいし、逃がす気も無かったけど、一応他の
選択肢もあったんだ。

無意識なうちに自分で待つて貰うって選択肢を掴んだんだ。

笑えてくる。

あいつも昔と変わって来てるってことだ。

変わらないと思っていた関係がどうやら少しずつ変わって来たって
ことだ。

あいつはそれに気づいたんだろう。

そのせいで一回、凄く冷たい目で見られた。

安定した関係はゆっくりと崩れていく。

というか、俺が引き金を引いたという方が正しいんだが…

あいつも少し前から、変わっていったし、自分で色恋沙汰は苦手
だとか言っていたくせにそれを知らず知らずに持ち込んでたしな。

俺が踏み込もうと踏み込むまいと、この安定した関係は崩れていた
だろうし。

あれだ、時間の問題だったんだ。

大体、年頃の男女がいつまでもこんな真つ当な関係であったことの方が珍しい。

俺だって我慢してたんだ。

あいつはそれに気付いていなかったんだ。

それなのに。

少しだけ、無自覚に俺の事を受け入れてたんだ。

それで、一瞬理性がプツリ切れた。

あいつが少し気付いただけで10年以上続く関係が破壊されていくとは思わなかったけど。

…俺もどうやらまだガキだったらしい。

「待つって言ったんだがな……」

ヤバいかもしれない。

次にあいつが帰って来たら、抱きしめて離さないかもしれない。

ヤバい。

あいつの事がすっげえ欲しい。

思わず、そう思った。

俺は確信犯だったけど、あいつの方が無意識な分、たちが悪い。溜息について見上げた空は吸い込まれるような青色をしていた。

三十二話 自覚した感情と崩れゆく関係について (後書き)

これからも頑張ります。

番外編EF〈こんな二人になるのかも知れない〉（前書き）

お前、前話のシリーズはどこ行った！と怒られるぐらい、甘いです。いちやついてます。しかも、付き合い始めた二人の通常運転がこれです。

時間軸は今の本編より未来（原作軸）です。

付き合い始めたらあるかもしれないこんなこと。

1（ロンディーネ視点） 2（ロー視点） 3の順番（ロンディーネ視点）。

ちよっと、きわどい表現があります！

苦手な人は気をつけてください。

番外編IF〈こんな二人になるのかも知れない〉

1．ある昼下がり

白い蛍光灯が光る白の天井を視界におさめながら、大きいソファーに横たわる。

行儀が悪いと言われそうな体勢だが、今は別にこれでいい。

まあ、普段の私ならしない体勢だろう。

だが、今はこれでいいのだ。

とある男の腕が体に纏わりついている場合なんかは、特に。

私はソファーに寝そべっていて何もできないがこいつと一緒に居る事は出来る。

それは地味に素晴らしいことだ。

ゆったりしている私の手は人の上に乗った短髪の男の頭に触れていて。

時折、そっと手でくしゃりと髪をなでる。

実はキミの髪質が柔らかいのだと知ったのは何時だったか……。

感じるのはお腹を中心に感じる温もりと、首筋をかすめる髪の感触、ある程度加減された重み、仰向けの身体に回される力強い腕、鼻孔をくすぐる医薬品の匂い。

こつこつのを幸せというのかもしれない。

「ねえ、ロー」

「なんだ、ディーネ…？」

「ちゅー、したい」

げほりと噎せる音がした。

驚いて噎せたローの顔は絶対に他人の前では見せない顔だ。それにゆるりと口角を上げる。

やばい、かわいいんだけど

「たまにはいいよね？」

「ちよ、まで、までまで！！」

焦るローのおでこにちゅつと口付けた。それに驚いたのか一旦停止したローの顎に手をやり、顔を持ち上げた。

わざと、音を立ててなんども唇以外の個所に口づけを落とす。最後に口の横、ギリギリ唇に当たらない個所に口づけをした。そろりと顔を離れた後、見せつける様にぺろりと自分の唇をなめる。ローの喉がゴクリツとなるのが聞こえた。それに耳元に唇を近づけ、囁くように言う。

「ねえ、ロー……」

ちゅー、したいな

最後の音を紡ぐ前に唇ごと噛みつくように口付けられた。痛いと言う前に文句は言葉ごと飲みこまれた。

あーあ、今日はちゅーしただけだったのになぁ・・・
でも、それもいいかも。
そんなことを思える自分はローに大概甘い。

別に、私はこういうローも嫌いじゃないんだ。

深くなる口付けに答える様に、ローの首に腕をからめた。
ああ、そういえば。

愛してるって言い損ねたな。

そんなことが頭に浮かんだ。

2・愛する人

ちゅという音とともに柔らかい感触が落ちてくる。

わざと、音を立ててなんども口付ける癖に唇には触れやしない。

雨だれの様に幾度も落とされた口付けは

最後に口の横、ギリギリ唇に当たらない個所に落とされた。

まじかに見える長い睫毛から覗く金の瞳がきらりと光る。

ディーネがそろりと顔を離した後、

俺に見せつける様にぺろりと赤い舌で唇をなめるのに、ゾクリとした。
た。

それに気をよくしたのかディーネが俺の耳元に唇を近づけ、囁く。

やべえ

その時、頭を支配したのはそれだった。

甘い香りが鼻孔を攪り、当たっている胸の柔らかさが心地よい。

「ろ、」

ああ！もうそんな声だすんじゃないよ！！
俺の理性、どこまで削るつもりだ！

「ちゅー、したいな」

ブチッと、何かがキレる音がした。
何が起きても知るものか、こいつが悪い。
俺を煽ったこいつが悪い。

ディーネの艶やかな赤の唇に噛みつくように口付ける。
ぱらりとディーネの夜色の黒髪がソファーに広がった。
俺の首に細い腕が絡みつく。
それに答える様に深くしてやると、

「んっ・・・」

高い声をディーネがもらす。
それに気をよくして、もっとう深く口付けた。
かわいい。
綺麗でかわいいとか最強じゃねーか。

しばらく口付けを繰り返していたがディーネが苦しそうな顔をしたので、

一旦口付けをやめた。銀色の糸が引かれる。
涙で潤った金の瞳が俺を見つめてくる。
そんな顔もかわいい。
俺も大概末期だな。

「…ディーネ」

金の瞳が俺を見て、

「愛してる」

返事も聞かずに口付けた。

3. こういうタイミングが悪い奴っているよね！

「腰が痛い」

ぶつちやけると喉も体のあっちこっちも痛い。

風呂に入れてくれたから綺麗なのが唯一の救いなのかもしれない。
着せられたシャツから覗く体はあちこち赤い痕やら噛み痕がつけられている。

それのために息が出そうになった。

「……すまん」

「まあ、私が煽ったようなもんだからいい」

ギシギシと骨が軋む。

こんな地味な痛みは成長痛以来だ。

ベットに横たわりながら、ふうと薄荷の煙草を燻らす。

それに、

「……別に嫌じゃ無かったし」

ギシリつとベットのスプリングが軋む。
視線を上げるとローが私の目の前にいた。

「お前……これ以上、煽るな。」

頼むから

別にこれくらい言ってもいいんじゃないかと思っただけ、結局、口をつぐんだ。

薄荷の煙草を煙草盆に押し付けた後、口を開く。

「別に、愛してるからいいんじゃない？」

「だから煽るなつての」

素晴らしく早く腰に手を回され、膝の上に乗せられる。
唇と唇が触れるその瞬間、ドアが開いた。

固まる空気。

ローがドアを開けた奴を連れて消えた。
遠くで聞こえた声は聞こえなかった事にした。
うん。キャスケットの悲鳴とか聞こえてないからね。

番外編IFくこんな二人になるのかも知れないく（後書き）

身内の中でも自分が甘えられる人の前なら彼女はへんなところで言葉遣いや行動が子供っぽくなる事があります。

言う言葉がひらがなだったりとか、はぐしたりとかキスしたりとか結構簡単にします。

次回も頑張ります！

番外編IF&未来〜こんな事があつたかもしれない〜(前書き)

1はある意味通常運転なローとディーネ

2は傍から見た二人

3はキラーの話(これは本編で絶対に掘り下げます)

そんな感じですが、どうぞ!!

番外編IF&未来〜こんな事があつたかもしれない〜

1 . なあ、知ってるか。こいつら、まだくっついてないんだぜ……
(もしローが自分の気持ちに気づいてなくてディーネが気付いていたら)

「キミにだつたら、殺されてもいいな」

ぽつりとその女は呟いた。

こちらに背を向けているからか顔はよく見えない。

ただ、その時の声は、

小さかったけど震えていなかったのだけは、よく覚えている。

そいつは幼なじみだった。

長い付き合いで相棒で親友で、大切な相手。

他の女と彼女を無意識に比較してしまう。

それぐらいにどうしようもなく俺の領域こゝろにいる女。

猫のような印象を与えるつり目気味の金の瞳。

思わず手に取りたくなる艶やかな黒の髪。

それと反比例して白い肌。

目を奪われる紅の唇。

中性的な美しい顔立ち。

背は女にしては高いが俺よりは低い。

そんな美しい姿をしている奴。

「……いや、キミになら全部あげてもいいってことかな」

そう淡々と言葉を紡ぐ。

どうでもいい、とでもいうふうに。

投げやりに見えてそのくせ自身できちんと考えているのは知っている。
る。

昔からの長い付き合いだ。

本気で本当だつてことくらいすぐに、分かる。

俺がそんな事を理解しているのは向こうだつて分かっているだろう。

昔からの付き合い。

それだからこそ、あいつは俺がどんな奴なのか知っているのに。

欲しい物を手に入れる為には何でもすることを分かっているのに。

仲間以外の他人の扱いなんて悪く。傲慢で。残虐な海賊。

民衆や海軍に残虐非道と唾棄される。

そんな人間が“死おれの外科医”だと知っている。

隙を見せない方がいいような人間なのに。

誰よりも長く側にいて性質とか性格とか知りつくしている癖に、

それを知つてなおも自分の重大な事を投げ渡してくる。

俺に重大で重要で大切な選択肢を選ぶ権利をよこす。

それは信頼とか好意とか、そういうものを多大に含んでいて。

俺は酷く動揺していると咄嗟に結論付けた。

突然、幼馴染に想いを告げられ、決定権を手握らされた。

その想いを自身の手がどうにでもできる。

そんな決定権を投げ渡された。

そんなものが手に入るなどと思つてもいなかった。

だから動揺が酷く、心臓が脈打っている。

ただ、それだけ。

その筈なのに。

此方を向かない背中が綺麗で。
それなのに、ひどく儂く見えて。
思わず抱き寄せた。

ディーネの薄荷の香りに包まれる。

「なあ、ディーネ」

もし俺がお前の事を今 全部手に入れたいとしたら、どうする？

喉にまで出かかった言葉を押し込めた。

まだ、お前に真意を聞いていない。

「お前は、それでいいのか？」

俺に全部くれてやって、お前にはなにも残らないぞ。

それでも、いいのか？

残るものなんて無いし、徳にだってならないじゃないか。

“飛剣”の賞金稼ぎらしくない。

「いい。だけど、代わりにこれを頂戴」

左手をそつと取られ、薬指に口付けられる。

何気ないしぐさ。

聞いたことの無い甘い言葉。

それにこめられた深い、感情。

気づいたら思いきりディーネの体を抱きしめていた。

ますます濃くなる薄荷の香り。

それに満たされると同時に頭がくらくらする。

「そんなものくれてやる。だから、側に居ろ」

好きだ。

零れ落ちた言葉はすとんと自身におさまった。

胸に満たされていく感情に、納得した。

なんだ、気付いてなかったただけなのか。

2. 気付いてないのは本人達だけ キヤスケツト（シャチ）視点
（もし、二人とも自覚していなかったら）

キャプテンがまた黒髪の女を侍らせていた。

きらりと磨かれた容姿に甘い香水の匂いを漂わせた女。

ようするに、そういう職種の女。

キャプテンは冷たい雰囲気を漂わせている美形だから。

色町とか娼館とかに行くと婀娜っぽいそういう女たちに絡みつかる。

そんなもてるキャプテンはいつも選ぶタイプの女がいる。

綺麗な黒い髪で、つり目気味の瞳、色の白い、

すらっとした、背の高い、きつめの雰囲気を持つ夜の美女。

いつも、そんな女を選ぶ。

最初は好みの問題かと思っていただけ、俺は気付いた。

全部あの女に重ねてるんだ、と。

一回、気付くと凄く目についた。

黒い髪の女を選ぶのは、あの女が黒髪だからで。

きつめの雰囲気でモデル体型の女しか選ばない理由が判明した。全部、あの女が根底にいるんだ。それを理解した後にあの二人を見て、目を奪われた。

あの女と二人でいるキャプテンの姿は嬉しそうで。

あの女を見つめる目が、手が、雰囲気が、全てが、優しくて。キャプテンが自分に纏わりつく夜の女に向けた事の無い表情で。キャプテンに惚れている女が一度でも見たら敗北を悟りそうなそんな二人。

しかし、本人たちは気付いていない。

はたから見れば、酷く甘い雰囲気を漂わせている癖に。

・・・一線を越えていない癖に。

あんなに甘く、淡い空気を作り出せるんだなあと思う。

大切だから、手を出さないのか。

大切だから、手を出せないのか。

守りたいと思っっているから気付かないようにしてるのか。

気付かなければこの関係を維持できると思ってるのか。

それでも、やっぱり関係は変わって来てる。

変わっている事に気付いている癖に、触れやしないけど。

早く、気付いてくれればいいのに。

俺が思う事はただ、一つ。

俺らの精神衛生上の為にもはやくくっ付いてくれないかな。それにつきるのだ。

正直に本音をぶつちやけると、一人身にはキツイのだ。

あの二人の空気とか、そのものが。

「くつつけ、気付け馬鹿キャプテン！」

3. どうしようもない、心

(ディーネ視点)

「(どうして、こうなったんだろうか・・・)」

腰にまわされた力強い腕。

首元に埋められた少し痛んだ金の長い髪。

その体は僅かに震えていて。

どうしたらいいのか、分からなかった。

「ロディ・・・」

声変わりした、声。

ごっごつとして角ばった腕と手。

髪に隠れて切れ長の蒼の瞳は見えない。

やばいなあと思う。

体を拘束されているけれど、まだ抜け出せる。

しかし、こんな至近距離だったらもつと力を込められると厳しい。

「・・・好きだ」

その声を聞いた時、失敗した、と頭の隅で別の自分が囁いた。

何がどうしてそうなったのかキラは、私に思慕を寄せているらしい。

なんでこうなるのか。

しかも、キラーは私が断ると知っているのだろう。いつもと違う様子で私を見上げてくる。漸く見えた蒼の瞳。想いを告げてきたキラーの目は、辛そうな色を帯びていた。

正直、困り果てた。

恐らく彼は、私が否定すると想定している。

そして、「ごめんなさい」と断られるのも想定済みだろう。

それを承知で想いを告げている彼。

どう言えばいいのだろうか。

どうすれば、一番いいのか。

私には分からない。

「好きなんだ」

それを分かっているくせに、告白を重ねる。

ぎゅっと腕に力を籠められた。

ぐっと近くなる距離。

「俺の傍にいてほしい・・・」

蒼い目はじつと私を見据えてきた。

視線をそらさないで真っ直ぐに、凜とした眼差しで。

キラーは、私の答えを待っている。

それに答える為に口を開いた。

蒼の目を見つめ返す。

「私は、……」

三十三話　私が気付いた事と再開の話について（前書き）

気付いた事と再会の話。

三十三話　私が気付いた事と再開の話について

S I D E : ロンディーネ

私はどうしたいんだろうか。

今までの様な関係には戻れなくて、あいつもこの関係を変えるつもりで。

そんな理不尽な事をされたのに。

それに怒らずに許せる自分がいて、
胸が痛くなる。

きつとずっと考えていて、確信犯だって分かっているのに。
あいつの事を思うと胸が痛いくらいに高鳴る。

多分、わたしはあいつのことが、

好き、なんだ。

そこまで、考えを進めた所で思わず蹲すくまった。

何これ恥ずかしい。

何が恥ずかしいって思考が。

うわああああ。何されても許せるって色々末期じゃん。
それって、あれだろ。

貴方になら、何をされても構わないってことだろ。
自分で言うのもなんだけど、私がこんな事を思うなんて、ハッキリ
言って異常だ。
非常事態だ。

何で、気付かなかった？

こんなに心の領域に踏み込まれるまで。

どうして、踏み込ませた？

踏み込まれてもいいと無意識に思っていたからだろう。

だったら、もう

とりかえしがないじゃないか。

いか。

「ッ~~~~~!!」

ヤラレタ！！

これはどう逃げても、私の負けに決まってる。

根本の部分からあいつの事を思ってるんじゃ、どう足掻いたって勝
てやしない。

ああ、それなら見事に負け決定だ。

私は気付く前から、あいつの

凜とした声が好きで、

頭を撫ぜるあの腕が好きで、

何でも治す魔法みたいな指が好きで、

硬そうに見えて実はやわらかい毛質の髪が好きで、

あの真っ直ぐな目が好きなんだ。

上手く言葉には表わせない。

多分、これが好きって言うことなんだろうなと、思う。

うっわぁ。

もう手遅れだ、私。

この感情に気付いたら終わりだと、頭のどこかで分かってたのに。気付いてしまった。

もう気付いていない、なんて言えない。

私はあいつが、ローの事が好きなのだ。

それはどう動かしようもない事実で、結果。

「……………どうしろていうんだ」

ギョツと上着を掴んだ。

心臓がうるさい位にどくどくと鳴り、赤みが増した頬はまだ普段通りに戻りそうにない。

嗚呼、畜生。

こんなの、どうすればいいのなんて知らない。
なのに、なんで？どうして？

……………こんなに暖かい気分になれるんだ。

「恨むよ、ロー」

キミの事を考える。

ただ、それだけでこんなになってしまっ。

SIDE…キッド

懐かしい、硝子の飾りのついた白の髪紐。
青みを帯びた長い髪。
黄金の色をした切れ長の瞳。

旧友の特徴と人目を引く長い刀を持った女がそこにはいた。

「やあ、久しぶり」

綺麗に整った顔立ちを僅かに緩めて、片手をふるりとあげる。
それは見覚えのある動作で、とある面影があった。

「……ロンドイーネか？」

「そうだけど？」

こてりと首をかしげる動作は昔と全く変わっていない。
それは、可愛らしい仕種のうちに入るだろう。
……こんな状況じゃなければ。

「で、なんでこうなったんだ？」

「あー、一言では言いにくいな……」

僅かに視線をそらされた。

言いたくないらしい。

……八つ当たり。

とか、そんな簡単な理由じゃねえよな。

というより、こんな惨劇を作り出すなといつべきなんだろうか。

その長い刀は抜かなかつたらしく、純粹に体術だけで暴れたらしいのびてる奴らが床に転がっているが切りつけられた痕跡は無い。赤くはれ上がった顔やら、叩き折られたイスやなんかはあるが。それも荒くれ者の多い港の居酒屋なら許容範囲だろう。

「まあ、いい。・・・こんな所で立ち話もなんだし、別の店にでも飲みに行かねえか？キラーとかドレッドとか待たせてんだ。お前ならすぐ馴染めるだろうし」

ここで針のむしろするよりいいだろ。

そう言うと、僅かに考えたそぶりを見せた後、こっくりとうなずいた。

昔から相変わらず、好奇の視線が嫌いらしい。

今も、ただ話しているだけでも降ってくる視線に苛々としていたようだ。

それを示すかのように若干、眉間にしわが出来て、苦い表情を見せている。

「・・・迷惑にならないなら行ってもいいかな？」

「ああ、迷惑でも何でもねえ。・・・キラーも喜ぶしな」

「？ 何か言った、キッド？」

「いや、なんでもねえ」

その答えに胡散臭さを感じたのが胡乱な表情で見つめてくる。何秒か、俺を見つめた後、追求しない事にしたのか溜息をついた。

「嘘が下手なのは、変わらないね」

「……うるせえよ」

お前こそ、ちつとも変わらねえくせに。

人の事、言えねえじゃねえか。

文句は口の中に消えた。

言ってもメンドイ事になるだけだ。

久しぶりに再開したんだ。

それに水を差すわけにはいかねえ。

くるりと踵を返す。

喧騒を背後に居酒屋から出た。

足音は殆ど聞こえないが、あいつがついてくるのが分かった。

やっぱり、昔と変わってねえ。

番外編未来〜大体なし崩しに二人はこうなる〜（前書き）

Q・何故、次の話が4分の三以上できてるのにこうなったか？

A・息抜きで書いたらローが動いた。キラーマジごめん。本編で出てくるのに色々確定してる。

Q・最初はロンディーネ有利なのにこうなったのは何故か？

A・惚れた弱み

Q・時間軸は？

A・賞金稼ぎ時代、しかしアラバスタ後。

Q・付き合っているのか？

A・一応

Q・何故、こんな甘いのか

A・あいつらだから

Q・エロさと言うかそこるところ、セーフなのか？

A・多分セーフ駄目なら消す

Q・結局、どっちが有利なのか？

A・覚悟が決まれば僅差でロンディーネ。男を魅せるならロー。

そんな感じですがどうぞ。

注意、ノンストップで甘いです。

むしろ、チヨイエロ？

苦手な人は避けても平気なお話です。

番外編未来〜大体なし崩しに二人はこうなる〜

にんまりと笑いながら、わざと音を鳴らして距離を一步詰めてみる。それに顔をひきつらせた相手も一步退がる。

その様子を鼻で笑ってまた一步、トンつと懐に飛び込んだ。

ギョツとして飛びのこうとしたのを視線で征す。

スツと僅かにつま先立ちになり両手を絡みつけるように顔を抱けば、戸惑いと困惑を露わにこちらを見下ろす青銀の瞳とかちあった。揺れていてもなお一本の線が通っているこの青が好きだ。

「ロー」

名前を呼ぶと、逃げようとしてか、僅かに足の重心を移動させる。

「……おい、何かキミ勘違いしちゃいないか？」

私が怒ってると思ってるのか。

意味も無く怒るといふのはしたことがないんだが。

思わず、じとつと視線をやると黙って視線をそらされた。

そのままじとつと視線を当て続けて見ると耐えられなくなったのか、逃げようとした。

私は少しふつと笑い、顔を近づけた。

「逃げないでよ」

（よそ見しないで、こつちを見てよ）

ひょいっと顔をさらにくつつけた。

こつんとおでことおでこが合わさる。髪が頬に合わさって、少しく

すぐつたい。

しかし唇を重ねるだけでは終わるはずなかった。終わらなかったのは悟ってくれ。

久しぶりの逢瀬だったんだから、仕方ないだろう。

自分の中で必死に弁解しながら、

ちゅ、ちゅ、ちゅっとそんな音を立てて口付けた。

しかし、主導権を私が握れていたのはそれまでだった。

ローを甘く見てたとしか言えない。私の恋人はとびきりの策士なのに。

久しぶりに会ったことによる気の緩みのせいだ。

きっとそうに違いない。

ローは唇を重ねるだけ、そんな可愛らしい真似はしなかった。

最初の衝撃から立ち直ると、あっという間に主導権を奪われた。

息継ぎの為にうつつすらと開けた唇に無遠慮に中へと侵入してきた。

舌を掬うように絡め取られる。

そのまま深くなっていくのに、思わず瞠目。

「っあ」

ちよつと待て、おま、容赦なさすぎるだろ。

最初に仕掛けた私が言うのもあれだけど、さあ。

くちりと僅かに水音が起こる。

自分の耳がいいのを初めて後悔した。死にそうなくらい恥ずかしい。

むしろ、いつその事殺してくれ。

私こいつが好きなのは稚い子供こどもがするような軽いもので、こんな深く貪りめが喰らうようなものじゃない。

でもしょうがないのかも知れない。だって久しぶりにあったのだから

ら。

こうなってしまうのも、しかたないのか……。

「ひ、っ……」

っ待て、待て、待て！！それとこれとは話が別だから！！
スルリと腰に片腕が回される。

ぐっと体と体の距離が近くなって、口内が深く犯される。
キミ、本当に容赦ないな！！

私の反応を試すかのように、舌が絡め取られる。
にやりとアオの目が笑った。

目からはいつもの冷静さは何処かに行って獣じみた光を帯びている。

（あ、逃げるの無理だ、これ）

唐突に理解した。

無理だ。絶対に無理だ。

私にだって出来やしない。

そう判断した。

むしろ、この男から逃げる奴がいるなら見てみたい。

逃げ腰なのを宥める様に髪を梳かれる。

容赦ないの口付けは、止まらないのに。

ひどい、男。

キラリと光る瞳には鼠を虐める猫の様な嗜虐性を秘めている。

キツと睨みつけると愉快そうに瞳の色が濃くなる。

若干、息が苦しい。

こつんと背中を叩いくことで意思を告げ、唇を少し離そうとしただ

けなのに、
その瞬間、顎に手をかけられ、さらに顔が近づけられた。

「むうっ!？」

おいおい、待て待て、ちょっと待て!!

いくら私でも、死ぬよ!?

息ができなきゃ死ぬってば!!

死ぬ死ぬ死ぬ!!

それなのに、この状態では当然抗議も出来やしない。

この、自己中DS海賊!

なんで私、キミが好きなの!?!自信無くなってくるんだけど!?!

それでも、無意識に首に手を回すくらいには慣れている行為で。

惚れた弱みつととても怖いものなのかもしれない。

霞がかった思考にそんな言葉が過った。

「……………っ、あ」

微かに擦れた声が漏れる。

口付け、一言で表すならそれだけなのに、何で私とこいつとはこんなに違うんだろう。

ただ情愛を送るモノでなく、むしろ逆に貪るように全てを奪っていく。

殆どしなかった抵抗も、拒む気力も、体を支える力も、思考する能力も。

言おうとした言葉がバラける。

「口、っ……………ちよ、っ、まてっ……………!」

ちょっとまずい。どれぐらいかって言うと本格的にまずい。

本気で止めてくれない。

頭が酸欠でくらくらする。

私の珍しく必死な制止を無視して、一方的にこちらの口内を荒らしている。

生理的にだが、じわりと目じりに涙が滲む。

首に回してた手を解き、背中を思いつきりひっかく。

後が怖い、知るかそんなの。

ローよ、マジ止まれ。

流石に私もこれ以上されたら死ぬる。

そんなことを考えているうちに膝から力が抜けて体が崩れた。

普通の女性よりも身長があるのに、普通に腰に回した手で受け止められる。

畜生、こういう無駄な優しさをさっきまでの行為に回せ。

頼むから。

必死の懇願が伝わったのか熱い感触がやつと口から出て行った。

今なら死ぬる。恥ずかしさというか羞恥で死ぬる。

酸欠や感情のあれやこれやで首筋や耳まで熱い。

きつと、顔や首は真っ赤だ。

「っ、はぁー、あ………」

漸く、呼吸が正常に戻る。

当たり前の空気がひどく美味しい。

涙が滲んでいるせいで視界は歪んだままだったけど。

何と云うか、恥ずかしい。

文句を言おうと口を開いた。

その筈なのに、

「、ばあか…」

長い間、人の体を自分勝手にしてきた相手に文句を言おうとしたのに。

こればかりは自分の性格が恨めしい。

こいつにだけは負けたくない。

そんなプライド、今だけでいいから捨ててしまえ、私！！

「これっぽちじゃ、全然満足なんて、できないっての……！」

私の口は真逆のことを勝手に口走っていた。

背筋が凍る。私は今すぐ死ねばいい。

今、何を言った、私の口よ。

恐ろしい事をローに投げかけなかったか？

誰か嘘だと言ってくれ！！

恐る恐る、視線を上げるときらきらと光るアオにかち合った。

整った瞳が僅かに細まり、ジツと見透かされる。

ドサリと床に落とされた。

起き上がる前に顔の横に片手を付けられ、腰の上にまたがられ、身動きが取れない。

冷静さを弾き飛ばした、獣の瞳と目があった。

瞳に混じる銀色は失せ、ただ冷たいアオだけが残る。

「なら、」

試してみるか？

その言葉に覚悟を決めた。

逆に浮いていた心が定まった。

「 やってみなよ」

そう笑って、ローの帽子を手に取り、部屋の片隅に放り投げる。
そしてパーカーの首元を引っ張り、噛みつくように口付けた。
啞然と目を見開く、ローに笑いかける。

そっちこそ、覚悟はいいか？
腹をくくった私は結構手強いぞ？

番外編未来〜大体なし崩しに二人はこうなる〜(後書き)

これからも更新頑張ります。

三十四話、私と再会と、運び屋とについて、（前書き）

南の海組と再会したロンドンディーネと、オリキヤラ。色々、秘密をもってるオリキヤラです。

三十四話　私と再会と、運び屋とについて

SIDE：ロンドーネ

キッド達がよく行くという酒場に招待された。

道すがらキッドに聞いてみた所、どうやら安い料理とお酒がメインで。

酒場と大衆食堂を一緒にしたような店らしい。

名前は、マリン・スノー海の雪。

サウザル南の海で海の雪という名をつけるとは小洒落ている。

まあ、そんな些細な事や近況を語っていると目当ての酒場が見えてきた。

目立つ色彩の看板。

窓から見える暖かな光。

ありきたりな酒場だ。

それじゃあ、久しぶりにキラの顔でも拝もうかとドアに手をかけようとした。

その瞬間、私とキッドの間を弾丸が通過した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず無言で、お互いの顔を見合わせる。

そんなことを思わずしてしまうくらい、唐突な出来事だった。

そして、大きな衝撃だった。

え、だって久しぶりに友人と再会したから一緒に夕飯でも食べるか

って流れだつたのに。
なんで、こんなスリルを味あわなきゃいけないの？

「（こんなに治安が悪いところ根城にしてんの？）」

「（んなわけねえーだろ！！）」

思わず小声で、会話を交わす。

この中に入るのか・・・？

そんな空気に陥る中。

また、銃声。

二人で顔を見合わせ。

うなずき、ひとつ。

お互いにドアを蹴飛ばす。

ほとんど、ぶち破る様に酒場に入る。

するとそこは、戦場だった。

（なんでさ）

割れた酒樽。粉々の食器。零れ落ちた酒。

折れた椅子の足。倒れた食卓。

引き裂かれたテーブルクロス。

踏みつけられた料理の数々。

あちこちに倒れ、のびている若者。

そして、にらみ合い、対峙する二つの影。

一人は稲穂みたいな金の髪、今は髪で隠れている切れ長の青い目が

特徴。

常に冷静で端正な顔をしている。

真正面から向かい合っていないのにそれが分かるのは、私と彼は前から知り合いだからだ。

キラーと対峙する黒コートの銃士^{ガンマン}。

武骨だが洗練されたフォルムの銃がきらりと光る。

癖のある黒い髪に、深い色合いの黒の瞳。

針金細工の様な印象を与える細長い、スマートな体。

おい、何で此処にいる。

(キラー・・・と、ウインクル!?)

とりあえず、キッドと二人でこれをどうにかしよう。

二人を止める為に口を開いた。

SIDE:ウインクル

嫌いな名字を呼ばれて、こちらが僅かに固まった瞬間。それを利用して戦闘行為は終了した。

とりあえず、キラーと呼ばれていた骨のありそうな奴との戦闘は避けられたらしい。

シュツとマッチを靴の底でこすって煙草に火をつけた。

苦い味が口内に、紫煙がぼろくなった酒場に広がる。

睨みつけてくる奴らを眺めながら、口を開いた。

渡り鳥に文句を言う為に、

「・・・渡り鳥^{ツバメ}、あんた、酷くないか？」

「うるさいよ、魔弾^{またん}。人の友人になにしてくれる」

キラリと色合いの濃くなった金の瞳に一瞥された。
若干トーンの低くなった声は冷めている。

やはり、多少怒っているらしい。

まあ、いきなりこうじゃ怒っても仕方ないか。

「喧嘩を売られたから、買ったただけだ。渡り鳥^{ツバメ}」

「限度があるだろう。それとその渡り鳥^{ツバメ}呼びはやめると何度言えば分かる」

「何を無体な。あんたの名前はロンデー^{ツバメ}ネだろうに」

「止める。私の名前で遊ぶな、これ以上遊ぶ気なら私もキミもマーシャルと呼ぶぞ」

世界で一番憎い名字で呼ばれた。

唸る様に釘を刺されている。

これ以上からかうとまずい。

どんな爆弾を投げつけてくるのか想像がつかない。

「分かったよ、ロン」

「ありがとうよ、ウインキー」

吐き捨てる様に呼ばれたとなると、怒りはまだ鎮静していない様だ。愛称で呼ばれたから、本気では怒っていない様だけだ。

言葉がとげとげしい。

「・・・誰なんだ、こいつ」

「魔弾のウインクル」、結構有名な賞金稼ぎ兼運び屋だよ」

金髪の問題に答える、ロン。

少しは気分がましになったようだ。

「知り合いなのか、ロディ」

「ああ、手紙を運んでくれる」

さらりとこれまた、ロンが答えた。

適当に倒れた奴を寝かせたり座らせたりしながら触診してみたものをしてる様だ。

「能力が使えて速いから」

こちらとあちらが多少以上に縁があると知ると多少だが金髪と赤毛の視線が柔らかくなった。

本当に多少だから視線はまだ痛い。

「そうか」

「ロン、これが今回の分だ」

鞆に入れていた分厚いのが多い封筒を相手の掌の上に落とす。
いきなりだったのに普通に対応された。

・・・少し残念。

「っ!?!いきなり落とすな、びつくりするわ!?!」

「それは、すまないね。でもあなたなら落とさないだろう」

「その見透かしてる様な、横柄な態度が嫌いだ・・・!」

「何を今さら」

それに、あなたの方が性質が悪い。

その言葉は結局、口内に押し込めた。

「じゃ、私はこれで」

「なんだ、飲んでかないのか?」

「あんたみたく、肝が太くないんだ」

それに、金髪のおにーさんが怖いし。

茶化す様に答えて、指をパツチンと鳴らした。
ぐるりと変わる光景。

あきれ顔の友人^{ロン}の顔が目に入った。

SIDE:キラ

ぱちんという音の後、黒が空間に飲み込まれて消えた。

「あいかわらず、だな・・・」

ロディはあきれ顔でそれを見送っていて、疑問が胸に湧いた。

「ロディ」

「なんだい、キラー？」

「悪魔の実か？」

言外にあいつは能力者かと聞いたら、簡単に頷かれた。金の瞳が伏し目がちに気まずそうになる。

「本当はあいつも賞金稼ぎだから守秘義務があつて言っちゃいけないんだけど、あいつ民間人に手を出したからね」

民間人つて俺らか。

うん。だって、まだ海賊旗をかかげてないだろ？

・・・普通にいなされた。

「マーシャル・D・ウィンクル。二つ名は“まだん魔弾”でパラミシア超人系悪魔の実、トビトビの実の能力者」

要するに、と整った唇が動きだす。

「瞬間移動というか空間移動の出来る能力者だ」

「ハア！？」

キッド・・・、驚いたのは分かるがいきなりどうした。

「そんなんありか!？」

「悪魔の実なんて、なんでもありだよ」

嫌な事でも思い出したのか、やや険のある声を出した。それを流して問いかける。

「空間移動ってどういうことだ」

「その名の通りだよ、キラー。……あいつの獲物は銃だから射程を無視できるってのが能力最大の強みで、あいつをしとめたいのなら能力を使わせる前に白兵戦に持ち込まなきゃいけない」

淡々とロディは答えながら割れていなかったグラスを三つ、カウンターに出した。

同じく割れていなかったであろう、ボトルを持ってきた。

「そもそも、なんであいつはこんな所に来たんだよ……」

わけが分からんとキッドはぼやく。

確かに行きつけの店をこつとも破壊されるとぼやくくなるか。俺も、頭が少し痛いしな。

「ああ、えつとな」

「どつした、ロディ」

えらく、挙動不審なロディがいた。目が泳いでいる。

「多分、私のせいだ。・・・ごめんなさい」

「「ハア!?!」」

「定期的に、手紙の配達をしてもらってるんだが、私がいる所と設定してあいつ跳躍したんだろ。だから、私がいる島のここに落ちたんだな」

急に現れたあいつと喧嘩寸前になったんだろ？

そう、尋ねてくる様子は珍しくおどおどしていた。

「そうだな……」

「だったら、私のせいだ。本当にゴメン！」

「まあ、いいだろ」

そうやってキッドはロディの頭に手を乗せた。

おい、俺もやったことないんだが、それ。キッド……。

思わずじとりとした眼で見ると、視線をそらされた。

「飲もうぜ」

「そうだな……」

喧嘩になったのは俺らのせいでもあるしな。

今回はあまりロディは関係ない。

そう判断して、壊れなかったカウンターの椅子に腰かける。

「え、っ」

「お前も座れっつの」

キッドに促されて、ロディも腰掛けた。

いつも凜としているのにおどおどとしているからか、仕種が可愛らしく感じる。

「じゃ、再会を祝して」

「おじよ」

「…いいのか、これで」

悩んでるロディにグラスを回して黙らせた。

「」「」「乾杯」「」

再開して、初めて三人で飲む酒はひどく甘かった。

三十四話 〽私と再会と、運び屋とにっいでゝ (後書き)

これからも頑張ります。

番外編未来〜寒い日は二人で〜（前書き）

副題と言うか、別名、寒い日にかこつけていちゃいちゃする人達。
多分、あまいです。

ローとディーネが恋人同士になつてゐる時間軸です。

番外編未来〜寒い日は二人で〜

「今夜は寒いな」

そう、私の隣でローが呟く。

ちらちらと夜空の下で牡丹雪が舞う。

「うん、寒いね」

二人で僅かな間隔をあげながらそう呟く。

でも、北の海イヌマルよりは寒くない。

そう思ったし、実際そうなんだけど、寒い事は寒い。

ひりゆりと音を立てて、冷たい冷気をおびた風が通り抜けた。

僅かに乱れた髪を耳にかけなおす。

私とローの間には僅かに隙間があいている。

昔から、この距離なのだ。

手と手をつなげそうでつなげない、そんな距離。

私が海賊になつてから、ローの横に居るようになってからも変わらない私の指定席。

ここは、ペンギン君にも譲れないな、と笑ったら、何故だと指摘されたこともある。

恋人同士なのに、なぜそれも幅をあけるのかと。

それには笑って答えなかったが、然したる理由があるわけでもない。照れ隠しもあるけど、まず第一に、これくらいがちょうどいいのだ。手を伸ばせば届く距離に居て、何時でも視界におさめられて、絶対

に存在する事がわかる。
それは、この距離だから。
これでちょうどいい。

それに、今更、恋人のように寄り添うにはお互い無理がある。
恋人同士である前に相棒なのだ。

背中を任せられるし、露を払うことも出来る相手だから。
お互いに容赦がないし、ぶつかり合うことだつてある。

私達はお互いを理解し合っているが同時にお互いの生き方を理解し
がたいとも思っている。

そんな間柄なのだ。
だから、これぐらいが一番お互いにとって楽なのだ。

「・・・まあ、北あそこの海よりは寒くないが」

「そもそも、あそこよりも寒い所なんてあるのか？」

「国引きオーズが死んだ国がインペルダウンのLevel15くらい
なもんだろ」

「どちらも、嫌気がさすね」

「まっただ」

他愛のない、ささやかな会話。

賞金首とその相棒らしからぬ穏やかで平凡なやり取りだ。

賞金首で無いこいつと居る時は、私はこつこつ細な会話とかをメ
インに話す。

この男は賞金首の“死の外科医”である前に、トラファルガー・ロ
ーという人間なのだ。

たまには気を休める時間だって必要だろうと私は思う。

結論を言って、思わず笑った。

ローは肩を震わせて、私は喉を震わせて笑う。

似たり寄ったりな思考回路なのだ。本当に。

まったく、寒い場所育ちが寒い場所が好いているとは限らない。

得意だけど、別段、違う環境でも生きていけるのだ。

笑ったままにローは、口を開く。

「それに、俺はお前の手がこれ以上冷たくなるのが嫌だ」

何気ない動作で掴まれた手。

軽い動作のままに頬にあてられる。

温かい温度が手に伝わる。

思わず、目を瞬いた。

顔がうつすらと熱を帯びていくのが分かる。

「っ」

目眩がした。いくらたってもこういう行為には慣れない。

相変わらず、この男はズルい。

卑怯だ。

こんなことをこのタイミングでするなんて。

耳がじりじりと音を立てる。

絶対に紅くなっているだろう。断言できる。

「ロー、」

ああ、舌がもつれてく。

この幼馴染で、恋人の男にはかなわない。
欲しい時に、こうやって甘やかしてくれる。

それは他人には分かりにくいかもしれないけど、私にとっては貴い
もので。

優しくて、穏やかな感情で。

大切なものだった。

「素直じゃないね」

(私が一番、素直じゃないけど)

「お互い様だろ？」

(その通り)

そんなことを認めた後に、苦笑いで押し込めて。

頬に添えられていない方の腕をローの首に絡めるようにして引つ張
った。

私も身長はある方だけど、ローも高いから、少なからず身長差はあ
る。

それなので、ローが私の方に僅かに踏鞴を踏むようにつんのめる。
僅かにざらついた感触が唇に当たる。

間近に映る切れ長の青銀の瞳が驚いたように仄かに丸くなった。

それに内心、にんまりとする。

「こういう時は目をつむるのが礼儀じゃないの？」

そうからかうように笑ったら、ぐいっと唇を奪われた。

目をつむる前に見えた顔は僅かにむっとしたような、そんな顔をし
ていた。

観察できたのはそこまで、後はもう、察していただきたい。

・・・照れ隠しでこんなことしたなんて一生の秘密である。

いや、いちゃつきたいという気持ちもあったが・・・。

冷静に考えたら、こっちの方が恥ずかしいんじゃないだろうか・・・？

番外編未来〜寒い日は二人で〜（後書き）

次回も頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4689/>

鷹の娘は何を見るか

2011年12月11日00時57分発行